

る口實となり易いものである。老年の男女は宗教上の話をし經文を反論し、佛陀の讚辭を繰り返してゐるが、外のものには宗教には餘り懸念してゐない。殊に弱性の若い人達は自由にハチャ／＼喋つて楽しんでゐるのである。彼等にとつては御喋の絶好の期會を與へる饗筵なのである。この兩期の間虔敬な信者の人達は憤氣もなく比丘等に物を施し、生活に必要なものはどし／＼精舎に送り込まれる。中にはある熱心な俗人は布施をしたり、塔に參詣する外ある範圍を限りて、禁戒を守り斷食をする。然しこれは非常に数は少ないのである。この時期の間、僧侶は用意の場所へ招待され法を説き、集まつた聽衆から施物を受ける。その光景をいへば、比丘等は高座に上り、群衆に面して、誘惑物を見ないために大きな扇を靜かに取り上げて面を覆ふ。さうして比丘等は佛陀の傳記のある部分を合唱し、五戒や他の諸戒の文を讀み上げる。これは皆巴利語でせらるゝので一般の聽衆にはわからないのである。で、この務が終つて、比丘は弟子を率へ布施物を持つて精舎に歸るのである。今は殆んど絶えたことであるが、ある熱心な比丘はこの兩期の全體又は一部、獨り閑靜な處へ退いて經典を讀み、その主要な點や、宗教上の格言を默想するのである。「彌旬の原譯者は、これに附け加へて居る。この人達が前生の善業に依つて、この幸福を得たことを注意せねばならぬ。」

佛陀はそれらの貴公子を道に入れて、坐を起ちて、優留毘羅の森へその旅行を續け給うたその當時、優留毘羅の森には世に卓越した三人の仙者が住み、多數の弟子を統率して名聲を遠くへ馳せて居つたのである。第一の仙者は五百人の弟子を統領し、第二は三百人を第三は二百人を統率して居つた。優留毘羅迦葉、那提迦葉、伽耶迦葉と呼んで居つた。佛陀は優留毘羅迦葉の幽居へ進んで、迦葉に宣うた。「私は身のまはりのものは少々持參をしたが、憩

ふべき場所が入用である。どうか今宵は御身の厨に過さして貰ひたい。」迦葉はこれに答へた。「御身の持物は甚だ少ないから、私の厨に自由に御用を御足しになるのは御心のまゝであるが、その厨房の龍神は、非常に氣荒であつて、恐ろしい毒を持つて居ることを注意して頂かねばならぬ。」佛陀は答へ給うた。「許して下さいさへすれば結構である。」佛陀は厨房に入り、跏坐して、正身を持ち、深き默想に入り給うた。龍神は直に現はれて、見も知らぬ男が、自分の監督して居る場所へ、敢て無斷に宿り込んで居るのを見て激怒して、この侵入者を驅り出さうと決心した。彼は先づ、見も知らぬ男の顔へ向けて煙の雲を吹き始めた。佛陀は自ら宣うた。「私はその龍神に害をなさぬであらう。皮も骨も肉も害はないで、彼の私に向ける武器を以て彼を征服するであらう。」茲に於て、佛陀は神通を以て濃い／＼煙の雲を起して、龍神の煙を消し、龍神をして更に他の攻撃法を取らねばならぬ様に餘義なくせしめ給うた。龍神は次に猛火を放つて世尊を襲うた。佛陀はこれに倍増す炎を揚げて打ち勝ち給うた。比ふものもない猛火の輝きには、仙者の弟子も驚いて、みじろきもせず立ちとゞまり佛陀の魏々たる光顔を仰いで、その無雙の不思議力を驚嘆して止まなかつたのである。龍神は遂に屈して、戦を止め、佛陀のなし給ふまゝにした。翌朝佛陀は戰慄いて居る龍神を

捕へて鉢の中に入れ、優留毘羅迦葉に示し給うた。迦葉はこの客人の力に驚き乍ら、しかも「この阿羅漢はそれでも未だ私には及ばない」といつた。迦葉は佛陀に暫らく僧舎に止まり給はんことを願ひ、滞在中は食事を給することを約束した。佛陀はこの提言を聞入れて、迦葉の住窟に近い森の中へ居を定め給うた。その夜、四王天の天主が佛陀の御座近く天降つた。彼等は非常に美しく輝いて居る。すべて赫灼たる光輝を以て森の中を満した。これを見たる迦葉は驚いて佛陀の前に進み、「大比丘よ、食事の時が來ました。客人の用意は出來ました。どうぞ來て御召上りを願ひます。だが、昨夜この森の中に非常な輝のありましたはどういふ譯でありますか。人々は近所の森がすべて炎々と燃え上る猛火に緣取られたと思つてゐました。」佛陀は答へ給うた。「これは四王天の天主が私の説法をきかんがために私の前に來たためでありました。」迦葉は自ら思ふ様、「諸天がこの人を禮し、説法を聞かんために來る位であるから、この人の徳は誠に偉大なるものであらう。然し猶我に比べることは出來ない」と。佛陀は食を訖りて例の閑靜所へ歸り給うた。

又ある時、中夜釋提桓因が佛陀を御尋ね申し、その神力を以て光明を放ち、宛然千個の燈を一時に點じた様な明さを示した。翌朝迦葉は大比丘の處へ行つて食事の時を報じ、前夜

のそれにも増した昨夜の不思議の光について尋ねた。佛陀は釋提桓因が聞法のために下降したのであると教へ給うた。迦葉は自ら謂ふやう、「この沙門の威光と尊嚴はまことに偉大である。然しかれば猶阿羅漢ではない。」佛陀は食事を訖りて坐所へ歸り給うた。

又ある夜、同じい時刻に、佛陀は梵天の奉侍を受け給うた。その放つ光明は前のそれ處ではない。迦葉は例の如く食事の時を報じて、昨夜の出來事の由來を尋ねたが、佛陀は梵天主が法を聽かんがために下降したのであると示し給うた。迦葉はこの様な偉大なる訪問者を有する大比丘の徳に益々驚き乍ら、しかも猶、「この比丘は私に比ぶべき阿羅漢ではない」と我慢に思つた。佛陀は食事を訖り、例の如く靜かに居所の森へ歸り給うた。

ある日、その國の人々がより集まつて、迦葉のために大供養をするといふことがあつた。迦葉はこの快報を得て、心密に思ふやう、「人民は大變に豊かに私を供養せやうと準備をして居るが、この沙門がその場合に居てくれねばよい。もし彼が人民の前でその不思議の力を現はして呉れると、人民は彼を嘆賞して彼を供養するやうなことになるかもしれない。されば従つて私の供養が減つて來る。明朝は何とかして沙門の來ないやうに計らねばならぬ。」佛陀は既に迦葉の心中を洞察して、迦葉の妨をなさんことを好み給はず、自らウトカラの鳥

に往いて食糧を集め、阿壽達池の邊に、食事をなし、池畔に終日を費して、翌朝神通を以て例の森に歸り給うた。迦葉は例のやうに、食事の用意の出来たしらせをしに赴いて、昨日客人のこの森より退かれた理由を尋ねた。佛陀は怒の情の微塵程も交つて居らない静な態度を以て、迦葉の昨日の心中を語り、自分の昨日の模様を語り給うた。これをきいて迦葉は驚き自ら思ふやう、「人の心中の秘密までも知り通すといふは、この沙門の智識はまことに計られぬものがある。彼の力は驚くべき程偉大である。然し、彼は猶我に比すべき阿羅漢ではない」。佛陀は食事を終りいつもの森へ退き給うた。

ある日、佛陀は衣を洗はんと思ひ給うた。帝釋天はこの世尊の御心を推知して、小さな四角の水溜を作り、恭しく佛陀に近づいて、この池の中にて衣を御洗ひなされるやうにと願うた。佛陀は心中に衣を磨る石がないかと探し給うた。帝釋天は直に石を持つて来て、「尊き佛陀よ、茲に衣を磨る石があります」と申上げた、佛陀はまた衣を乾す場所を思ひ給うた。帝釋天は迦拘婆樹をみて、その枝を曲げ、「世尊こゝに衣を掛け給ふ所があります」と申上げた。佛陀はまた衣を擴げる場所を思ひ給ひ、帝釋天は大きな滑かな石を持つて来て、「尊き佛陀よ、こゝに衣を擴げ給ふ場所があります」と申し上げた。その朝迦葉は例の如く

食時のしらせに世尊の住所にいたり、驚いて世尊に申した。「比丘よ、已前は茲に溜池も、石もなかつたのに、どうしてあるやうになりましたか。迦拘婆樹が枝を垂れて居るのもどういふ譯でありまじやうか。」世尊は帝釋天のした仕業であることを語り給うた。迦葉は大比丘の大徳と卓越とに前よりも驚きを増した。然し彼は已前の偏見を固執し、大比丘は猶我に比ぶべき阿羅漢ではないと思つて居つた。佛陀は食事を訖りて、自らの森へ歸り給うた。

ある時、迦葉は例の如く、食事の迎に佛陀の所に出掛けた。佛陀は「私は少し要があるから先へ行つて下さい。後から行くから」と宣うた。そこで迦葉は一足先へ窟へ歸つた。佛陀は先づ閻浮樹の果實を取りに行つて、迦葉が食堂へ入る前に其場處へ達し給うた。迦葉は佛陀が先着して己を待ち給ふをみて全く驚かされた。迦葉は驚愕の情を制することが出来ないで、「どうしたのです。どの路から貴比丘は左様に早く私の前に到着し給うたのです」と問うた。佛陀はこれに答へ給うた。「汝に別れてから、私は閻浮樹の果實を取りそれから来たのであるがそれでも汝より早かつた。茲にその果實がある。色の美しいに加へて香氣が好い。私はこれを以て汝に供養せんと思ふのである。」迦葉は答へた。「それは私の頂くべ

きものではありません。貴比丘の御食べにならねばならぬものであります。迦葉は自ら謂ふやう。「大比丘の神通力は驚くべきものである。然し猶彼は私に肩を並べるべき比丘ではない。佛陀は米の食を召して、例の森へ退き給うた。」

またある日、佛陀は閻浮樹の附近の椽樹の果實をとり、西の島の果樹こみの果實を取り來つてその神力を示し給うた。またある日には、切利天に昇つてその美しい水蓮をもたらし、迦葉の食事を用意する處に下り給うた。迦葉は天界の華の餘りに美しきに眩目して心中に謂ふやう。「個様な僅の間に天界に上つて美しい水蓮を持ち來る大沙門の神通力は誠に驚くべきものである。然し彼は猶我に比ぶべきものではない。」

ある日迦葉の弟子等は薪を割るに忙がしかつた。中に大きな丸太があつていかにしても割ることが出来ない。迦葉は「大沙門は神通を有して居るから、この場合彼を試みてみやう」と思ひ、この丸太を割つて下さいと願うた。佛陀は瞬く間に五百片に打ち割り給うた。弟子等はこの薪に火を點せんとしたがどうしても點火することが出来なかつたので、迦葉は再び佛陀に助力を願ひ、佛陀少しく手を動かし給へば五百の薪は一時に點火して、恐ろしい光景を呈した。弟子達は大火災を恐れて、火を消して下さいと願うた。佛陀これを許し給へば、五百の火は一時に消滅した。

一月と二月の寒い時節の間、重いつめたい露の下れる時、迦葉の弟子等は尼連禪河に沐浴して自ら樂しむを常とした。佛陀は河の岸に五百の火を點じ、弟子等は流れより出で、この火に身を温めた。彼等はすべてこの大沙門の神通力を驚嘆した。然し迦葉は、猶我に比すべき羅漢ではないと固執して居つた。

ある日篠つく様な雨が降り注いで河水が國中に溢れた。然し、世尊の住し給ふ場所へは水は來なんだ。佛陀は自ら思ひ給ふやう。この水の真中へ美しい乾地を作らうと。佛陀はこの乾地を經行し、沙塵軽く上りて空中を霞めた。迦葉は佛陀の身の上を案じ、小舟を舐え弟子達の助を借りて佛陀の森へ漕ぎ寄せた。然し迦葉等が、佛陀の森へ達して、溢るゝ水の代りに沙塵の被ふ乾道を見佛陀のそらに逍遙し給ふを見奉つた時に彼等の驚きはいか許りであつたであらうか。迦葉は又自ら謂ふやう。「大沙門の得る所の道は誠に大なるものであらう。然し猶私の如き阿羅漢ではない。」佛陀は迦葉の心中を推知し、自ら思ひ給ふやう。この仙者が、「この沙門も偉大であるが、然し私は彼よりも偉大である」と思つて居るとは既に久しいものである。今こそは恐怖と驚愕とを與へて目を覺ましてやるべき時であ

る。佛陀は迦葉を呼びかけ、「仙者よ、汝は阿羅漢果に到達した沙門ではない。汝は四聖道の功德を行つたことがない。それ故、汝は決して沙門果のものではない。私は前生に於てこの聖果に達すべき功德を修したるに依つて、今生に於て遂に佛果を得たのである」と教へ給うた。この思ひがけない佛陀の御語に驚いて、迦葉は謙下して跪坐し、佛陀の御足に頭禮していふやう。「尊き佛陀よ、私は貴比丘の教に従つて比丘となりたく存じます。佛陀は答へ給うた。「迦葉よ、汝は五百人の弟子を持つて居る。行いてこの趣を彼等に語りよ。よ。こゝに於て迦葉は弟子の集まつて居る所へ行つて彼等に語つた。「私はこれから大沙門の教の下に従はうと思つて居る。五百の弟子も亦皆師に従うて佛陀に歸依せんと願うた。迦葉は今までこのやうな善い師匠であつたのである。彼等は立ち上つて、結髪、又杖、毛帶、蜜澁袋等の器具を集めて、河中に投じ、佛陀の許に至り、佛足を頂禮し、佛陀の下に比丘とならんことを願うた。

那提迦葉は、河上から器具の流れて来るのを見て、弟子を集めていふには、「何か異變が兄の身の上につつたかも知れぬ。行つて見ねばならぬ」と。那提迦葉は兄の迦葉の處へ来て、迦葉の歸佛を聞き、凡ての弟子を率へて佛陀の許に至り佛足を頂禮して、弟子とならんことを願うた。

を願うた。伽耶迦葉は那提迦葉の河下に住んで居つたが、兩兄の弟子等の器具が河上から流れて来るのをみて、二百の弟子を従へて優留毘羅迦葉の住家へ急いだ。事の始末を聞いて、彼も亦佛足を頂禮して弟子とならんことを願うた。彼等の願は皆許された。優留毘羅迦葉の歸佛は、三千五百六十人からの遊行者を伴うて佛弟子とならしめたのであつた。

佛陀の説法にはそれに意味をつけ、證明をするために奇蹟の伴ふことは前に述べたが、今三迦葉及びその弟子の入信はこの断定を一層明確にするのである。この時、佛陀は優留毘羅迦葉の最も頑強な抵抗を受け給うた。我々の大師がこの勝れた聽者の胸に信仰を注ぎ込まんがためにあらゆる説得を試み給うたことは疑ひない。けれども迦葉は徳も智慧も勝れ、誰よりも勝つて居ると思つてゐる人である。佛陀の最善の議論も、自負の人、法を與へるに慣れて聞くに慣れず、博大の名聲ある人には一向力がなかつた。佛陀は茲に傲慢なる隱者の頑強にして盲目的の抵抗を屈服するために、智慧を振つて神通を現して見せねばならぬ様になり給うたのである。佛陀はこれまで人を教化する上にこれだけの大きな犠牲を拂うたことはなかつたのである。然しこれは、この大なる犠牲に相應しい獲物であつた。迦葉は佛陀の一番しつかりした一番熱心な弟子となり、佛教の宣傳には非常に働いた人となつたのである。彼は佛教僧侶の内にては一番名聲の高い人で、彼の名には「即ち大といふ字が冠せられた程であつた。佛陀の滅後は佛教徒の教長となり、その心配と勉強に依つて、二百五十人の結集が、王舍城に於て阿闍世王の保護の下に行はれ、佛陀の權威を振ひ落さうといふ不如の比丘を叱責することとなつたのである。この迦葉入信の物語に就いて、注意深い讀者は、佛教の興起時代に、他の哲學派の主長等が、いかなる位置を占めてゐたかを知るに就いて光明を投ぜられたを感ずるであらう。それらの聖者達は浮世の喧騒を離れた閑靜の地に住み、最初は一人若くば二三の

人々と暮してゐたのである。彼等は終日研究と黙想に費し、その研究と黙想の目的は形而上學と道德の無限の廣野であつたのである。彼等の食物は簡單平易で、印度の熱信家、狂信者のみがなし得る程度の節制を持つてゐたのである。この人達のうち、智慧徳行の殊勝であるといふ名聲が多數の弟子を閑靜の地に引き寄せ、弟子等はそれのすべの點に超え勝れた師匠の教授訓誨の下に學問修行せんと望んだのである。この迦葉は多數の弟子を伴うてゐたのであるから、當時國中では名聲の高かつた人に相違ない。謙遜の徳は印度外の國でも普通異端者の有せないもので、自負、自尊は自分の殊勝の自覺と、弟子達の無暗に奉る讃辭とから生じてそれに自ら捨てた社會と遠ざかつてゐるために殊更彼等の、心中に養はれてゐるのである。精神的自負心は、狡猾な敵のやうに疎笨な欲情のなくなつた彼等の心中を占領するのである。長兄迦葉の行爲は以上のことをよく證明してゐるのである。

第七章

- (一) 山上の教誨
- (二) 頻婆娑羅王佛陀を迎ふ
- (三) 迦葉の奉答
- (四) 頻婆娑羅王と臣下に對する教誨

- (五) 佛陀王舍城に入り給ふ
- (六) 竹林精舎の奉獻
- (七) 舍利弗目連の改宗
- (八) 王舍城の比丘に對する讚賞

佛陀は千人の弟子を伴ひて、ガヤー河の畔にあるガヤーシーサの村に入り給うた。この村の傍に象の頭に似た形の山があるがこの山の頂に、大きな岩があつて、佛陀と佛弟子の座席を収めるに充分の廣さを持つてゐた。佛陀は弟子と共にこの山の頂に昇りて、岩の上に安坐し、弟子等と呼んで左の如く語り給うた。

「愛する比丘等よ。人界、色界、無色界に於てめぐりあふものはみな燃ゆる炎である。そのゆゑは、見る眼が燃ゆる炎であるから、眼に依つて見らるゝもの、見るといふと、見て生ずる感覺も亦皆すべて燃ゆる炎となるのである。見る眼に依つて生ずる感覺は、苦樂の感情を伴ふ。この感情も亦燃ゆる炎である。然らばかくの如く炎を生ずる原因は何かと曰はゞそれは、欲情と瞋恚と愚痴と、生、死、老、危の火のためである。又、耳も燃ゆる炎である。從

つて音響、感覺、知覺も亦燃ゆる炎である。その音響に引き起される苦樂の情も亦燃ゆる炎である。これらは皆欲情、瞋恚、愚痴、生老死、危、涙、苦痛、煩勞の火より生ずるものである。また嗅覺も燃ゆる炎である。香境、香の感覺、香の知覺、これはすべて燃ゆる炎である。それ故、嗅覺から生ずる苦樂の情は欲情、瞋恚、愚痴、生老、死、不安、涙、苦痛、悲哀から養はるる燃ゆる炎に外ならない。また觸覺も燃ゆる炎である。味境も、味より生ずる感覺も知覺もみな、欲情、瞋恚、愚痴、生老、死、危、涙、苦痛、悲哀の火に養はるる燃ゆる炎である。また觸感も、觸境も、觸より生ずる感覺、知覺、すべて燃ゆる炎である。これより生ずる苦樂の情も、欲情、瞋恚、愚痴、生老、死、危、涙、苦痛、悲哀によつて養はるる燃ゆる炎である。又心も燃ゆる炎である。心の對境も、それより生ずる感覺も知覺も燃ゆる炎である。心に依つて生ずる苦樂の情も欲情、瞋恚、愚痴、生老、死、危、涙、苦痛、悲哀に依つて養はるる燃ゆる炎である。愛する比丘等よ、私の教を了解し、教に依つて身を處するものは智慧深く、我が弟子と呼ぶる、價值のあるものである。彼等は感覺と感覺の對象と、物質と、苦樂、及びすべての感情を喜び願はない。彼等は貪欲を離れて居るから欲情を起さない。彼等は證果にいたるべき眞智を得て、他生の災禍を解脱して居る。最勝の行を成就して居るから、最早行

ふべきものがない。彼等は十六行相(?)の指導を要せない。彼等はこれ以上に超えて居るからである。」

佛陀はかくの如く語り終つて暫らく語を止め給うた。聽衆はすべて欲情の羈束を免かれ、物情から離れ得たことを感じ出した。只の比丘であつたものがすべて阿羅漢となつた。

最勝の世尊、佛陀はガヤシーサの村に寂定を味ひ給ひつゝ、嘗て以前に菩薩で在つた時槃荼山バンダ近くにて、頻婆娑羅と會して、成道の後、その國に至つて、法を説かうと約束なされたことを思ひ出し給うた。そこで佛陀はその約定を果さんために千人の弟子を伴うて、王舎城に向ひ給うた。王都を去る程遠からぬ所に到着して、城から三ガヲサンガヲ程の杖林園ウツトヒノクワツヤナ、椽樹の生い繁つた園林に入り給うた。王は佛陀の到着をきいて、國民に布令をした。「明王家の裔なる大沙門喬答摩佛陀は我等の國に入つて、今椽樹林に止り給ふた。」と。この福音は直に國中に響き渡つた。人民は互にいふやう。「大沙門喬答摩はまことに來給うた。彼は人、色無色の三界のこゝを知り通してゐ給ふ方である。彼は嚴かなそして愛樂すべき教法を説き給ふのである。その教へ給ふ道徳は丁度新にみがき出した貝殻のやうに清淨である。」頻婆娑羅王は、十二萬の軍勢を率ひ、貴族、婆羅門の群に圍繞せられて、杖林園ウツトヒノクワツヤナに赴いた。世尊

はその園に、多くの佛弟子に圍繞せられて安坐してゐ給うたが、王は先づ、佛陀を頂禮して敬屈を伸べ、一面の程善い處へ退いた。無数の群衆も亦悉く王の例に慣うて、適當な場所に退いて坐を占めた。彼等のあるものはなほ、佛陀と語りつゞけ、いつ思ひ出しても尊い味の湧き出づる佛話を聽聞して居つた。またあるものは、額に合掌して、恭敬のさまを示し、あるものは佛陀の著名い先祖の徳を讚嘆し、あるものは慎深く、靜かに沈黙を守つてゐた。すべての群衆はこゝろいふ風にいろ／＼の態度を示してゐたけれどもその心中には皆一様に佛陀の傍に坐する三迦葉をみて、心中喬答摩佛陀が三迦葉の弟子であるのか、三迦葉が佛陀の弟子であるのか、その點について疑ひまどうてゐた。佛陀は直にそこらに並ぶ武士、貴族、婆羅門の心中を洞見して、優留毗羅迦葉を呼んで、宣ふやう、「迦葉よ、汝は嘗て優留毗羅の幽居にありしもの。今私の問はんとする所に答へるがよい。汝は前に大苦行を修行して居た修行者の師匠であつた。彼等修行者は自苦の苦行に依つて身體は瘦せ衰へてゐた。どうして汝はその古から習慣にして來た供儀を止める様になつたのか。」迦葉は答へ奉つた。「世尊佛陀よ、私は外界の事物、音聲、甘味、感官の満足、すべてこれらが、哀むべき塵埃に外ならないことを知りました、これに依つて私は最早、大小に拘はらず供儀をなすことを好まぬやうになりました。」佛陀は宣ふやう、「迦葉よ、もしも汝が、眼に美しいもの、耳に樂しきもの、舌に甘きもの、感官に心好きものを最早好まぬならば、汝は今どういふものに愉快を見出して居るのか。」迦葉は答へ奉つた。「世尊佛陀よ、涅槃の境こそ、安靜の狀態であります。然しその安靜は、私共が、感覺と欲情の領土の下に住む限りは發見せられるものではありません。その安靜は、有、生、老、死を離れて居ります。心の大なる發展造詣のみが、これに達するのであります。私はその幸福の眞境を知りもし、見もしました。私はそれを渴望します。これに依つて、私は大小に拘らず供儀をなすことを好みません。」かくの如く語つて、迦葉は立ち上り、佛陀の前に五體を投じ、佛足を頂禮して更に語を續けた。「最勝尊に在す佛陀よ、佛陀は私の師匠であります。私は佛陀の弟子であります。すべての人々は、迦葉のなすところをみ、迦葉が、喬答摩佛陀の指導の下に徳を積んで居るのであることを知つた、佛陀はまた、彼等人民の内心の所思を知り通し、今人民がすべて説法を聞きたいと欲うて居ることを認め給うた。佛陀はいつもの如く、先づ初めに布施の徳を説き、次で流るゝやうな辯舌を以て捨欲出家の利益を教へ給うた。聽衆はすべてこれをきいて内心の大歡喜を押さゆることが出来なんだ。佛陀は人々の上に良好の印象を止めたのを見て、更に進んで苦集滅

うになりました。」佛陀は宣ふやう、「迦葉よ、もしも汝が、眼に美しいもの、耳に樂しきもの、舌に甘きもの、感官に心好きものを最早好まぬならば、汝は今どういふものに愉快を見出して居るのか。」迦葉は答へ奉つた。「世尊佛陀よ、涅槃の境こそ、安靜の狀態であります。然しその安靜は、私共が、感覺と欲情の領土の下に住む限りは發見せられるものではありません。その安靜は、有、生、老、死を離れて居ります。心の大なる發展造詣のみが、これに達するのであります。私はその幸福の眞境を知りもし、見もしました。私はそれを渴望します。これに依つて、私は大小に拘らず供儀をなすことを好みません。」かくの如く語つて、迦葉は立ち上り、佛陀の前に五體を投じ、佛足を頂禮して更に語を續けた。「最勝尊に在す佛陀よ、佛陀は私の師匠であります。私は佛陀の弟子であります。すべての人々は、迦葉のなすところをみ、迦葉が、喬答摩佛陀の指導の下に徳を積んで居るのであることを知つた、佛陀はまた、彼等人民の内心の所思を知り通し、今人民がすべて説法を聞きたいと欲うて居ることを認め給うた。佛陀はいつもの如く、先づ初めに布施の徳を説き、次で流るゝやうな辯舌を以て捨欲出家の利益を教へ給うた。聽衆はすべてこれをきいて内心の大歡喜を押さゆることが出来なんだ。佛陀は人々の上に良好の印象を止めたのを見て、更に進んで苦集滅

道の四諦の理を説き出し給うた。この説法の結果、王を始め十萬の群衆はみな、丁度かの白布の色に染まるやうに、直に預流果の聖衆となつたのである。残りの一萬の聽衆は三寶を信じて優婆塞となつた。

(一)佛陀の御問ひに對する迦葉の答の趣意から見ると、當時の聖者は、供養即ち火中供養をしてゐたものと断定せられる。この供養は二つに分れて、一は日常の小供養、二は特殊の時に行はれる大供養である。これらの供養は生物を殺して供へるものでなかつたことは疑ない。何故なら彼等は生物には優しい愛情を持つてゐたので、到底それをするに忍びなかつたからである。摩奴の法典はこのことを證明するのであるが、婆羅門はその法典に従つて、清淨な牛酪や又は他の品々を祖先の靈魂のために火中供養をするのである。迦葉も亦この法制に従つてそれらの儀式を行つてゐたのであるが、佛陀はこれを全然無用なものとし給うたのである。佛陀にしてみれば、こんな事は到底かの解脱を得る智慧と證果に導き得るものではないのである。

迦葉の答丈けでみると猶不分明な處はあるが、要するに迦葉は供養、火中供養をしてそれを重んじてゐたに拘らず欲情や他の悪性が深く心中に根ざしてあつて、感覺の水路を通つて、外物が精神を動かしてゐる事を知つたのであらう。それで彼は欲情や物質の行爲及び勢力から免れさせ得ないやうな實行を嫌うたのである。

佛陀の考へ給ふ所は、外的な宗教上の儀式を行つても清淨なる眞理の眞智を得る事は出来ないものである。この眞智を得るものは聖果を得て、眞の聖者と曰はれ解脱を得るのである。そして、この眞智を得る道は教法と有情の性を嚴密に冥想する事である。迦葉が物質的崇拜の行に満足し、無益な儀式にかゝり果てゐる中は聖道に入る事が出来ないのである。彼はこれまで正路を失し、僞路に彷徨し、暗黒に閉ざされ、永久の迷妄に欺かれてゐたのである。彼の

廣大な智慧も彼を誤つた方向に導いた丈けであつた。彼は更に正直して正道を見出すためには佛陀の助力を要した。彼は今や、すべての眞の智慧の偉大なる根柢的格言、即ち、この世界のありとあるものはすべて變化して苦痛に滿つるもの、すべてのものは實在の性のない迷妄に過ぎないと云ふ事を感じ出したのである。

(二) 前の註に聖者 (Arahants) の事を書いたが、今茲にもう少しく繼ぎ足して一層その意義を明確にしやうと思ふ。讀者は聖者が四類に分れてゐる事を覚えて居られねばならぬ。四類とは豫流、一來、不還、阿羅漢である。この四類の各々が又二種に分れる。預流向、預流果、一來向、一來果、不還向、不還果、阿羅漢向、阿羅漢果である。預流向といふは、預流の聖道に入りて、その道を證果に向つて歩きつゝある人の事、豫流果とは、預流の聖果を得て、その樂しみか味うてゐる人の事である。他の三果に於ても同様である。預流果を得るには、すべての有情の歩いてゐる道を離れて、解脱に導く道を歩かねばならぬ。そしてこの豫流果の聖者が涅槃に入るにはその後八萬劫を要し、人天の間に七返生を受けねばならぬ。一來果の人が涅槃に入るには、六萬劫を費し、人界と天界に一度づゝ生れねばならぬ。不還果の人は最早生を受くる必要はないが、涅槃に入るまでには四萬劫を要する。阿羅漢果は最高の聖果であつて超自然力を授けられてゐる。この聖者は二萬劫を経て涅槃の至境に達するのである。これらの四果は解脱の四道、涅槃の四道と呼ばれる。豫流果といふは、誰でも初めて佛教に隨順する時入り得るものであるが、又は信仰の修養の或る程度に達して入り得るものであるかの疑問がある。が、類婆羅王及びその從者の入信の記事に依れば、豫流果は普通以上の上達を有し、佛及びその教法に對する熱心も並勝れたる人の得るもので、教團の一員になつたその最初に得るものではない事が解る。豫流果に入らず、只三寶を信ずるものは優婆塞、單なる聽者と曰はれてゐる。この時は王と十萬の戰士貴族が豫流果に入り、残りの十萬人は教團の信者となりその信者の員數に加はつたのでそれ以上に達しては居らない。前者は涅槃に入る流の人となり、後者は五戒を持つ熱心な信者となつたので高級の教理を身に體

得する位には上らなかつたのである。

摩揭陀國の王、頻婆娑羅王は、豫流果に入つて、世尊に申し上げるやう。「尊き佛陀よ、數年以前、私がこの國の太子であつた時に、私に五つの願がありました。幸にその願を今はずべて成就することが出来ました。五つの願といふは、一には王になりたいといふこと。二には萬人の歸敬に堪ふべき佛陀が我が王國に來り給ふといふこと、三には私が佛陀に近づくこと。四には佛陀が私のために説法して下されること。五には私が佛陀の説法をすべて了解しうることにあります。この五つの願はすべて成就いたしました。最勝尊に在ます佛陀よ、佛陀の法は最善の法であります。その教法に依つて受ける幸福なる結果を私は何に比ぶべきでありませうか。宛然、埋もれて居つた瓶を掘り起して適當な台の上に置き直すが如く、闇に閉ぢられて居つたものを光明の下に持ち出すが如く、正しき道を示す勝れたる道案内の如く、暗を逐ひ出す輝く光の如きものであります。今私は佛陀と佛法と僧とに歸依いたします。これより、私は佛陀の保持者となります。明朝私は、佛陀及び佛弟子の御入用の品々をすべて供養いたしたいと思ひます。佛陀は默然としてその請を許し給うた。茲に於て、王は立ち上り、敬禮して右に遶り、王宮に歸られた。

翌朝、王は食事の用意を命じ、使を遣して、佛陀を請じ申した。佛陀は立ち上り、衣を著け、鉢を持し、一千の弟子を伴ひて王宮に向ひ給うた。その時帝釋天の一天子は美しい青年の僧と化して、佛陀の前にすゝみ、下の讚歌を歌うた。「みよ、最勝尊に在す佛陀は一千の弟子を伴ひて王舎城に向へ給ふ。佛陀の御心には、柔和と溫良の徳が満ちくゝて居る。佛陀はすべての欲情から離れてゐ給ふ。光顔美しく帝釋天の如く輝き給ふ。佛陀は生の渦を免かれ、輪廻の禍惡を遠ざかり給ふ。佛陀は今一千の弟子を伴ひて王舎城への途中に上り給ふ。」(同一の句を三度繰り返す)。「阿羅漢の證果を得、十大徳を行ひ普通の智識を有し功德の法を知つて、これを宣べ、嘗て成道を得たる最善最勝者は今一千の阿羅漢に圍繞せられて、王舎城に入らんとし給ふ。」

都城の人々は、この若き人の美しい容貌を見、聲高く歌ふ讚歌をきいて、互に囁き合つた。「この美しい若者は誰であらうか。この驚くべき事柄を歌ふ人は誰であらうか。帝釋天はその囁きをきゝつけて人々に答へた。「人々の子等よ。汝等の仰ぎ奉る最勝尊に在す佛陀は無比の智慧を有し給ひ、すべて完きものは、皆佛陀に具はり給ふのである。佛陀はすべての欲情を離れ給ひ、世尊に比ぶべきものは一つもない。佛陀は人天の歸敬に堪へ給ふ方であ

る。佛陀の不動の御心は常に眞理の上に坐り給うてある。佛陀はすべてのものを覆ふべき法を説き給ふのである。私の如きは佛陀の卑しい僕に過ぎぬ。」

王宮に達して、佛陀は種々の恭敬を受け、用意の場所に入り給うた。頻婆娑羅王は、佛陀を供養し奉らんために、佛陀の受け給ふやうなものを心中に思ひめぐらした。自ら思ふやう。都城に近いあの私の園林は、佛陀及び佛弟子の方々の止宿所として最も適當であらう。市から余り離れて居らないから佛陀を訪れ奉つて敬禮うやまつをいたさうとする人々の屢々行くにも都合が好からう。かつまた、都城の喧騒を避けるには充分の隔りもあり、退いて冥想するには最も適當な場所である。この園は必ず佛陀の御受を蒙むるであらう。こゝに於て頻婆娑羅王は立ち上り、杯のやうな金の貝を取りて、水を佛陀の御手に注ぎ、竹林と呼ぶる園林奉獻の崇嚴な式を擧げた。佛陀は默然としてその奉獻を受け給うた。佛陀は教法を宣べ、次で宮殿を去り給うた。その時、佛陀は諸弟子を呼んで、「愛する比丘等よ、私は供養を受くることを汝等に許す」と宣うた。

(一)頻婆娑羅王が佛陀に竹林精舎を獻納せられた記事は、佛教の僧侶が個人としてではなく、一團體として土地の所有者となつた模倣を示すのである。佛陀とその弟子方は、最初は、一團體としての止住すべき場所を所有しなかつ

たので、佛陀は人民の招待に應じて行く先々に屯してゐ給うたのである。この爲めには、時々大不便があつたであらう。殊に日一日と増して来る弟子達の始末には、随分不便があつたであらう。敬信の王は教團の受くる不便を知り、教團の人々の滞在し得る場所を、寄附しやうと決心せられたのである。この獻納は非常に莊重であつた。何等の狀作なしに永久に團の所有權は佛陀に移されたのである。佛陀は又心好くこれを承け給うた。これは、こゝにいふ寄附の一番最初のものであつたと思はれる。竹林の園と精舎とは佛陀の一生を通じて名高いものとなつた。

緬甸の町々に於ては、一定の場所があつて、佛教僧侶の精舎の建立に當てられてある。普通の民家などからはずつと離れてあつて所謂黄衣の人々の寓所となつてゐるのである。これら精舎の構造の概略を示すと、形は長方形で地上八呎乃至十呎の木の柱、或は稀に煉火の柱に支へられてある。材料は木材で壁も板である。屋根は次第に小さく三重になつてゐる。こゝにいふ屋根は塔、精舎、宮殿丈けに用ひられ、他には許されていない。床下は空明きで何にも使はれてない。建物の入口には木か煉火の階段がある。内部の構造は、内に一つの大きい室があつて、これが訪問客を迎へる所となり、又は讀み方書き方の初歩、時には算法を習ひに来る小供の教室となる。何か大きな事でもある時の外は比丘等はみなこの室にあつて、銘々思ひ／＼に時を消してゐる。讀書したり、念珠を繰つたり、檳榔子を噛んだり、又一番多く眠つたりしてゐる。その室のはづれに一二段高くした場所がある。この高處が二つに分れて一は客に對する時の比丘の座所となり、一は臺座又は棚をしつらつてその上に佛像が安置され、崇敬に用ひる道具が置いてある。此外彫刻したり、渡金したりしてある櫃が置かれてあつて、その中に精舎の聖典が收めてある。この大きな室と後ろが直ぐ壁になつてゐる高所とで長方形の半分をなしてゐる。之に並んで他の長方形の半分が施物の貯藏所となり、又は比丘達の寢室となつてゐる。或る精舎では天上が彩色られたり又は一部分渡金したりしてゐる所もある。料理室が一つしかない場合には佛像の安置してある方と反對の側に長方形の端にその建物と同じ高さまで附け加へてある。

この精舎の建築修繕維持に就いては、政府は少しも關係して居らない。すべて精舎の建立を大功徳と思つてゐる個人に依つて造營修繕されてゐるのである。その宗教的信仰から、こゝにいふ費用のかゝる造營修繕をする人は *Khong* (塔精舎の擁護者) と呼ばれて居る。その人達はつまりこの名稱を誇りとするので社會からこんな風に使はれることを欲してゐるのである。紙や文書などに自分の名を記して擁護者某と曰はれたいのである。

以上の記載は、緬甸本部殊に首府の大きな場所の精舎の説明とすると猶不十分である。それらの内のあるものは非常に廣大で莊麗で實地見た人でなければ一寸眞實と思はれない位である。大きな開けはなしの行廊が建物の周圍にめぐつてゐる。その行廊は丁度矩形を半分にしたやうな形で、それに屋根をつけて、中央の建築の主部を取り圍んでゐるから曰はゞ支圍をつけたといふやうな具合になつてゐるのである。比丘等が怠けもの、暇つぶしの訪問に接したり、小供に讀書を教へたりして、一日の大部分を過すのは、この場所である。これと押つ開いた廊下のしきりは大きな戸であつて、この戸は下の方を前へ押すと上が蝶番で留めてあつて、雨や日光を防ぐ位の高さに開かれるのである。中央の堂は建物中で一番奇麗で一番丈が高く、佛像を安置し、崇拜敬禮の用具をこぢや〜と並べ、聖典を納めた櫃を置いてある。天井は金箔を置いたり他の裝飾で飾つたりしてあつて、趣味もあり優美でもある。此の堂は同じ大きさに二つに割られて、東に向いた方には大きな佛像や小さな佛像を安置し禮拜の用具を並べ、西に面してゐる方はいろ〜の用途に用ひられてゐる。時としては比丘の寢室ともなる。内面の部分を支へる柱は六本、或は八本で、麻栗樹材を用ひてあつて私の嘗て見た内では一番美しい標本である。丈は六十呎七十呎のものもある。これらの精舎には内部が金箔を置いてある許りでなく外部までも渡金してあるものもある。屋根の端の飾りや、屋根と屋根との間は金片で包まれてある。この二つの場所には又いろ〜の彫刻があつて土着人の彫工術のたくみをあらはし外人の賞讃を博してゐる。Amran 像のある場所近くの *Khong-dau-gye* といふ精舎や、比丘等の主長の住んで居

られる場所近い寺院は記者が緬甸で見た内で一番美しい一番大きいものであつた。

(二) 類婆娑羅王が、竹林精舎及びその附屬の地を佛陀に奉獻せられた時、奇妙な儀式が行はれた。この儀式は佛教聖典には屢々出て來るとであるが、王は水の入つた金の壺を持つて、布施の言をいひながら大地に水を撒くのである。これは印度から起つた一種の儀式であるが、他の習慣や教理と一緒に緬甸の方にも輸入せられて居る。これは布施をするといふ意志の外的な表示で、又その證明をする意味である。これを行ふ時にはその座に連なつてゐるものはその場所の守護神たる天珠に、この世界を統理してゐる天の名を呼んで、その布施の證據人となつて貰ふのである。それと同時に供養者は其の供養に依つて自分獨り功徳を得て満足せず、すべての人々、すべての有情が同様に自分のこの善行の功徳を平等に分有する様にと願ふのである。この施主の寛大なる性情は佛教の信徒には見出し得ない博愛と友愛とを眞に愉快に表現してゐるのである。それでこの儀式は一はその布施の行爲に公に絶對的に効果あるを示し一はその善行の功徳を一切の有情に分配するといふ二重の目的を有するのである。

注意してこの佛傳を読む人は、佛教の教理の漸次に發展して行くこと、殊に戒律の多數の制定を見て行くことが出来るであらう。その戒律は今日佛教が長い間傳はつて優勝の地位を占めてゐる國々では猶充分にその權威を認められてゐるのである。最初佛教々國の人員といふは極めて少數であつたから、佛陀に従つて、比丘本來の質を守り衣食住の三つは容易に得られたのである。で彼等はその日〜の必要物以外に布施というて別物を受くる要は更になかつたのである。我々は佛陀がかくして彼等に守養の精神を確立せしめ、浮世の事物を厭捨せしめんとするために、非常な注意をなし給つたものと推量しうるのである。處が教團の人員が増加するにつれて、その日〜の貰ひでは、何かと不自由を感じる様になり、殊に住居には困難するやうになつたのである。類婆娑羅王は早くもこの欠乏を感じて、佛陀及びその弟子達に始終の住居、殊に兩期遍歴の出來ない時の住居を獻上しやうと決心したのである。佛陀は之を

快く承け給うたが、これと同じ動機で、佛陀は弟子達にも家や土地の供養を受けても差支ないといふ許可を與へ給うたのである。この許可は濫用されるれば甚だ危険であるが、この場合には絶對的に必要であつたのである。その時からして教團の人々は、何處でも、その處々でこの許された特典を用ひたのである。緬甸ではこの恩恵は餘り亂用されはしなかつた。彼等は日々の生活の資料に困るといふのではないけれども、富饒だといふ譯には行かなかつたのである。それでこの僧侶の富力が——僧侶の所有には特別に優勝な點があるものであるが——さほど過大でなかつたから、政治上に特別に及ぼす影響もなく、少くとも表面からみると、政治上の僧侶の悪影響は餘り感ぜられなかつたのである。

王舎城には、刪舍耶と呼ぶ、異端の師があつた。その當時、舍利弗と目連とは、その師の教を受けて徳行を研いてゐた。この兩人が沙門となつた道筋は斯うであつた。兩人が優波帝須、拘律陀と呼ばれて猶俗人であつた時に、或る日、二百二十人の仲間を連れて高い山の頂に上り、その山の周圍の平野で人々の嬉戲遊樂するさまを見やうとしたことがあつた。兩人は平野の人々を見渡した時に、互に語つていふやう。「これから百年の内に、これ丈けの人はすべて死の餌食となるのである」と。こう語つて兩人は立ち上つて、その場處を去つた。兩人の心は全く死の考に捕へられてゐた。兩人は靜かに歩み乍ら、互に銘々の默想の結果を語り合つた。「もし片方にすべてが滅びねばならぬといふ死の一元があるならば、必ず、他方に

は死な、いといふこと、死滅を免れるといふ他の一元がなければならぬ。」彼等はかう語り合つてその時、不死を教へ、不動と不變とを得せしむる勝法を熱心に求めやうと決心した。その當時、その附近に、六人の異端の師匠があつた。末迦梨拘舍利、富蘭那迦葉、阿耆多翅舍欽婆羅、刪舍耶毗羅膩子、尼隴陀若提子、迦羅鳩駄迦旃延の六師である、この内刪舍耶だけが弟子と共に白衣を着けて居るのである、兩人は刪舍耶の所に行いて弟子の禮を取り、比丘の衣を着けた。兩人は三日の中に、師匠の智慧學問を悉く了解した。然しそこには、兩人の目的を遂げさせる何物もなかつた。兩人は刪舍耶にいふやう。「師よ、これが師のすべての智識でありますか。師はこの外私共に教ふるものはありませんか。」刪舍耶はこれに答へた。「私は私のすべての智識を汝等に教へて仕舞うた。」兩人はこの答に満足することが出来ないうで、「私共は益々眞實の法を探し求むるに勤めやう、初めその法を得たものは直に、その法を告げ知らせることにしやう」と相談した。

ある日の朝、阿説示といふ佛弟子が、佛教々團の規則に従つて、左の手に鉢をもつて、米を貰ひに出掛けた。彼の身邊のものは、すべて貴く清い光を放つて居る。彼の容貌舉止は、行住に拘らず、柔軟しくして且つ端嚴である。道を誤まつた異端の沙門優波帝須はこの端嚴

の阿説示比丘を見て思ふやう。「かゝる比丘こそ眞に供養を受くべき資格のあるものである。あの人こそ疑もなく道を得て居るであらう。彼の人について行いて、彼の人が師匠を持つならば、いかなる師匠について徳を研いて居るのか、又彼の人が師匠ならば、いかなる法を教へて居るのか。それを尋ねやう。然し彼の人の乞行の途で何事かきくのは宜しくな
いことである。暫らくの間、従つて行つて見やう。」阿説示は乞行を畢つて、市を離れ、小さな塔處に入り、坐して食事をした。優波帝須もこゝまで従うて来て、同じく塔處に入り、弟子の師に對する禮拜を捧げた。阿説示の食事の畢つた時に、優波帝須は水を阿説示の手に注ぎ、喜びの心を躍らして暫らく阿説示と挨拶の語をかはし、程よき處に離れて、左の如く問うた。「大比丘よ、あなたの外貌は柔和と寛裕とに満ちて居ります。あなたの容顏は内心の清淨と無垢とを示して居ます。もしあなたが弟子であるならば、どういふ師匠の下に教を受けて御出でになりますか。聖道の道案内者は誰方ですか。その師匠の教はいかなるものか、それをきかしていただきたいと思ひます。」これに對して阿説示は左の如く答へた。「若き沙門よ、あなたは嘗て、大王の裔なる太子が沙門となつて、今は尊き佛陀と呼ばれ給ふをきかなんだか。私はその佛陀の下に比丘となり、佛陀は私の師匠である。私は

私の精神全體を擧げてその教に従うて居るのである。」優波帝須は大師の教法の模様を尋ねた。阿説示は謙りて、「私は猶新參者のことであるから、我が師の教を熟知することは出來ないが、その少分を知つて居るから、それをあなたにお知らせ申さう」と語つた。優波帝須は是非にと願うた。阿説示は語つた。「私が佛陀の下に學んだ教法は色法と色法の上に働く原理と、欲情と精神に關するものであります。その教は私をして物質を厭はしめ、欲情を征服し、精神を統御せしむるものであります。」この教をきいて、優波帝須は自分の心の中に於て徐ろに欲情の繫縛の解け行くを覺え自然に感官の勢力ちからから解脱するやうになつた。優波帝須はこの清淨にして完全なる教法に心酔して直ぐに豫流果に入ることが出來た。優波帝須はこれまで求めないに求めた涅槃の法を遂に得ることが出來たことを喜び、直ぐ様、この幸福を拘律陀に分ちてやりたいと思つて急ぎ歸つた。拘律陀は友の喜びに溢れた顔色を見て取り、自分も何となく内心の喜悅を禁ずることが出來ず、今まで求めあぐんだ法を得て來たのであるかと尋ねた。優波帝須は先きに阿説示比丘と相語つた模様を殘らず告げしらせ、拘律陀はこれをきいて直に豫流果に入ることが出來た。兩人は直に師匠刪舍耶を離れて、佛陀の門に入らうと決心して、三度まで許可を師匠に願うてみたが、三度とも無下に斥

けられたので、遂に兩人は二百二十人の仲間を連れて、佛陀の許に走つた。刪舍耶は弟子達に捨てられて、憤滿に堪へず口中より血を吐いて死んだのであつた。

兩人のこの親しき友とその仲間のものが竹林精舎に入らうとしてゐた時には、佛陀は弟子共を集めて語り給うた。「みよこの兩人のものは今私の教の下に投じやうとして居る。彼等は私の二愛弟子である。兩人は最も伶俐でもの、道理に徹底して居るものである。彼等は眞に涅槃の法を喜び、眞理の中髓に向つて進んで居る。彼等は私の教の下に投じて二大高弟となるのであらう。」佛陀のかく語り給ふ中に兩人は精舎の閫を越えて、世尊の脚下に五體を投じ、親しく教を受けて德行を修めんことを願うた。この時、佛陀は兩人を呼びかけて次の如く語り給うた。「比丘よ、私に來れ、私は最勝の法を宣教するものである。最も完き行業を勵みつとめよ。この行業はすべての禍惡を脱せしめるであらう」と。やがて、一組の衣と鉢とが兩人に渡されて、兩人は茲に佛弟子となり、それからは、舍利弗、目連と呼ばるゝやうになつた。この新沙門が新衣を著け終つた時には、誰が眼にも法臘六十を越えた端嚴なる比丘のやうに見えたのであつた。兩人に附いて來た人達は第二級比丘となつた。それより七日にして、目連は阿羅漢となり、舍利弗は十五日を要して阿羅漢のさとりをひらい

た。間もなくこの兩人は擧げられて、佛陀左脇右脇の弟子の高位に上つた。法弟子中の最高位に位すこととなつた。

この舍利弗、目連に對する佛陀の寵遇は、他弟子をして嫉妬憎惡の念を起さしめるにいたつた。彼等は寄るときはると、この兩人の撰抜について不平を洩らし合うた。彼等の中にはさすがの佛陀も今度は人間の感情に支配せられ給うたとまでいふものがあつた。これらのことが一々佛陀の御注意なされることとなり、佛陀は諸弟子を集めて、左の如く語り給うた。「愛する比丘等よ、この場合の私の處置は、つまらない動機に導かれてしたのではない。なすべきことをしたに過ぎぬ。昔しアノーマタツシ佛の時、この二人の友は苦行者の生活を送つてゐたのであつた。彼等は當時の佛陀に最大の恭敬を拂ひ、當來の如來出世の時、その左右の脇士になりたいといふことを幾度も願うた。アノーマタツシ佛は、當來喬答摩佛出世の時に、その志願を満足することが出来るであらうと記別し給うた。愛する比丘等よ、私がこの新參の兩人を第一位の弟子としたのは昔のこの因縁に依るのである。」この佛陀の御話はすべての人々を満足せしめた。これですべての不平は消滅した。猶、この二大弟子がアノーマタツシ佛の所に於て受けた記別のことについては、アバタン、テーラ(アバタ

「ナ？」といふ經典にその周圍の事情と共に委しく書き載せてある。

摩揭陀國の住民は、主に社會の最上層に位する多くの人々が相率ひて沙門の生活に入るをみて、互に嘔き合ふやうになつた。「みよ、沙門喬答摩はその法を説きて人民の種を絶やして仕舞ふのではないか。無數の妻女を哀れな寡婦の境界に突き落して居るのではないか。一千名の仙者は比丘となつた。刪舍耶の弟子等も皆その例を逐ふた。猶澤山の人々が、彼等の足跡を慕うて行くであらう。そうしてこの國は何うなつて行くであらうか。斯ういふやうなことを云ひ立て、人民は比丘に對して憎惡の聲を放つにいたつた。冷嘲や雜言を雨の如く降り注いだ。彼等は仕舞には次の様に云つた。「大沙門は五つの丘に圍まれて居るこの牡牛の檻のやうな王舍城に來た。彼は今刪舍耶の弟子達と一緒に居るが、次には誰が彼の所へ行くのであらうか。」比丘等はこういふ人民の怨聲雜言をきいて、佛陀の所へ來て、聞いたまゝを申し上げた。佛陀は諸弟子を慰めて、「愛する比丘等よ、今汝等に向けられてある罵詈、譏笑、冷嘲もやがて止むであらう。七日の後には全く絶えて仕舞ふであらう。茲にそれら誹謗者に對する返答がある。佛陀は佛陀の祖先の如く、最勝の法を宣傳せやうとつとめて居る。佛陀はすべての人々のために宣説する眞理に依つて、人々を引きつけるの

である。かくの如き正しき手段に依つて得る成功をどうして人々は嫉むのであらうか。」沙門等が都城へ出掛けた時に、同じい譏謗の潮は同じいやうに押し寄せた。比丘等は、佛陀の教へ給ふたやうにそれに答へた。嵐は直に止んだ。人民は大比丘が正法を宣説し給ふことを知り、正しき手段に依つて、弟子を導いて居給ふのであることを了解した。舍利弗、目連の入道と受職との記事はこれで畢る。

(一)カンニングハム將軍は、その古代地理實地検査報告に於て、有名なる王舍城の位置と廢趾とを精密に記述して我々を驚かしたのであるが、その報告中、また見ることの出来るといふ往古の壘壁の測量は、紀元四世紀と六世紀に同所に參拜した支那の法顯支那兩師の記述と驚くべき一致を示してあるのである。この市は Gijakuta, Isigili, Wihara, Wipula, Pandawa の五つの小丘に取り圍まれて谷間にあるので、周圍五哩ある。然し、これは内割の周圍で、外割の周圍は九哩程である。ピアハラ山の南面に第一結集の行はれた有名な洞穴がある。佛教の隆盛の時にはその小丘の上に佛教の紀念塔が一杯に建て、あつたことは疑ひないことである。その後その場所は邊羅門教徒や回教徒に占領せられたので、彼等の塚や寺院を作る材料を得るために塔や精舎は無残にも破壊されたのである。今回教徒の塚の建て、ある高處が、昔塔を建立してあつた處である。温水が、その市近くに數多く噴出する。私は佛教の典籍中にて、一度この熱帶地の住民の天惠たるこの現象に説き及んであるのを見出したことがある。近世のラージギルはその名に於ても位置に於ても、我々をして佛教の年記史上の有名なる摩揭陀の古都を想起せしむるものである。王舍城の大きさは古代及び近代の訪問者に依つて精確に決定せられてゐるから、緬甸の著者のある人達が、その部に途方もない無數の家があつたといふなどは今日では笑ふべきことになつてゐる。

Na puppha-gandho paṭi-vātam eti,
Na Candanam tagara Mallikā vā,
Satañ ca gandho. paṭi-vātam eti,
Sabbā disā Sappuriso pavāti ti.

華香は風に逆へて行かず、
栴檀、多伽羅、末利の香、
百の香も亦風に逆へて行かず。
持戒の人のみ獨り四方に香を放つ。

第八章

- (一) 淨飯王佛陀に歸城を請ふ
- (二) 迦樓陀夷佛陀の歸城を計る
- (三) 佛陀の許容
- (四) 淨飯王と耶輸陀羅姫の歸佛
- (五) 難陀と羅睺羅の出家

- (六) 阿羅陀等の入道
- (七) 難陀誘惑に迷ふ
- (八) エツキダツタの改宗
- (九) シヤムブーカ物語

最勝尊に在ます佛陀が、竹林精舎エルワナヘーラに於て、諸弟子及び諸方から日々集まり來る聞法の人々の間に、自法を説き教を垂れて自ら優遊して居給ふ時であつた。父王、淨飯大王は今また、太子の出城以後六年の大苦行の間、太子のことを思うては憂愁に堪えず、出來るだけ、太子に關する報導を集めて僅かに心を慰めて居られたのであるが、今や太子が既に最勝の法を宣説し、王舎城に滞留して居給ふことをきかれたのである。この時王は生先短かいその生前に、どうか、今一度太子に遇いたいものであると願ひ望まれて、矢も盾もたまらない程にこがれられた。そこで、宮臣を招き、「卿は御苦勞ながら、これから千名の從者を率ゐ、急いで王舎城に行いて、太子に遇ひ、私が老衰してゐることを申上げ、どうか生前に今一度遇ひ

たいと思つてゐるから、迦維羅婆蘇都へ一緒に歸つて下さいと御願ひせよ」と命せられた。宮臣は王命を受けて、千人の従者をつれて王舎城へ向うた。竹林精舎に近づくと、數限りもない人々が群がり集うて、佛陀の説法に耳傾けて、熱心に聽聞して居る。これをみて、その清興を妨げんことを恐れて、宮臣は暫らく主命を傳へず従者と共にその聽衆の中に入りて佛陀の説法を聽聞してゐたが、説法の利益に依り、彼等は直に阿羅漢果を得、主命も打ち忘れて比丘となりたいと願ひ出でた。佛陀はこれを許し給うた。かくの如く一時に道に入つた多數の人々の衣と鉢を得るために、佛陀右手を延べ給へば何處からともなく、鉢と衣と自然に顯はれ出で、新しい入道者の銘々身につくるに任せたのである。さうして彼等新入道者は皆法壽六十を経た老比丘の様な端嚴の相を得たのである。このやうに阿羅漢果を得ては、最早物質界のつまらぬことには不關心となつて仕舞ふものであるから大王の命令は全く閑却せられて傳へられずに終つたのである。

迦維羅城の王は、宮臣が摩揭陀國から歸つても來ず、使りもしないので、第一の使と同じ使命を帯び同數の従者を伴ふて居る第二の使を遣はすこととなされた、この使者も佛陀の説法を聞いて、喜んで阿羅漢となつた。斯ういふことが七返も繰り返された。彼等は皆

その従者と共に第一階級の入道者となつたのである。

摩揭陀は印度の北部の國である。現今ベンガル州の北部ベハールと呼ばれてゐる地方で、今のベハールと同じ廣袤を有してゐた。南方佛教の聖典語たる巴利語は屢々摩揭陀語とも呼ばれてゐる。これに依つて巴利語といふは摩揭陀國の一般の國語であつたことが推察される。恐らく釋尊時代にはこの巴利語は廣く用ひられてゐたのであらう。釋尊初め其の御弟子達かすつと後世まで信者に教の水を流したその流は、この巴利語であつた。三藏はこの巴利語で書いてある。錫蘭、尼波羅、緬甸、暹羅では聖典語として考へられてゐる。緬甸に於ては、古い寫本の多少は古代の四角な巴利文字で書かれてゐるが、外は大抵緬甸固有の文字で巴利音を寫してゐる。緬甸人の耳を通つたのと、緬甸の文字で音寫せられたので大變な變化を受けて、中には殆んど了解に苦しむ様なものもある。然し緬甸人は巴利語の綴字法に遵據して、發音せない文字までも丁寧に附けかへて置くので、眼で見てもその語の性質、起原及びその語の原始的な形を知ることが出来る。

緬甸の南部に於ては、僧團の人々は巴利語を學んで用ひてゐる。然し研究してその語の意味を知つてゐるのではない。彼等は私の讀經や、又は公に信者の人達の前で、聲高く歸敬の語を誦さればならぬのである。私はこの聖語を研究せんとして、その僧團の中で學者と呼ばれてゐる人々を屢々尋ねて、弟子として教を請はんとしたが、然しその人達が全く無學で助力を與ふる資格のないことを知つて失望したことがあつた。

緬甸人はこの聖典の大部分を自國の語に翻譯してゐる。その翻譯は正確に我々が一行譯と呼んでゐる者ではないが、出来る丈け近からうとしてゐる。巴利語が二三四語書されて、その次に緬甸譯が來る。又巴利語が二三語書されてその次に緬甸譯が來るといふ様にしてゐる。その譯語といふのに、大變澤山な語が費されてゐるので、讀者は却つて混亂して迷惑する。各語の意味を完全に譯出してあるとはいへないが、然し大體聖典の一般の意味を傳へてゐる。

幾度使を遣はしても一人も太子の報導をもたらずものがないので、淨飯王は失望して叫ばるゝやう。「我が王宮には私のことを思うて呉れる人がないのであらうか。私は私の太子のことを少しでも知らせて呉れるものを一人でも得ることが出来ないであらうか」。淨飯王は數多の宮臣を眺めて、斯ういふ難事には最も適當な人である迦樓陀夷を擇び出された。迦樓陀夷は佛陀と同じい日に生れ、一緒に幼ない年を過し、最も親密な友情を持つて居つたものである。大王は彼にいはれるやう。「貴姓迦樓陀夷よ、汝は、私がどんなに太子をみたいとあこがれて居るかをよく知つて居る。今まで太子を迎へるために九人まで使を遣はしたが、一人も愛子の報導を齎して歸つて來たものがない。私は今は既に老いて居る。定命もいつまでもあるまい、汝は太子を連れて歸ることは出來まいか。私は汝が比丘とならうとなるまいとそれをかれこれ曰はない。どうぞ私のこの世を御暇して去る前にもう一度太子に遇はして呉れよ」。迦樓陀夷は必ず王命を果しましやうと約束した。彼は直に一千名の從者を連れて、王舍城へ向うた、竹林精舎に著いて、前の使者と同じく佛陀の説法をき、從者等と共に沙門果を開いた。

喬答摩佛陀は、成道後第一の雨期を鹿野苑に送り次で優留毗羅の幽居を訪れ、その處に三箇月を送り、三迦葉を道に入らしめ給うた。佛陀が、千名の弟子を連れて、王舍城に入り給うたのはピャリー月(十三月廿五日)の満月の日であつた。この王舍城に二月を費し、婆羅那斯(Varanasi)以後、これで五ヶ月目となつた。

迦樓陀夷の到着後七日目に丁度寒い時節が終つたので、この新入道者迦樓陀夷は佛陀に次の様に申し上げた。「尊き佛陀よ、寒い時節は終りました。暖い時節は始まらうとして居ります。今は旅行には丁度好い時であります。自然は緑の装を凝して居ります。森の樹々には花が笑ふて居ります。路側の樹々には香の高い花と味の好い果實が熟れてゐます。孔雀は傲り氣にその壯麗な尾を擴げ、種々の鳥がその諧調の歌の音を惜し氣もなく放つて空を満して居ります。この時節には寒熱中を得て、自然はその一番尊い賦性を發揮して居ります。迦樓陀夷はかういふ風に説いて、佛陀の歸城を謀らんとした、佛陀はこれらの語をきいて宣うた。「お前は何を曰はうとするのか。何の目的で左様な善い語をつらねていつたのか」。迦樓陀夷は答へた。「世尊佛陀よ、佛陀の父王は今年老いさせられました。陛下は陛下が御生前に今一度愛子に遇ひたいといふ御切望から、私に、佛陀を御迎へ申すやうにと御命令を下されました。陛下と陛下の御家族とは世尊の教法をきいてどんなにか歡喜なさる

でありました。佛陀は宣ふた。「よし、行いて、比丘等に旅立の用意をするやうに傳へよ」。この時には摩揭陀の一萬の沙門果を得たる比丘と、迦維羅城から來た一萬の沙門果を得たる比丘とが佛世尊に従つて旅をしたのである。兩國の距離は六十由旬あつて、この道程を行くに六十日を費したのであるから、一日に平均一由旬づゝ旅行したのである。

由旬といふはいか程の里程を指すのか完全に定めることは困難である。五哩から十二哩程の異説がある。カンニングハム將軍は王舎城から舍利弗の生地那爛陀遠羅門村までの間を踏査して七哩と決せられた。これに依つて見れば法顯三藏がその地を巡禮せられた時分の一由旬は七哩、即ち支那里程四十里のことであると推定することが出来る。然し法顯三藏以前の一由旬が三藏當時の由旬と等しかつたかどうかは定めることは出来ない。多くの著者は等しい様にいふてゐるがこれは解らない。國に依り處に依つて大に變つてゐるやうにも見える。或る地方では十二哩以上の様に思はれる處もある。だがこの書の中に一由旬と云つてある場合には六哩乃至七哩と見ておれば誤りはなからうと思はれる。

迦樓陀夷はこの幸運な談話の結果を、淨飯大王に報知せやうといふ念に燃えた。彼は空行して、瞬く間に迦維羅城の王宮に到着した。王は彼を見て非常に歡喜せられ、この尊い比丘を坐に請じ、王宮の厨房の最善の食を以て比丘の鉢を盛るやうにと命せられた。やゝあつて迦樓陀夷はその旅行について種々の出來事を語り、語り畢つた時に、淨飯王は食事をすゝる様にと望まれたが、迦樓陀夷は、この食物を佛陀に示したいからと云つて辭退した。「今世

尊は何處に居らるゝか」。偉大な我が師は二萬の沙門果のものを率ゐて、その父の王を訪はんがためにこの國への旅中に居られます。今日、王舎城を御出達になりました。淨飯王は非常に歡んで、迦樓陀夷に語られた。「どうぞ貴比丘の食物は貴比丘これを食して、我が太子には他の食物を運んで下さい、私はこの旅行中の食物を私の手で供養したいと思ひます」。迦樓陀夷は王の願を入れて食事をした。食事の終つた時に、宮臣等は高貴の香水を以て迦樓陀夷の鉢を洗つた。その鉢は恭しく空中に飛ぶ使に渡され、この使は群聚の目の前に鉢をかへて空中に昇り、直に佛陀の所に達して父王の食堂の高貴な食物を盛つたその鉢をさへげた。佛陀は鉢を受けとつて樂しくその食物を召された。その旅行中には、この同じいことが毎日〳〵繰り返された。迦樓陀夷は毎日空中を飛行して王宮にいたり、食事の供養を受け、又毎日父王の供養を自分の勝れた師匠に運んだ。佛陀はその旅行中、父の王宮の供養の外は全く他の食を取り給はなかったのである。毎日迦樓陀夷は佛陀の旅行の進行の具合を傳へた。かういふ具合で、迦樓陀夷は人々をして佛陀を拜しやうといふ熱心を募らせ、好愛の感情を以て佛陀の到着を待たしむるやうにした。迦樓陀夷のこの勤勞は佛陀の認め給ふ所となり、佛陀は次の如く宣ふた。「迦樓陀夷は人々をして我等の到着を待たしむる様

にして居る。彼はこれに依つて我が弟子の中で、最も勝れたもの、一人である」。王家の公子や、その他の人々は、佛陀の到着をきいて、相集つて、いかにしてこの高貴なる譽高き訪問者を款待すべきかその最善の方法について相談した。彼等は佛陀及佛弟子を待ち設ける最高の場所として、尼拘律陀林を擇んだ。この林は首を長うして待ちこがれて居る人々に依つて奇麗に掃除され準備をせられた。國の人々は一番美しい晴衣をつけて、香華を持つて佛陀を拜まうといふ熱望に燃えて皆出掛けた。男女の幼童が行列の前にすすみ、その次に一番位の高い家の兒童がつき、次に王家の一族が並ぶ。すべての人々が列をなし尼拘律陀林に入つた。その林には、佛陀が丁度二萬の弟子を率ゐて到着し給うたのである。

(二) この書を注意して讀む人は誰しも佛教徒の傾向が、孤獨、幽棲、閑靜といふ處にあるを見誤らないであらう。幽棲に於ては、心は自ら外物に引かされたり荒されたりすることは少なくなる道理である。自製の道には都合はよし、心を一境に止めて黙想するには便利である。それで佛陀は弟子達を連れて、暫らく滞在するつもりで或る都市に行かれる時にはいつでも必ず市外の林を擇ばれる。大師は好みの幽居として茲に住はれるのである、佛陀はいはう様なくこれを好まれる。その精神的な一族と一緒に、浮世の事件に身心を亂されず、完き靜寂の境の清らかな空氣を心行く許り呼吸し給ふのである。この何物にも亂されない心は精神界の廣野を自由に翱翔し、かくして、黙想の世界で

發見した寶を、溫顔と清和の音聲とを以て弟子達に分ち、ひたすら弟子達の智徳兩道の向上を圖り給ふのである。

佛陀はこの平和な閑靜處で、教を受けに来るものをすべて喜んで御迎ひなされる。階級種族の區別はない。あらゆるものが、この幸福を人類の間に布き欲情の框から人々を助けて出さしむべき使命を持つて顯はれた人即ち佛陀の御前に引見せられるのである。佛陀はこのあらゆる人々に最勝法を宣傳なされるのである、この幽處へ退いて、浮世の雜沓から遠かるといふ傾向は今日でも佛教僧侶の間には著しく見られるので、その目的に相應しい町の淋しい部分とか、城市から少し隔つた勝地に寺を建てるとかするのはこのためである。私は屢々比丘の平和な住家のある林を見て賞讃せずには居られななだ。坂などのある町とか大きな村とかには、その小高い處には必ず精舎が幾つも立てゝあるのである。

王家の人達は、内心に憍傲の念を抱いてゐた。「悉達多太子は私達よりも若い。彼は私達の甥である。若い人達は彼の前に身を屈して禮するもよからう。けれども私達は只彼等の後に坐つて居ればよからう」。こういふ風に思うてゐた。この人々の心持は直ぐ様、佛陀に見て取られた。「私の親族のものは私を拜することを拒んで居る。私は彼等には是非共私を拜せしめやう」。こう考へ給うて、佛陀は三昧に入り、空中に上り、塵を振ふ人の如く親族の人々の頭上に止まり、驚きの眼をみはつて居る彼等の前に、白マンゴの樹の上に、水火の變を示し給うたのであつた。

かくの如き超自然力の不思議に驚いて、淨飯王は先づ叫んだ。「世に譽高き佛陀よ、あなた

が誕生して間もなく人々はカーラデーワラ仙を拜せしめんために仙者の前につれて行つた時、仙者の額に兩足を置いたあなたをみて、私はあなたを禮拜しました。これは第一回であります。次に耕耘の嚴な祭の時であつた。あなたは閻浮樹の蔭に置かれ、太陽は漸次に動いて、周囲のすべての樹々の蔭を移しましたが、あなたの搖床の置かれた樹の蔭のみは少しも移らなかったのであります。これを見て私は第二回目あなたを拜しました。今この新しい不思議をみて私は又あなたを拜します。父の王が拜したものであるから、王家の驕傲の人々も皆その例に慣うた。佛陀はこの傲慢な親族のもの謙つたのをみて満足して、空より下り、設けの坐につき給うた。佛陀はすべての人々に降り注ぐ赤い色の雨を降らし給うた。この雨は、好む人をば濡らし、好まない人は濡らさない徳を持つてゐた。佛陀は宣ふやう。「これは初めての不思議ではない。私が前生、エーサントラ太子であつた時にもこの不思議が起つた」。佛陀は前生の面白い譚を語り續け給うた。群衆は、佛陀の教法をきくを喜び、神通を現し給ふをみて喜んだ。說法畢つて、人々は皆引き取つたが、誰も佛陀を供養せんと招待するものはなかつた。

翌朝、佛陀は食を乞はんがために二萬の弟子を率ゐて出掛け給うた。市門に達した時、佛

陀は王宮に食を乞はうか、街から街へ食を乞はうか、心中に躊躇うて暫らく立止まり給うた。過去諸佛の時如何になし給ふたかを觀察し給ひ、前諸佛が、すべて、家から家へ食を乞ひ給うたことを知り、直に諸佛の跡を逐はんと決心し給うた。佛陀が市に入つて、乞を行して街を巡行し給うた時、市民は家々の樓上から、この見慣れない風俗を見て驚いて居つた。

「これはまたどうしたことか。羅睺羅王子にせよ王子の母耶輸陀羅にせよ、一番きらびやかな晴衣をつけて、一番端麗の象に乗つて行き給ふのに、悉達多太子は、鬚髪を剃り落し、乞食の黄衣をつけて街に食を乞ひ給ふ。これは誠に不相當なこと、曰はねばならぬ」。人々がこゝういふことをいふて居る時に、不意に佛陀の御身體から光明が流れ出て、四邊のものを照した。この待ち設けない光景に驚いて、人々は佛陀の徳と光榮とを讚美して止なかつた。

この時淨飯王は、宮中にあつて、太子が乞士の衣を着て街を巡行し給ふことをきかれた。この報せに驚いて王は立ち上り、外衣の端をつかんで、太子に遇はうと走り出られた。太子を見るや否や、王は叫ばれた。「尊き佛陀よ、何故、あなたはこのやうなことをして耻辱を我等に御與へになつたのでありますか。家から家へと食を乞ふのは是非とも必要なことではありませんか。何かもつとよいたゞしい方法がないのでしやうか」。佛陀は答へ給うた。「我が尊

き父よ、すべての比丘が出で、その食を乞ふは相應のことで又便利のことではありませんか。王は更に宣うた。「然し、私共はあの有名な三摩達多王の子孫ではないか。私共の譽高い種族の中には、このやうな無作法なことをしたものはありません」。佛陀は更に答へ給うた。「我が尊き父よ、光榮ある三摩達多王の子孫といふは陛下と陛下の王族のことではありません。佛陀の系圖は諸王や公子の系圖とは全く別物であります。諸佛の方途は王族のそれとは土臺から違うて居らねばなりません。過去の諸佛はすべて常にこゝういふ風に食を乞うて出掛け給うたのであります。かくの如く語つて歩を止め、次の句を説き給ふた。「尊き父よ、私が食を乞ふ常習を忽にするには相應しくないことでもあります。乞行は眞理に相契ひ、大なる功德を生じ、今生及び後生の幸福を生ずる善き行業であります」。佛陀のこの説法をきいて、淨飯王は豫流果に入られた。佛陀は父王と共に王宮に行き給うた。その途に於て、佛陀は、「教法の命する所に従ひ、法規に契うて乞を行すものは善行の人にして今生後生の幸福を得べき人であるが、然し、教法に従はずして乞を行すものは、その乞行を廢止せねばならぬ」。王宮に入り給ふ時、この句を説いてゐ給うた。佛陀の叔母喬曇彌は豫流果の聖者となつた。父王はこの第二の説法に依つて一來果に入つた。

父王に對する佛陀のこの御答は非常な有名なもので最も注意に價するものである。偉大なる徳者は氏や妻性や財産の與ふる特權を捨て、眞正な偉大と高貴の稱號をひとり法から得るのである。熱誠な法の遵奉者のみか人々の尊敬に相應はしいものである。食を乞うて歩くといふことは浮世心の人の眼には、卑しい下等な行爲と見えやうが、法に従つて行はるものであるから一番尊い嚴かな行爲となるのである。

この氣高い道理は徳の殊勝といふことを大膽に一番強い土臺の上に打ち立て、佛陀が人々に教へ、人々の心の上に眞はせ給ふ善の律條を根から是認したのである。善とか殊勝とか、賞讃に價するとか、功德があるとかいふことは、最早人々の氣儘な誤りの多い意見に任せて置くべきではない。全知に在す佛陀が発見し復活し説き弘め給うた永遠の法の不變の教條に依らねばならぬのである。この眞理は、光のきらめきの様に父王の心を照し、王は自分の王子の最初の説法に依つて四果の第一豫流果の聖者となられたのである。

淨飯王が先祖と誇る三摩達多王といふのは、佛教聖典に依れば、所謂初初の王で、人々がサーリと呼ばれた米を喰べて、始めて欲情を抱く様になり、人々の間に、「私のもの」、「汝のもの」といふ語が交される様になつた時の王である。緬甸の王は、そのいふ所に依れば迦維羅王家の裔であるといふことであるが、今日でも、三摩達多大王の流れだといふ誇りを持つてゐるのである。私は、現時の緬甸王が、至極平氣で、誰も疑ふことの出来ない確實な事實であるかの様に、自ら三摩達多王統のものであることを話されたのを聞いたことがある。

淨飯王は佛及び佛弟子を王宮の上段に請じ、用意の食物を供養せられた。食事の終つた時に、宮中の女姓達は皆佛陀を拜せんために出て來たが、耶輸陀羅妃は人々の勸めもきかず、太子もし猶妾に特別の思召を有つて居給ふならば、佛陀自ら妾の室を訪ひ給ふであらう

といふ望を抱いてゐられたものであるから自ら出て來られなかつた。この妃の故意とした缺禮を見てとり、佛陀は父の王に宣ふやう。「尊き父よ、私は妃を尋ねて、一語を出さないで妃をして柔順に歸敬せしめやうと思ひます」。淨飯王は自ら鉢を取り、太子及び太子の二大弟子舍利弗目連を伴うて妃の室に行かれた。佛陀が室に入つて定め坐に即き給ふや直ぐ、耶輸陀羅妃は、佛陀の足下に斃れて、裸の上に兩手を乗せ、幾度もく額を御足の上部に觸れしめた。淨飯王は妃が常に太子に拂ふた敬愛の情を讀み説いた。「あなたが黄衣を著給うたと聞いてからは、たいその色の衣しかつけません。あなたが日に一食しかなされぬといふこと、小さな低い床の上に眠み給ふことを知つては、些の躊躇もなく、香料をすて、あなたの例に慣ひ、一日に一食と定め、低い床に眠り、香味のものをすて、顧みなかつたのであります」。佛陀は答へ給うた。「譽ある大王よ、私は今耶輸陀羅妃がなした殊勝な行に驚きません。前生に於て妃の徳が猶僅少であつて、完き域に達せぬ時でさへ、ある山の麓に住み、身に相應したことを知り、教法の義務に對して殿しい注意を以て侍して居りました」。

この日、即ち、カチャン月の満月の第二日は五大慶事の執行日であつた。即ち佛陀の弟、難陀は、一に灌頂をなし、二に元服をして冠をつけ、三に皇太子の位に上り、四に宮室を頂戴

し、五に結婚をすることになつてゐた。佛陀は王宮を辭し去る場合に、この若き太子に鉢を與へて、隨從するやうにしむけたまうた。難陀は直に世尊の命に従ひ、宮室を離れた。難陀が今や王宮から出かけやうとした時、今太子と結婚せやうとしてゐた姫は、太子の足音と聲とをきゝつけた。その時姫は、丁度その美しい黒い丈なす髪を結うてゐたが、左手に黒髪を握り、右手にて窓格子をつかみ、可憐な振ひた聲を振り上げて、直ぐに歸つて來て下さいと叫んだ。姫は太子のすがたがみえなくなるまで心配の眼を遠くへ配つた。いつまでもく窓側によつて不吉の兆候に打ちさわぐ悲しい胸を抱いて思ひにふけつてゐた。難陀は早く鉢をその持主たる佛陀に御返し申して早く歸りたいのであつたが、氣憶れたために、御渡しすることが出來ず、遂に僧舎まで隨從して行つた。その途中では比丘とならうなぞとは微塵で思つて居なかつたのであるが、行きついてから遂に教團中の人となつた。かういふ次第で佛陀が迦維羅城到着の第二日目には難陀は比丘となつた。猶ある聖典にはこの事は第三日目のことであるとしてある。

その第七日目であつた。羅睺羅の母、耶輸陀羅妃は、羅睺羅に一番貴い請衣をきせて、「可愛い子よ、あの二萬の比丘に圍繞されて、黄金輝く華々しい容顏をして、梵天の様に見え給

ふ人がお前の父上で在すぞよ。父上は已前には四個の金の皿を御持ちになつた。それが父上の御出家の日から見えなくなつた。御前今父上の所へ行つて、「私は今は祖父の王について王位に昇る様に定まつた太子の身でありますから、あの相續の權利として私のものとなる筈の寶物を私に下さい」と仰しやい」と教へて、佛陀の許へ行かした。若き王子は直ぐに佛陀の前に進んで、子供相應の無邪氣と人なづかしさを示して、父の愛の中に入り込まうとつとめた。「父上と一緒に居てどんなに仕合せでしやう」とも附け加へた。佛陀は食事を終り、いつもの感謝をして、立ち上り、その場を去り給うた。羅睺羅は「父上、遺産を下さい」といひつゝ後へに隨うた。佛陀は「どういふ要求を喜びもせず勞はしともせず、一向平然として給うた。弟子の中でも、誰もこの王子の行爲を妨げ、王宮に歸さうとしたものもなかつた。どういふ具合で、一同間もなく僧舎についた。佛陀は自ら思ひ給ふやう。「羅睺羅は私に滅びるものを求めて居る。然し、私はもつと勝れた、滅びないものを與へやう。私が菩提樹の下にて集めた寶を分ち與へやう。こうすれば、未來には更によい遺産を得さしむることになる」。佛陀は舍利弗を呼んで宣うた。「愛する弟子よ、若き羅睺羅王子は、私に浮世の遺産を乞うて居る。それは何も彼を利用する様なことがない。私は今もつとすぐれた滅び

ない遺産を與へやうと思ふ。彼を比丘としやうと思ふ」。目連は羅睺羅の頭を刺つて、黃衣を著せ、舍利弗は第一の教を授けた。その後、羅睺羅が沙彌となる時には迦葉が、その新しい職位の義務を教授した。

淨飯王は第一の太子悉達多が王宮と王宮のすべての歡樂とをすて、あらゆる豫防を施したに拘らず、幽棲に退いて沙門となる悲をみた。次には第二の王子の難陀が、豫言者のいふ所に依れば、偉大なる國王となる運命を擔うた人だといふにも拘らず、教團中の人となつた。この二つの悲を痛んだ。然し今、その上にかへて、加へてその愛孫羅睺羅も又比丘となつたといふ悲報を知つた時には、最早堪へ忍ぶことが出来なんだ。「私は可愛い孫が王位を繼承して呉れるといふことを唯一の希望とした。この希望で二人の愛子を失うた悲さもやゝ慰めたのであるのに、あゝ今は我が王位は何となることであらうか。王統は茲に絶えて仕舞うた。直接の繼承は出来なくなつた。全く破れて仕舞うた」。

淨飯王は不還果となつた。自ら思ふやう。「私が二人の子と愛孫を失うた悲痛はもうこれぞ澤山である。この苦痛を子を持つ他の親に與へたくない」。王は佛陀の所へ行いて、禮拜をなし、人の子にして、両親の許可を得なければ比丘となることが出来ないといふ制定

をして貰ひたいと願はれた。佛陀はこの父の願を許し、法を説き給うた。説法の畢つた時に、淨飯王は禮をなし右に遶りて歸られた。佛陀は直に諸弟子を集めて、談り給ふた。「愛する比丘等よ、両親の許可を得る已前に誰れも比丘となることは出来ない、この規則を破るものは罪を得るであらう。

ある日佛陀は父の王宮にて食事の供養を受け給うた時、王は佛陀に談られた。「あなたが幽棲の林に大苦行をしてゐ給ふた時に、その劇しい苦行に疲れて到頭斃れて、死んで仕舞はれたといふ知らせをもつて來た天使がありました。然し私は決してこの流説を信ずることが出来たのでした。あなたが成道の前に死なれるといふことは決してないと信じて居つたからであります」。佛陀はこれに答へ給うた。「譽の高い父よ、あなたは功德か御すゝみになりました。あなたがこの誤報をお信じなされぬのは別に不思議はありません。前生に於て、あなたの功德が尙進まない幼稚の域にあつた時でさへ、あなたは自分の子が死んだといふことを御信じにならなかつたことがあります。たゞの知らせ許りでなく證據として骨まで出されたときでさへさうだつたのであります」。かく知らして佛陀は、マハードハンマバ—ラ本生譚を委しく語り給うた。この物語の終つた時に王は不還果となつた。佛陀はかく

父の王を第三位の聖者として置いて王舎城へと歸り給うた。

この旅の途中、最勝尊佛陀は末羅族の國阿菟比耶アヌヒヤの村に着き給うた。この村の隣の椽樹林に佛陀は二萬の弟子を率ゐて憩ひ、閑寂を樂み給うた。

佛陀がこの村に留まつてゐ給うた時、佛陀か、迦維羅城の人々に植えつけ給うた大法の種は追々に芽生をして來た。佛陀の叔父斛飯王ドクワンには摩訶那摩マハナマと阿那律アナルといふ二人の王子があつたが、ある日摩訶那摩は弟の阿那律に語つていふには、「王族の家からは多勢の人が家を捨て、佛陀の教の下に沙門の生活を營んで居るが、我々の家からは未だ一人も出で居らない。私は汝に相談したいと思ふ。もし汝が出家するならば、私に汝の遺産を與へよ、私が出家をすれば、私の遺産は汝に與へる」。阿那律は直にこの申入を承諾した。

二人の兄弟の企か知れ亘つた時に、王子の仲間なり又親戚關係になつてゐる五人の王子、跋蹉バクダ、金毘羅キンピラ、跋提バクティ、阿難陀アナンダ、提婆達多デーバダタもこの敬虔なる企に加はりたといふ願ひ望んだ。これらの王子達は、一番美しい衣服をつけて、唯一人の理髮師、優波離をつれて阿菟比耶村へ出掛けた。佛陀の椽樹林に近づいて、王子等は悉く著てゐた衣を脱し、今までの道中善く親切に給事をして呉れたその功を賞して、これを悉く理髮師優波離に與へた。優波離は初めこれ

を受けて獨り國へ歸らうとしたが、また自ら思ひめぐらすには、「私がこの綺麗な衣服を持つて國に歸る時には、國王始め人民はみな、私が不正なことをして取つて來たものと思ふまい。さすれば殺されるは必定である。してみると今は歸るべき時ではない。主人に從うて離れない方がよろしい」。優波離は急いで道を返して今や椽樹林に入らうとして居る王子達に追ひついた。優波離はその王子達の仲間に入ることを許されて、一緒に佛陀の御前にすゝみ出で、例の如く敬禮して入團の許可を嘆願したが、願は直ぐに許された。その入團の式を擧ぐる前に、王子達は互に相談していふやう。「王子の倨傲の念は誠に大きく且つ深い根ざしを持つて居るものであるから、それを振ひ落し、その暴威を屈するは容易なことではない。それであるから、今先づ優波離を第一に入團せしめ、先進者として、優波離の前に一々平伏して次に我々の入團の式を行ひ、我々の倨傲の念を殺したいものである」。この願も許された。それで優波離先づ入團して、王子達は優波離を拜して教團の人となつた。かく王子等は一様に教團の中の人となつたが、この王子等の精神上の進歩は一樣ではなかつた。かく竹林精舎に過した第二の兩期中に跋提と金毘羅と、跋窣とは最高の證果阿羅漢位を得阿難は豫流果に入り、阿那律は論議の道に於て大に進むことを得た。提婆は獨り、世第一法の

位よりも上には達するを得なんだ。

茲にその入道が記されて居る阿難陀は淨飯王の弟甘露飯王の子であつて、喬答摩佛の第一の從弟に當るのである。阿難陀は迦維羅衛の大聖者の有名な弟子達の一人で、その人は、その輝やく智慧の上達に依つてよりは、優しい情緒、愛に満ちた心根に依つて名高くなつた人である。阿難陀は教團に入つたその日から佛陀に對して溢るゝ許りの尊敬と、暖かい愛情とを捧げたのである。佛陀も亦、この弟子の愛に對しては眞誠な尊敬と優しい愛情を以て報いられたのである。阿難陀が親しく佛陀に近侍し奉つたのはこの後のことであるが、その以前と雖も、阿難陀のすぐれた柔和な性情は、いつでも、佛陀の好み給ふいかなる仕方に於ても、佛陀の御役に立つ様にと注意をしてゐたのである。阿難陀は大師と大師に近づく人達の中間者であつた。佛陀が僧衆を呼び教を説き給ふ時、人々が佛陀を訪ひ奉る時、僧衆に旨を傳へ、訪問者を佛陀の御前に連れ出すのは阿難陀の役目であつた。

提婆達多は佛陀の第一從弟で又義弟である。提婆の父は摩耶夫人の兄善覺長者で、提婆は耶輸陀羅姫の兄弟である。

これらの王子が入道した後、佛陀は阿菟比耶村を去つて王舎城に向ひ給うた。この間は主に新しい入團者に對して眞理の道を説示し道徳を實踐せしむるために費やされた。この間に立つて八歳頃の羅睺羅は幼少ではあるが最大の素質を有することを人々に示した。年齢に比べては非常にかけ離れた大なる所得を顯はして屢々、比丘等の賞讃を博した。或る時、佛陀は比丘等が、羅睺羅の學問上の驚くべき進歩に驚嘆の辭を放つて居るのを御さ、

なされて、知らないふりに彼等の前に來り、何を語り合つて居るのかと尋ね給うた。彼等は羅睺羅の驚くべき能力と比ひなき善良の性質とを讚美して居る趣を申し上げた。佛陀は、「これは驚くべきことではない」と仰せられ、ミガローバ本生譚を談つて、前生に於て、羅睺羅が、殊勝な稱め讃ふべき性情を有し、群を抜いて居つたといふことを説き明し給うた。羅睺羅はその善良なる性情と行狀との報酬として、沙彌となされた。羅睺羅の精神は茲に至つて殆んど神秘的な状態に向上した。一萬の天人と共に沙門果を得た。

この時期には、佛陀は屢々食を乞うて王舎城に赴き給うた。その都に一人の花賣があつたが、毎日八束の花を王に捧げて、八枚の銀を貰うて歸るを常としてゐた。或る日いつもの様に王に花を捧げやうと市へ來かゝると偶然佛陀と相會した。その時突然、佛陀の神通力に依つて、佛身から六種の光明が流れ出た。その時花賣は思ふやうには、佛陀の御許へ參つて、この花を御供養申さう。國王はいつもの花を奉らぬので逆鱗せらるゝに相違ないから私を縛り上げ、牢獄に投じて、死刑に處し給うかも知れぬが、然しこのやうな大危険に臨んで居らうとも私はかまわぬ。世尊の御許に行つて、この花を奉らねばならぬ。私の得る功德はいかに大きくいかに長く續くであらうか。この功德は無數の生に私に隨うであらう。

心は喜びに躍つて、須摩耶といふこの花賣は佛陀の人々に取りまかれて坐し給ふ場所にいたり、御脚の下に花を捧げた。佛陀は非常な満足を以て、この花を受け給うた。須摩耶は家に歸つて一具始終をその妻に談つた。妻は一は王の逆鱗を愁ひ、一は毎日の所得を失うたことを怒り、非常に疎暴な言葉を以て夫を罵つた。一時の激怒で氣が狂うて妻は直に王庭に走り、夫を讒訴して、離婚を請求した。頻婆娑羅王はこういふ比べものゝない無法の行爲に驚いて、その女を王の前より引き立たしめ、家に歸らしめた。一方王は直に一宮臣に命じて、その翌日件の花賣を宮中に召さしめた。勿論、王の命令は命令通り、正しく行はれた。多勢の宮臣の前にて、王は大いに須摩耶の行爲を稱讚し、直に厚く施してこれに報いられた。王は花賣が八束の花を供養したことを標賞するために、八頭の象と、八頭の馬と、八人の奴隸と、八頭の牡牛と、八千片の銀と、八個村の収入とを與へられた。佛陀も亦同じく人々の前にて須摩耶の功德を賞し、須摩耶は全世界に於て四種の刑罰界を免かれ人に生れ、天に生れて幸福を得、遂に辟支佛果を得るであらうと記別し給うた。供養はいかに少なくとも、大膽に危険を冒してなした供養の徳は大なるものである。須摩耶は君主の逆鱗を得るに定つて居つたのであるけれども、敢てこれを犯して供養をしたのである。

蟄居の時期の終つた時に、佛陀は所々に遊行し給ふた。即ちチエーテア國のバツチエー
 ナウラントタに行き、それからピサキラ林に入り、王舎城に歸つて、寒林に近きエン・ダイク樹
 林に入り給うた。

佛陀が今度新に献せられた壯美な祇園精舎に滞留して居給ふた時であつた。難陀の上に
 一大誘惑が起つて、比丘の生活を厭はしめ、浮世の生活に歸らしめやうとしたのであつた。
 難陀は前に花嫁チャナバダ・カルヤーニーに直ぐ歸つて來るからといふ約束をしたことを
 想ひ出し、これから直に王宮に歸つてその約束を果し、以前の楽しい生活をつゞけやうとい
 ふことを同朋の誰もかれにも語つて歩いた。このことは直に佛陀に告げられた。佛陀はこ
 の誘惑を芽生の中に碎いて仕舞はふと思ひ給うて、難陀を抱いて、空中に上り、切利天の方
 向にすゝみ給うた。この途中、佛陀は神通を示して、大林の火災の光景をお見せなされた。
 炎々と燃え上る火炎の中に、一本の焼木の株が残つてゐた。その木の根元に一匹の女猿が
 居る、尾も耳も鼻もなくなつた不具の猿である。難陀は何ともいへぬ恐怖の念に打たれて、
 この厭な光景を見るに忍びずして眼を他方に轉じた。やゝ暫らくして、今度は五百人の雙
 びなき美女が打ち並んで行く眼も眩み、心も奪はれる光景が顯はれて來た。これらの美女

はすべて天女であつて、今帝釋天王を禮拜せんとして天宮に行く途中である。難陀は今
 天女の美容に全く心を奪はれて魂の抜けた人のやうに、たゞその行列を見つめるのみであ
 つた。佛陀は宣ふやう、「難陀よ、汝はこれらの美女と汝のチャナバダと比べられると思ふ
 か」。難陀は答へ奉つた。「チャナバダをこれらの天女に比べますれば、丁度、先きに見た不
 具の女猿の様なものであります」。佛陀は宣うた。「もし汝が猶數年僧團に止つて修行を積
 むならば、これらの天女を汝のものとしてやるであらう」。この御言葉をきけば私は喜ん
 で何年も止まります」と難陀は答へ奉つた。佛陀は難陀を連れて僧團に歸り給うた。

僧團の外の人々は直ぐ佛陀と難陀の間につた事柄を知つたので、天女のことについて
 いろ／＼と難陀を嘲り罵つた。これに耻ぢて、難陀は閑寂の處へ退き、反省と悔悟の行に身
 を委ね、遂に今までどうしても征服することの出來なんだ欲情の悪念を除くことを得たの
 である。この精神的葛藤が終つて、光輝ある平安を得た時に、難陀は佛陀の御前にすゝみ、
 未長く僧團に住して、宗教的生活を営みたいといふ願を申し上げた。又天女の約束の取り
 消しを願うた。佛陀はこの幸福なる心の轉化を喜び、僧衆を集めて左の如く語り給うた。
 「この事ある前には難陀は丁度屋根の葺き様の悪い、従つて雨の洩る家のやうなものであつ

た。然し今は上手に屋根を葺いた家である。欲情の漏失を防ぐに充分である」。佛陀は猶難陀の前生譚を語り給うた。

「カツバカと名くる一人の商人は處々へその商品を運搬する一頭の驢馬を有してゐた。一日、こんもりと樹々に被はれた場所近くへ来た時に、カツバカはその驢馬の荷を下して、暫らく休ませ草を食べさせた。その時丁度、一頭の女驢馬が同じくその近所で草を食べてゐたが、カツバカの驢馬は直にこれを認めた。出達の時が来た時に、カツバカの驢馬は女驢馬に心を引かれて、主人に劇しく抵抗し、荷物を背にすることを承知しなかつた。カツバカはこの異常の狂態に腹を立て、謀反の獸をおびやかす、鞭を以て出来るだけ強くこれを打ちのめした。この哀れな獸は、遂にその打撃に堪えないで、この狂態をなした所以を白状した。カツバカはこれをきいて驢馬に語つていふよう。「もしおまへがこの旅行をついで呉れれば、旅の終つた時に、先きに見た女の驢馬よりもつと美しい數頭の女驢馬を與へよう」。とカツバカはこのやうに約束した。流石に狂態を盡した驢馬もこれをきいて喜んで又旅をついでた。さうしてその旅の終つた時に、カツバカがいふには「私は旅にした約束は守らう。然しその日々の稜は以前の通り與へる外に少しも増さないことを記えて居らねば

ならぬ。汝はその一人前の食物を汝の仲間と分けて食べねばならぬ。續いて、汝は子供を持つやうになるであらうが、それも汝の力で扶養せねばならぬ。汝の定糧あひてがいちは少しも増されはせぬ。そして、汝は従前の通りの仕事をせねばならぬし、家族の扶助のことも考へて行かねばならぬ」。これをきいて件ことんの驢馬は暫らく考へた結果、矢張り今までの通り獨り身の方が都合がよいと氣がついて、その時から直間違つた欲情を起さないやうになつた。この寓話をした後で佛陀は更に附け加へて宣ふやう。「驢馬といふは難陀である。女の驢馬といふはチャナバダ・カルヤーニーであつた。さうしてカツバカといふは誰あらう、欲、色、無色三界の師である最勝尊に在す佛陀であつた」と。

佛陀は毘舍離國滯在中、處々國中を遊行し給うて、至る處群衆に說法し給うた。エツギダツタと云ふ有名なる婆羅門に御遇ひになつたのも此の傳道中であつた。エツギダツタと云ふは喬薩羅國王の婆羅門大臣であつたが、其の職を息子にゆづつて多勢の弟子と一緒に其行者の生活を送つてゐたのである。佛陀はこゝにいふ勝れた人の入團を熱心に希望し給うた。それで、その目的のために、先づ第一に、目連が仙者の所を訪れたが、それは全く失敗に終つた。エツギダツタの受けた印象はたゞ不愉快のもので有つた。こゝにいふ人物の教化は

佛陀御自身の大雄辯によつてのみ成功せられるもので有る。佛陀は直にエツギタツタの屈へ赴き給うた。さうして先づ第一に仙者に向つて、弟子達をして山川草木の自然的現象物を崇拜せしむる非理を非難し給うた。

かく仙者の非理を非難して、次に四真諦の智慧を開顯し給うた。心敏きエツギタツタは佛陀の教説の下にこの眞理を直に體得してすべての弟子達と共に佛陀に歸依し奉つた。佛陀はこの華々しい精神的大勝利を得て、王舎城に歸り、第三の雨期を竹林精舎に過し給うた。佛陀が諸處の巡遊中あらまし弟子達に示し給ふた智慧學問を組織立て、十分に説明し給ふのはこういふ雨期の三ヶ月の間で有つた。佛陀はかく教理を開顯し給ふと共に更に注意深く、實踐的戒律の嚴守と實行を弟子達に命じ給ひ、此れによつて欲情を征服し、浮世の執着をなれ精神的生活を送らしめるやうになされたのである。

エツギタツタの物語は、その隱者の有してゐた教理の一端をほのめかしてゐる。エツギタツタの對論者、即ち佛陀は、彼に對して、山や木や森や河や、こゝにいふ自然天體を崇拜することを非難し給ふた。緬甸原譯者の用ひた記述に依つて見ると、その教理は汎神論的思想であつたやうに見える。一體印度哲學の大部分は大抵、この間違つた汎神論の基柢に打ち立てられてゐるのである。汎神論者に從へば、この世界は神の主質から離れて居らないもので、存在する一切のものは、神の實質の表現もしくはその發展なのである。この世界は創造者から離れてゐるやうな、そんな、神

の創造物ではない。あらゆるものに自らを實質的に表現した神其物である。もしこの思想にして眞理ならば、エツギタツタの行爲を非難しうるものがあらうか、エツギタツタは神を崇拜した。彼を圍繞し、彼の注意を喚起する偉大なる物の中に見た至上者の一分を崇拜したのだからである。

十七世紀に於けるスヒノザ及びこの世紀に於ける不幸にして余り多數に過ぐる彼の追隨者は、印度の哲學者の汎神論的思想をいろ／＼雜多の鑄型に鑄直して、私達が見る通り印度の精神に悲しい結果を生ぜしめたあの恐ろしい食物を殆んど了解し難い言葉を以て聽衆及び讀者の睿智に提供したのである。もつと、私達が、印度哲學者の形似上學の野に展開した諸々の教理思想を熟知してゐるならば、神の啓示の垣から外へ出た近世哲學者といふものはその學に於て一步も進歩してゐるのではなく、その獨創の見といふのもつまりは二千年間以上も、恒河の流域に於て、思辨學の彼等の先輩の間に行はれた混亂の忠實な再現に外ならない事を直ぐにさとるであらう。

佛陀はかくして、其の僧團に滯在中多くの教訓を弟子等に與へ給うたのであるが、今茲にチャンブーカ阿羅漢の前生の業と最後の入道とに關して示し給うた事柄を記さうと思ふ。迦葉佛の世にチャンブーカ——前生にも此の名で呼ばれた人で有るが——は舍衛城に於て沙門の衣をつけてゐた。彼は美しい僧團に住み供養者として其の地の一番善良な一番富裕な人々を有してゐた。或る日他國の一比丘が其の僧團に來つて暫くの間一緒に暮らさしてもらひたいと願うた。然し心なしのチャンブーカは他國の沙門を建物の中に入るゝ事は出來ないと頑張り、寒い時候であつたにも拘らず廊下に立つて居る事だけを許した。然しそ

の土地の人民は彼等の師匠よりはやさしい人達なので、この旅の比丘に對して非常に同情の念を惹き起し、毎日家主のチャンプーカ並にこの旅の比丘に對して食を運んだのである。怨恨深いチャンプーカ比丘はその悪い客人に對して人々がこのやうに親切と同情を示すを見て心善からず思ひ、遂に堪えることが出来ないで、或る時、「塵を食へ、裸體で行け、地面へ寝よ」といふ様な残忍なことを言ひ放つて、己れ忘れて客僧を嘗つた。かうした人情を外れた行ひは直に恐ろしい刑罰を受ける。悪性のチャムプーカは第一に地獄の苦を受けねばならぬ。

地獄を免かれて、人間に生れて來た時、彼は貴姓の人を兩親としてゐたが、不思議なことには、常に幼年時代から最下層の人々の習慣に耽る様な傾向を持つて居た。竊に盗みをする。厭なものを食べて飢を満す、衣服をつけず、裸體で横行する、地上に眠る。かういふことを平氣でする。彼の兩親は幾度もその習慣を直さうと試みたが皆失敗に終つた。それで兩親もあきらめて、最後に外道の苦行者に渡さうと決心した。外道は彼を引きとつたが、彼は仲間のもものと一緒に物を食べることをせず、又一緒に乞行もせず、仲間が居なくなると見當り次第に殘物を貪食し初める。この狂的な厭な習慣は直に仲間のもに見つけら

れた。仲間のものがいふには「こんな男と一緒に住むのは厭である。もし沙門喬答摩の弟子に、我々の仲間の中にこんな男があると知れ、ば我々は笑ひものとならねばならぬ。」彼はこの仲間からも放逐せられた。チャンプーカは王舍城の下水の溜り場所の附近の岩へ行いて、其處を住家として疲れ切つて居た。右手と右膝を岩にもたれて、身體をこの上に置き、左手と左足を擴げて舉げて口をばかんと開いて居た。これをみて「なせかういつも深く空氣を吸ふ人の様に口を開けて居るのか」と人々に尋ねられて、彼は「食へ物は何によらず粗食をも禁せられて仕舞うたから今は空氣だけを吸うて居るのである」と答へた。兩足の奇妙な置き方を尋ねられて、「私もし兩足を大地に付ければ大地が常に震動するから」と答へた。彼はかういふ悲しむべき状態に五十五年を過して來たが、佛陀はこの有様に同情して彼を道に入らしめたいと覺召し、自ら其の場所に向き給うた。佛陀は先づ最初彼が友たるべき仙者に對して犯した罪を上げ、前生の所業を述べ給うた時に、チャンプーカは己の罪を耻ぢて謙下の心を生じた。佛陀はこの様子をみて次に教法を説き給へば、悔恨に堪えないチャンプーカはこの教法を信じ、立つて、喜びに躍る心をおさへて、新たな師匠に従ひ、間もなく沙門果をひらいたのである。彼が教團の僧衆の中に置いて、學徳に秀で高

名の位置を占めたのは、かうした因縁があつたのであつた。

チャンブーカは今日の瑜伽師、即ち印度の苦行者と同じいものやうに思はれる。五十五年の間も、群衆に身を晒して、自ら故意に行うてゐる信じ難き程の苦行に依つて人民の賞讃を博さんと望み、あらゆる困難を忍んで岩上に留まつてゐたのである。彼の見せかけの所謂神聖といふは大變疑はしいものから出来てゐるので、自ら食べないで生きてゐるとか、神通を有してゐるとかと大言壯語してゐたのである。かの自我の眞の智識の結果に外ならぬ公明なる謙遜といふものはこの精神上の山師の受する徳ではなかつたのである。

第九章

- (一) 給孤獨の歸佛
- (二) 耆婆物語
- (三) 耆婆佛陀の病を癒す
- (四) 毘舍離の市民の勸請
- (五) 佛陀の日常生活
- (六) 拘利の民と迦維羅城の民との水論

- (七) 新歸佛者信を増長す
- (八) 淨飯王の入寂
- (九) 姨母波闍波提等比丘尼となる
- (一〇) クヘーマ皇后の歸佛
- (一一) 異教の師、佛陀の神通に懐伏す
- (一二) 佛陀初利天に上つて母后に法を説く

佛陀が王舎城に在した時のことであつた。給孤獨と呼ばれて居る富商が、五百の車に、高貴な貨物を澤山に積み重ねて、王舎城へ着いた。給孤獨はいつもの通り親しき友達の家を宿所として、暫らく滞在して居つたが、この間に、不圖、喬答摩が佛陀となり給うたといふことをきいて、何とは知らず不思議にも電氣に打たれた様に、感動して、佛陀に謁して法をきかうといふ熱望をさへ起したのであつた。ある日、彼は早朝に眼覺めて、不圖、窓の格子を通して挿し入る異常の光明を認めた。彼は、引きづられるやうに、その光明を逐うて、家を出で、遂に佛陀の説法の會坐に參して、吸ひ込まれるやうな氣持で法を聞いて、佛陀の説法を終り給うた時には、豫流の聖果を獲得したのであつた。彼はその後二日目に、佛及び佛の

聖衆に、大供養をなし、彼の生國なる舍衛城にも御車を枉げて錫を留め給はんことを願うた。この願は許された。

舍衛城は、王舍城を離れること、四十五由旬の處にある。給孤獨は、莫大の費用を投じて、この兩城の間、一由旬毎に、一つの僧舎を建立した。佛陀のこの僧舎を辿つて、王舍城に近づき給ふや、信心の深いこの商主は、世界に比類ない尊い訪問者の歓待のために、又嘗て佛陀のために新に造立した祇園と稱する壯麗なる精舎を奉獻するために、次の準備をした。彼は先づ御迎ひとして自分の息子を華麗に装はせ、富家の子弟五百人を従ひて赴かしめ、次に二人の娘をして、華かな珠玉の飾りに眼も眩はしい五百の女子を率ゐて、これに續かしめ更に富家の妻を頭に頂ける五百の婦人に各々水壺を持たしめて第三番に續かしめた。而して自分は最後に、新しい裁て下しの衣を著けて清らかな装をした五百の従者を伴ひて御迎ひに出掛けたのである。佛陀は快くこの歡迎を受け給ひて群衆を先導として、自ら諸比丘に従ひて、これに續き、やがて祇園の園に入り給うた。佛陀はこの園に入り給ふや、光顔魏々として、さながら、烏王孔雀の誇らかに尾を擴げた時の様に美しく見え給うた。この時、給孤獨は世尊の前へ進み出で、この僧園を奉獻するには、いか様になすべきかを問ひ奉つ

た。佛陀は、「これから後に、四方から集ひ來る比丘等に寄附するがよい」と答へ給ひ、長者は、佛陀の御手に、黄金の壺から水を注ぎつゝ、「私はこの僧園を、世尊及び世尊の諸比丘、これから後、四方より集うて來給ふ比丘衆に寄贈いたします」といつた。この大奉獻の式は七日の間行はれ、この偉大壯重なる獻納の祝典について、斷間ない歡喜の聲が四ヶ月間もつゝいた。この僧園の場所を購はんがために、又、僧舎を建立せんがために、驚くべき巨額の金が費やされた。獨り釋迦牟尼世尊の時許りではなく、過去の諸佛の時も、いつでもこの場所はかくの如く購はれて、かくの如く獻納せられたのであつた。

(ピガンデーの註。——茲に耆婆といふ有名な國醫の物語が長々と挿入してあるが、佛陀の一生には別に關係のないことであるから、私は簡單にその記事を抄記することとする)。或る時、佛陀は王舍城に住し給うたが、その當時吠舍離には有名な娼婦があつて、これがためにその都市は非常に繁昌して、愉快であるから、あまた他國人を引きつけて居たのであつた。遇々吠舍離にあつて、この事状を目撃した王舍城の一貴族は、歸城してから、この有様を國王に語り、王國の内にも、音樂と舞踊に巧みな傾國の美容ある幾人かの有名な娼婦を置いてはと獻言した。この獻言は直に容れられ、美容な少女は四方に求められたが、やがて

一人、王の寵愛を受けて、非常に華麗な生活をなす女があつた。この女を一夜坐右に侍らすためには一百銀を要するのであつた。國王の太子は、この女に現を抜かして繁々、女の許に通ひつめたが、女はやがて身重になつた。女は自分の身の變化を知つて、直に病氣と稱してすがたを隠し、やがて一男子を分娩して、下女に命じて、遠い寂しい場所の塵芥山の上に、この子を棄てしめた。其棄子のあつた翌朝、王の太子は、數名の從者を連れて、偶然にも、我が子の棄てられた場所近く馬を馳つた。太子は、何事とは知らず、その周圍に澤山の鳥が群がつてがや／＼騒ぎ立て、居るのに不審を打つて、何事かとその原因を探索したが、塵芥の中に半埋もれて、まだ呼吸の通ひのある赤子を見出した時に、太子の驚きはどんなであつたであらう。太子は、見れば何となく氣高い赤子の様子に心引かれて、從者に命じて赤子を拾ひ取らしめ、宮中に歸つて、愛憐を垂れて養育した。この子は着婆と名けられた。着婆といふは生命といふ意味で、太子がこの子を見附けられた時に、また生命はあるかと問はれたに因んで名けたのである。追々に生長して、物心が附く様になると、この子は何等の仕事もなしに儂々として宮庭に止まることを欲せないやうになつた。彼は、人類を救濟し、安樂ならしめたいといふ志願を起して醫學を學ぼうと決心した、これがために、彼は、ヘナレスに行

いて、有名な醫者に就いて醫を學び、その卓越して才器を以て忽ち醫術に熟達した。かくして彼は師匠から獨立して、醫を開業し、驚くべき療治をして悉く成功し、やがて、限りなき富と非常な名聲を得るやうになつた。

着婆が名聲の高い時であつた。ある日世尊は腹痛を覺え給うて、阿難に命じて醫者を求めしめ給うた。阿難は、この名高い着婆の宅へ行つて、世尊の腹痛を訴へた。着婆は直に世尊の病床を見舞うて、三日の間、香油を塗抹し奉つたが、効顯がなかつたので、更に三葉の蓮花をとつて、種々の藥粉を振り蒔き、世尊に詣で、「至尊に在す佛陀よ、茲に一葉の蓮花があります。この香を嗅いで下さい。これには十種のはたらきが起ります。次にこの蓮華も嗅いで下さい。これにも十種のはたらきが起ります。最後にこの蓮花も嗅いで下さい。これにも十種のはたらきが起ります」と申し上げて、三葉の蓮花を御手渡しして、敬禮をなし右に繞つて精舎を去つた。

着婆は精舎の門を出る時に、自ら思ふやう。「彼の藥には三十種のはたらきが起るといふたが、苦痛が劇しくてその上執拗なのだから、二十九種のはたらきしか起るまい。これは温湯で仕舞のはたらきを補はねばなるまい。」世尊は、着婆のこの心を洞察し給うて、阿難に命

じて温湯の用意をなさしめ給うた。間もなく耆婆は歸つて来て、處方の様に療治をし奉り、佛陀は直に健康を回復し給うた。耆婆は人民が、世尊を供養し奉らんと用意して居る旨を語つたので、目犍連は牛乳を注いで出来た米を幾らか乞はんがためにリーナカの子の許へ行つた。リーナカの子は、その請を容れて米食を施し、且つ世尊のためには特に良米を貯藏したればとて、目犍連にも自分の施食を受けんことを願うた。目犍連は承諾して食を受け、食終つて香水を以て洗ひ清めた鉢の中へ最善の食を盛つた。目犍連は歸つてこれを世尊に奉り、世尊はこの食を取り給うた。その後世尊は王及び無数の人民のために法を説き給うたが、その中にこのリーナカの子も交つてゐた。聽者はすべて初果を獲て、リーナカの子は獨り阿羅漢果を獲得した。

耆婆はその後又、世尊の御前に出で、華麗なる二領の衣を受け給はんことを請うた。彼はこの衣をある國王から、その非常に苦痛の劇しい病氣を療治した禮として贈られたのである。耆婆は更に世尊に向つて、諸比丘が、今まで著古した衣をすて、新しい清らかな衣を受けうる様に許可を願うた。世尊は請を許して二領の衣を受け、施主に法を説いて、豫流の聖果を得せしめ給うた。耆婆は歡喜して、坐を立ち禮をなし右に繞つて會坐を去つた。

暫くした後、世尊は諸比丘を集めて語り給ふやう。「我が愛する比丘等よ、今私は、汝等に向つて施主の衣を施さんとするを許す。汝等のうち、もし只今身に纏ふ衣にて満足するものは、その衣をつけて居るがよい。又、他の衣を受けたいと望むものは、衣を受くるがよい。然し私はこれまで、汝等が、古いぼろ／＼の衣にて満足しつゝあつた知足を稱讚せねばならぬ。」と市門の人達は、世尊よりこの許可の出たといふことをきいて、急いで、新衣を僧伽に贈り、一萬枚からの衣が集まつた。田舎の人達もこれに慣うて殆んど同数の衣が山と積まれたのであつた。

佛陀の最初の弟子達は隱者と同じい様な生活をしてゐたので、これまでは、出家をする前に購うた衣を用ひてゐたのである。然し新しい教團の一員となるや、清貧の誓を實行せねばならぬので、衣食を要する場合には全然公衆の布施に待たねばならぬのである。入團する時に持つてゐた衣は今破れて用ひることが出来なくなつた。この時、別の衣が、比丘元來の徹底的な清貧の、まかな感情を破らない方法で供給せられるやうになつた。それは佛陀の俗弟子の方から好んでしたいといふ好施の志からであつた。この豊かな受施の皮切りは先づ佛陀に依つて開かれた。即ち今耆婆のなした大供養がこれである。佛陀は衣を受くるが如法であるか不如法であるかと、比丘の中で踏躪するものもあらうと心配して、その踏躪を拂はんがために、信者の好んで施すものはよろづ受けても差支ないといふ律條を制定せられたのである。前に、教團に施さるゝ家や土地は受けてよいといふ許可の出たことは記してある。佛陀はこれと同じい理に依つて、信者の施すものは受けて差支ないといふ許可を衣にまで押し擴め給うたのである。

入團のことを記した聖典の中に、比丘に對するこの二種の許可が記されてある。

この後、幾許もなくして、世尊は、吠舍離の人々から、巡教の招請を受け給うた。この招請には次のやうな事情があつたのである。吠舍離はもともと富饒な國で、末羅の貴族が代る／＼政治をして居たのであるが、ある時、疫病が非常な勢で流行して、瞬く間に死人の山を築くやうになつた。人々の中には、これは天の祟を受けたのだから、供犠をして、その怒を和めやうと云ふものもあり、又あるものは、外道の師に救濟を請はねばならぬといふものもあつた。又あるものは、人類救濟の大目的を以てこの世に出現し給うた大喬答摩に依らねばならぬと主張するものもあつた。仕舞にこの最後の意見が勝を占めて、世尊の王舎城に住し給ふことを確めて、末羅の貴族婆羅門達は、夥多の贈物を齎して王舎城に来て、頻婆娑羅王に願うて、世尊の御足を吠舍離に入れて下さるやうにと請うたが、直に彼等の願は許されて、世尊は巡教を承諾し給うた。やがて世尊の竹林精舎を出達し給ふや、頻婆娑羅王は扈從して、恆河の南岸まで送り奉つた。世尊はやがて、非常なる尊敬と敬崇の間に北岸に達し、御足を以て、一度吠舍離の土を踏み給ふや、大雨沛然として國中を漂はさん許りに下つて、一時に死屍を運び去り、大氣は清められ、疫病は直に死息して、病めるものはすべて癒えた。

ナヨン(六月)の月の満月の後五日目に、世尊はかくの如き大利益を吠舍離の民に與へて、王舎城に歸り給うた。王舎城に到着し給うたは、ワチャウ(七月)月の満月の日で、世尊は直に竹林精舎に第四の雨期を過さんと準備をし給うた。

譯者は寫本の中から、この雨期中の世尊日々の御行狀を知り得たから、それを茲に挿入して置きたいと思ふ。

一日は五つの部分に分たれる。一々の部分にそれ／＼の仕事がある。

第一に、世尊は夜明けて間もなく起床し、顔を洗ひ、口をそゞぎ、衣を着けて私室に退き、天眼力を以て、あらゆる衆生を觀察し、細かにその功罪と性情とを知り給ふ。かくの如く種々に觀察の眼を放ち給ふは、衆生の性向を確め、眞理の説法をさく様に心の耕やされたものと、障礙が多くて、大利益を得る準備のないものとを辨別し給ふのである。この仕事が終つてから、世尊は僧伽梨をつけ、鉢を持ち、乞行に出掛け給ふ。世尊は法を聞いて大利益を得るものゝある方へ御歩を向け給ふのである。時として獨り出掛け給ふこともあれば、又弟子達を伴ひ給ふこともある。光顔魏々として、温恭にして静寂に在ます。時として世尊は神通を行ふを許し給ふことがある。鼓せざるに樂器は自ら快き音を奏で、世尊の近づき

給ふことを知らせ、人々の心を樂しましめ、豊かな施を行じて、法を聞くを喜ばしむる。聽衆の中には優婆塞となるもあれば、四果の聖者となるもある。皆その性情に依るのである。かくして世尊は僧苑に歸り給ふ。

第二に、僧苑に歸り給うて、先づ御足を洗ひ、その間、比丘等を周圍に集めて語り給ふ。「愛する比丘等よ、常に心を守り、心を亂さず、反省を忘るゝな、人間と生れて法をきゝ、完きを得、阿羅漢果をさとり、佛果に到達するは頗る難事である。」

こゝに於て世尊は默想の題目を比丘等に與へ給ひ、比丘等は退いてその題目について心を練る。或るものは默然として口を閉ぢ、止むを得ざれば手を以て語り、ひたすらに心を修養する。或るものは木の根に寂しく座を占め、又は洞窟に退く。佛陀はこの時、食事をして、暫らく私室に入り給ふ。正午を過ぎて、再び衆生を觀察し、四方より集まつて教を聞かんとするものゝ上に専ら注意を注ぎ給ふ。やがて私室を出で、既に四方から集り來れる會座の人々に懇ろに法を説き給ふ。教法畢つて、人々は退散する。

(一)釋尊が最も深奥な教理や、大切な教條を御弟子達に示さるゝのはこの時である。釋尊は自分で一番重要に考へ給ふものが弟子達にも身につくやうになることを望み給ふのである。釋尊はかういふ大切な題目が、弟子達の默想

の時にその精神的の糧になる様にと、言ひ換うれば、默想の主題にある様になし給ふのだといふことは疑ひない。佛教の教理に昏い人には、かういふ風に人間に生れることは難いといはれては、了解し難いかも知れないが、然し實際、人間に生れることの難いといふことは佛教教理の主點としつくり合つてあるのである。四種の刑罰の状態(地獄、餓鬼、畜生、修羅)にある有情は、例へば獸の世界の有情であるが、かういふ有様は、その獸の世界を免れて人間に生れて來るには、非常な多生を経て來ねばならぬのである。してその有情の遭遇する困難を喩へて、よく次の比較が説かれる。梵天の世界から針を落す、下の此の世界に一本の針を立て、置く、獸の世界の有情が人間になることは、この上から落ちて來た針が下界の針の上に立つよりも困難だといふのである。この道理から押して、普通の人間が佛陀となるべき性情を具有するまでには、無數生の間、大努力を経ねばならぬといふことは直ぐに考へられることである。この點に於て釋尊の教理は、ある種の現代思想家が人間の完全性を殆んど無限の度に置くのと似通つてゐるのである。

第三に、人々の退散した後で、沐浴を取り、暫らく僧園の廣路を經行し給ふ。この間に世尊の座席が、適當な廣い場所へ設けられる。比丘等は急いでこの場所に集つて來て、互に默想の結果を語り合ふ。不審があれば、直に世尊へ問ひ奉り、世尊は又直ぐに教を垂れ給ふ。比丘等は、世尊の臨機の御答を恭しく聽聞する。かくて夜の暮が垂れ初むる頃、比丘等は悉く退散する。

第四に、比丘等の退散の後、ナツトを始め諸天來つて座に即く。世尊は彼等と語り彼等に

教へて、中夜近くまで過し給うのである。

第五に、世尊は非常なる疲勞より、肢體を休ませんために暫時經行して、やがて私室に退いて安眠を得給ふ。世尊は間もなく起床し給うて、嘗て過去の諸佛の御許に於て、徳本を植え、禪定を勵んで、今生他の人々に勝れた性情を有する人々を觀察し給ふのである。

世尊がかく國から國へと巡歴して化を施し給ふ時のことであつた。世尊はウツガセーナとその妻とその友達とを教化し給うた。茲に簡單にこの教化の模様を記してみやう。ウツガセーナはもと長者の息子であつた。彼の若い時分に、道化役者の一團が王舎城へまはつて來て、頻婆娑羅王とその庭臣の前に七日の間芝合や藝當をしたことがある。我がウツガセーナもこの時、仲間のものと一緒にこの藝當を見たが、彼はこの一團の中の綱渡りの舞姫を見て戀に墮ちた。舞姫は非常な美容を持ち、異常な衣著をして賑やかにいろ／＼の藝を演じた。戀に囚はれた若きウツガセーナは、今はすべての理智を犠牲にして、両親の諫めも叱りも用ゐず、直にその少女と結婚した。これからは、彼は、この藝人の仲間となつて、止むなく綱渡りや輕業の藝當を習はねばならぬこととなつた。六十キユピットもあらうと思はるゝ柱や竿の上で、いろ／＼の形で藝を演ずるのである。始めの中は、新しい妻や仲間から

始終、冷笑と罵言を浴せかけられた。然し勉強の功は恐しいもので、彼はやがて、非常に熟達して、いろ／＼の藝當に、驚くべき巧みと敏捷とを見せるやうになつた。ある日太鼓の響が、これからウツガセーナが、六十キユピットの高さの柱の上で、藝を演ずることを知らせた。多數の市民はこの離れ業を見んがために非常な熱心を示して集まつた。丁度その藝當の始まつた時に、弟子達を伴ひて、その傍を廻り給うた世尊はウツガセーナを教化せんがために、目連に命じて神通を以て上に昇り法を説かしめ給うた。目連は命の儘に飛上して、この藝人を道に入れた。ウツガセーナは直に地上に下つて、世尊を禮し、教團の人たらしめを願うた。世尊は猶道を説き進んで、ウツガセーナをして聖果を得せしめ、その妻、及仲間をも道の人たらしめ給うた。

佛陀は今や頻婆娑羅王との約束を果して、三夏を王舎城に送り給うた。茲に於て佛陀は王舎城を出達し、吠舍離に赴き、大林と稱する沙羅樹の森に居を占め給うた。世尊が茲に靜寂の居を樂み居給ふ時に、露比尼河を挾んで住居をする迦維羅の民と拘利の民との間に争が起つた。それは米田に關する争で、いつもはこの小さな露比尼河で一切適當に灌漑するのであるが、早かついたために兩岸の野を濕すことが出來ず、ために水の奪ひ合から争論

が起つて、兩岸から國中へ、野火のやうに擴がつたのである。争論はやがて武器に訴へ、兩軍河を挟んで對陣するにいたつた。

朝早う、佛陀はいつもの如く起床して、靜かにすべての衆生の上を觀察し給ふた。佛陀は直に、御自身の生國とその隣邦との争を知り、あはれや激情に煽られて自ら不幸を招かんとする民衆の上に同情を垂れ給ひ、空を飛んで、ロヒニー河上にいたり、兩軍の中央に立ち給ふた。佛身より流れ出づる光明は先づ兩軍の注意を引き、各々武器を捨て、思はず世尊を敬禮せしめた。佛陀は彼等に語り給うやう。「王子等及び戰士等よ、我が語を聞け、少量の水と、無数の人の命と、殊に王子等の命と、孰れが尊いであらうか。」王子や戰士の命の尊いことはいふまでもありません。佛陀は語を續け給うた。「もし然らば、情を制し、怒に打ち勝ち、武器を捨て、互に相愛し、平和に生きねばならぬではないか。」兩軍とも長い嘆息を洩して、所行を後悔し、教に従はんといふ熱誠を見せた。世尊猶進んで法を説き給うたものであるから、多大の感動を惹き起して、兩軍に於て二百五十人づゝ五百人の人達が其の場所で直に教團の人たらんことを願ひ出でた。

しかし彼等をして入團の決心をなさしめた佛陀の教はいまた充分に彼等の心の中に深く

根を下すに至らなんだ。彼等は直ぐ、家のことや家族のことや、楽しかつた在俗の生活を思ひ出して後悔した。佛陀は彼等の密に思うてゐることを知り給うて語り給ふやう。「汝等は私と一緒に、美しいコンテマール湖の緑の岸に行いて遊ぼうと思はないか。」彼等は喜んで佛陀に従うた。佛陀は彼等を携へ、神通力に依つて空中を飛行して湖水にいたり給うた。彼等は緑の岸へ飛び下れて、周圍の美しい景色に見とれ、どれもこれもすべて名前さへ知らぬので、眼新しい草や木や果物の名を一々世尊に問ひ奉つた。世尊は丁寧に彼等の間に答へ給うた。かうして居る内に、彼等は湖水の鳥の王が、松の枝に止つてゐるのを見た。不意に何處からか同種の五百羽の鳥が顯はれて、すべてみな鳥の王の周圍に集まり、さげびや身振りで、いかにもうれしさうに、鳥王と一緒に居るといふ幸榮を喜ぶやうに見えた。

この光景に打たれて新しき入道者は、この多くの鳥の美しい性質に感じ入り、ひそくと驚嘆の情を語り合つた。人天の師として缺目なき世尊はこの機會を利用して靜かに語り給ふやう。我が「愛する諸弟子達よ、今汝等が驚嘆し稱讚する光景が我等の教團の生ける眞の模範ではないか。」この教訓は非常に効を奏した、彼等はその場で預流の聖果に入つて、再び浮世へ歸らうといふ考を起さぬやうになつた。今は彼等も聖果の人となつたので、銘々

の神通力に依つて、世尊と共に大林の住家へ歸つた。

世尊は、この大林に於て、第五の兩期を過さんと準備し給うた。その兩期の最中、ワゴーング月(八月)に淨飯大王が非常な重病にかゝらせられ、日夜通しに苦しんでゐ給ふといふことが知れて來た。淨飯王は自身の臨終の間近きことを知り、生前に今一度是非我が子世尊に遇ひたいと思召した。世尊は、毎朝憐愍の情を以て衆生の心を觀察し給ふのであるがこの朝も世尊はいつもの通り思惟に入り給うて、父の王の悲痛の状態を知り給ひ、王の病床を見舞はんがために、直に阿難をして、一群のすぐれた比丘等を集めしめ、神通に依つて空中を飛行して、宮殿の庭前に降り給うた。寸時の猶豫もなく、上殿に上り、父王の病床の枕頭に設けられた座席に即き給うた。

佛陀は暫らく沈思し給うた後、黄金の御手を以て、父の王の頭を摩しつゝ、「過去無量世に於て私の得たる福德と、更に菩提樹の下、四十九日の思惟に依つて得たる正覺の神力に依つて、この頭の苦痛の永へに去らんことを」と宣うたが、瞬く間の中にすべての苦痛は皆掻き消すやうになつたのである。佛陀の弟にして、叔母波闍波提の息子たる難陀も亦、父の王の右邊に坐して、右の手をおさへ、「佛陀の御許に於て私の得たる福德に依つて、この父の

王の右の御手の苦痛の去らんことを」と宣うたが、この語に應じて右の御手の痛みは去つた。佛陀の第一の従弟阿難は王の左邊に座して左の手をおさへ、舍利弗は王の背中をさすり、目連は御足をさすり、一樣に自分等の福德に依つて痛みを去らんことを願うたが、王の全身の苦痛は瞬く間に消滅して、安かになり給うた。然し衰弱は猶依然として父の一身を襲うてゐた。

佛陀はこの好機會を捉へて、父の王に靜かに諸行無常の教を説き、猶其他重要な題目に就て時機を得たる法を説き給うた。斯ういふ親切な佛陀の教に依つて、淨飯大王は聖果に入り給うた。佛陀は大王の七日の中に崩御し給うことを宣告し給うた。淨飯大王は今や、我が子の教に依つて、この新しい變化、即ち死に對して充分の準備が出来、最早念頭の問題とならず、涅槃の眞實の相を目前に見て、語り出て給ふやう。「私は今明かに諸法の常住でないことを知つた。私はすべての欲情を解脱した。私は最早生死の網にかゝるやうなことはない。」これらの「眞理の胸」に身を憩はせつゝ、數日を幸福に生き給うた。最後の日、最後の時、大王は佛陀を敬禮して、床の中に座り直し、嘗て犯した身口意三業の罪に就て、從臣達に對して許しを乞ひ給うた。この謙下の謝罪の後、涙に濡れて頭垂れてゐ給ふ王妃、波闍

波提及び他の王家の人々を慰め、且つ幾度も生者必滅、會者定離の眞理を説きすゝめ給うた。而して後、安かに床上に臥し、アニユチャーナ紀元百〇七年のワゴング月の満月の日、日曜日の黎明に靜かに最後の息を引き給うた。九十七歳の高齡で在つた。

父王の崩御後、世尊は、この死の床に集まりて來た諸の比丘等に對して法を説き給うた。「我が愛する比丘等よ、私の父のこの遺骸を見よ、私の父は既に變り果て給うた。死はすべての生あるもの、自性なれば、誰もこの死と争うて勝つことは出來ぬ。勤めて善業を行はねばならぬ。涅槃にいたるべき四聖道にしつかりと従はねばならぬ。」波闍波提を始め、宮女等は、張り裂ける許りの悲みに堪へず、髪を亂し大聲を擧げ、胸を打つて泣きわめいたが、世尊は優しくこれらの人々を慰め給うた。細かに無常の理とその結果を説き、ありとあらゆるものは皆この無常の支配を受けて居るものであるから、身分の分散と共に皆亡びて仕舞はねばならぬといふことを説明し給うた。

この教を畢つて、佛陀は、迦葉に命じて遺骸を荼毘すべき場所を用意せしめ給うた。而して自らは舍利弗と共に香水を以て屍を洗ひ、特別に設けられた壯麗にして丈高き棺輿の中に恭々しく入れ奉つた。セツカラ、スウバワ、井リザラの王子達はこの宮庭の葬儀に列せん

ために來つて、供物を奉進せられた。棺輿は悲しき奏樂に連れて王都の大通を練り進んだ。佛陀は自ら棺輿を受け取つて、柴堆の上に置き給うた。佛陀はこの薪を燃やすといふ譽れありて尊むべき仕事を誰にも命じ給はなんだ。やがて名狀することの出來ない悲泣と嘆息とが起つた。どんな時でも心の平正を失ひ給ふといふことのない佛陀は彼等に法を説き給うた。この場合には佛陀は淨飯大王の稱讚をなし給はず、たい法を演説し給うた。この演説に依つて解脱を得たものは、人天の中に數限りなく多かつた。

波闍波提皇后は、夫の王の崩御後、面の當り、見たり聞たりしたことに就て非常に感動して、浮世を捨て、宗教的生活に入りたといふ志願を持つてゐられた。皇后はこの目的で、世尊の御前に出て、志望の通り尼にして下さいといふことを三度願はれた。然し三度もも斥けられた。佛陀はやがて生國を捨て、吠舍離に歸り、大林中の重中閣講堂に居を占め給うた。

佛陀が、幾度も斥け給うた波闍波提の願を遂に許さねばならぬやうになり給うたは、この大林へ歸り給うてから間のないことであつた。始め、迦維羅、並に拘利の王子等——この前出家をした五百人——の妃等も亦夫の跡を逐うて出家したいと望んで居つたが、妃等は、皇

后の室へ行いて、志を述べて、どうぞ、志望を達する様に助力をして下さいと願うた。波闍波提は、その申出を承知したのみならず、自分もその仲間入りをする決心を示した。波闍波提を始め妃等は、自分達の決心の堅いといふこと、真面目であるといふことを示さんがために何等躊躇ふ所もなく、丈なす緑の黒髪を切り放つて、世棄人に相當な疎末な衣を著け、雄々しくも、嘗て習はぬ徒歩の旅で、吠舍離へと赴かれたのである。

後宮の妃達の習はぬ徒歩の旅のこと、この敬深き巡禮者は、長い旅路にへとへとに疲れられた。

疲勞にやつれ、塵にまみれ、妃等はやう／＼にして大林に到着し、恭しく精舎の門に立ちて阿難尊者に御目にかゝりたい旨を申し入れた。阿難は、親しく妃等に遇うて、この艱難を嘗めた敬虔な旅路の目的をきゝとり、急いで佛陀の御前に出でて、叔母君始め多くの妃達の熱心な稱讃すべき願を許して下さらんことを申し出た。佛陀は靜に聞き終つて、恰も返答を躊躇し給ふかの如く暫らく默然としてお給うたが、暫くして答へ給ふやう。「阿難よ、婦人を教團に入れるといふことは得策ではない。私の教は婦人のために妨げられて幾何も續かぬことゝなるぞよ。」阿難は暫らく世尊のこの御答に迷うたが、やがて波闍波提の功勞

を語り出し、世尊の生れ給うて七日目に御母君の上天遊ばしてからは、この上ない深い注意とやさしさを以て世尊を御育て申したは彼の波闍波提であること、及び、此度の哀願者の善良な性質を熱誠を罩めて物語つたので、世尊もこの忠實な阿難の勸告に動かされて意を決して、妃等が、もし八戒を持ち得て堅く遵奉するならば教團に入ることを許すであらうと阿難に語り給うた。

阿難尊者は、この世尊の御許に躍り上つて、急いで精舎の門を出た。妃等は尊者を待ちあぐんでゐたが、新しい知らせを得て驚喜した波闍波提はみな妃達に代つていふやう。「阿難尊者よ、幾度か願うて許されなんだ仕合せが今許されたときいて妾達の喜びはどんなでしやう。新に沐浴して髪を梳つた若い婦人が氣づかほしげに美しい裝飾を著けたいと望むやうに、贈られた美しい香の高い花束を喜びを以て受けるやうに、妾達は、如來の制定し下される八戒を喜び勇んで受けます。どうか妾達の教團に入ることを許していただきたいものであります。」妃達はすべて生涯の間、教團の戒律を嚴守するといふ約束をした。その中には耶輸陀羅妃も、チャナパダ・カルヤーニもあつた。妃達は皆前世の福德に依つて、續いて聖果を得た。

これらの新しい比丘尼の中に一人、忘れられぬ夫の面影をなつかしんで思ひに耽り、且つ自己の美貌にはこるものがあつた。彼の女の心の中にひそむ恐ろしい隠れた敵を見通し給うた佛陀は、その女の心を醫さんがために次のことをなし給うた。

ある日例の虚榮に富んだはかない思ひに生きる女が世尊の御前に出た。その時世尊は、神通の御力で、この上ない何處一つ難の打ちどころのない美人を作り給うた。前の女に比ぶれば黒い鳥に雪白の鶴の鳥ほどの相違のある美人である。女は、不意に眼の前に顯はれた美しい競争者を妬げに眺めた。すると世尊は不意に自分の造り出し給うた美人を非常な年寄の女になし給うた。顔には皺が波立つて居る。腰は曲つて居る。その他病氣の中でも一番厭な病氣が人間の肉體を襲うた時に顯はるゝ種々の厭な變化が顯はれてゐる。この變化は若い女にとつては青天の霹靂である。女は身振してこの光景に驚き恐れた。佛陀はこの女の息詰まつて喘き居る有様をみて語り給うた。「見よ、我が娘よ、御前が自慢してゐる美容のやがて必ず避けることの出来ない變化の先き觸れをみよ。」佛陀がこの語をいひ終り給はぬ中に、女は直に虚榮の心を根絶した。

佛陀は吠舍離をすて、摩拘羅山に赴いて第六の雨期を過し給うた。この間に、多くの人民が道に入つて救濟せられた。この雨期を終つて、佛陀は王舍城に赴き竹林精舎に止まり給うた。

自分の階級と青春と美貌とに誇つて居られた頻婆娑羅王の第一の皇后クヘーマ夫人が道に入られたのはこの時であつた。始め皇后は何故ともなく佛陀を拜して、その教に耳傾けることを好んでゐられなんだ。ある日皇后は竹林精舎の附近にある花園に歩を枉げられたが、夫の王の勧めに依つて、その序でに厭々ながら、佛陀の御前に出られた。佛陀は時機の熟したるを見て、前に釋種の女を教化せられたと同じい方法で、皇后の恐かしい虚榮心に精神的療法を加へられた。佛陀は皇后の眼の前に天女のやうな美しい女を顯はして、それを次第くゝに老衰、病氣、死の順序に變化し給うた。皇后の心は次第に耕されて來た。佛陀は人間の肉體につき纏うて離れないろくゝの禍惡を長々と説明し給うた。皇后はこの教化に心から動かされて、やがて預流果の人となられたのである。今や皇后は世俗の交を絶つ思ひに急にして、強いて懇願して夫の許可を得て、教團の人となり、沙門果を得、教團の女性のうち、右邊の弟子と定められるやうになられた。斯ういふ華々しい變化は元より皇后の前生の善業に依るのである。

ある日、王舎城の一長者が、恒河の岸に遊んだ。この人は佛陀の弟子でもなく、又外道の弟子でもない。熟らへつかずの教を奉じて居つた。然し彼は、熟らなり自分にとつて最善最強の證明の上に成り立つものなら信じたいといふ要求はあつた。丁度この度折善くも佛教の優勝を信ずる機會が來た。彼は恒河の流れに浮ぶ栴檀香木を見て、拾ひ上げて美しい鉢を作らせた。出來上つて、彼はその鉢上に、「空を飛ぶことの出來る人は自由に取り給へ」と記して、竿を長く續いで、六十キユピット計りにして、その上にこの鉢をかゝげた。近傍に住む外道達は交る／＼鉢を下して施與して呉れと願うたが、長者は、空を飛ぶことの出來る人の勝手に任すとのみ答へた。それで外道等はいろ／＼詐術をめぐらした。中にかういふことがある。この外道達の首領が、詐つて空を飛ぶ仕度をする真似をして、手を延して片足を擧げて飛翔の要領をすると、弟子達が急にこれを止めて、「こんなつまらぬことにあなたがお自分御手を御下しになる必要はありません」といつた。然し長者はこんな愚かな詐術にかゝらない、飽くまで前説を固張した。そして六日の間外道達の懇願を斥けた。七日間に目連が乞行のために丁度その場所を通り過ぎられたが、目連はその場所の出來事の一具始終をき、且つ空を飛んでこの鉢を取り得る人には、長者の家族のものが皆弟子となる

であらうと語られたので、目連は佛陀の光榮のために自ら空を飛んでその鉢をとらんとしたが、同伴者がこれを止めて、「こんな容易なことはあなたには及びません、徳の少ないものでも雜作もなく出來ることではありません」といつた。目連は承知をした。それで、同伴者は第四禪に入つて、片足の指間に廣さ四分の三由旬もある大石をはさんで空中に上つた。彼と傍觀者との間が大石にさへざられて黒闇になつた。人々はもしや大石が頭の上に墮つて來はせまいかといふ恐れに半死の人のやうに眞青になつた。同伴者はその大石を二つに割つて、その間からすがたをみせた。一日中斯ういふ大神通を示して、大石をもとの處へ戻した、長者はかゝる不思議の力に大満足を表して、彼を下らしめた。精良の米を一杯満した栴檀香木の鉢は下されて神通者に與へられた。比丘はそれを受けとつて、精舎に歸つた。この神通の行はれた場所から遠方の人達は噂をきいて、急いで集ひ來つて他の不思議を見たといふその比丘の後を逐うた。

群集が、精舎に近づいた時、佛陀はこの騷擾をきいて、何事かと尋ね、事の一具始終をきいて、比丘を呼んで、鉢を取り上げ、すた／＼に碎き給うた。而してこの後斯ういふ神通を示すことを禁じ給うた。

外道は忽ち、この佛陀の禁止の命令を聞いた。彼等は思ふには、この後斯ういふ命令が出たとすると、比丘等のうち誰も私達と技を争はうとするものはなからう。さすれば私達は容易く自分達の優勝れたことを示すことが出来るであらうと、かういふことを思うてゐた。王舎城の王は、この外道共の考へて居る所をきいて、佛陀の御前に出でて、何故にさういふ禁止の命令を出し給うたかと尋ね奉つた。佛陀は神通を禁止したのは弟子に對してしたことで、自分にさうするといふのではないと答へ給うた。これをきいて外道は思うやう。「佛陀が自身神通を示すといふことだが、それでは私達はどうなるであらう。」彼等はこの際如何になすべきかを相談した。佛陀は王に對して、過去の諸佛は皆舎衛城に於て神通を示したのであるが、四ヶ月のうちに自分も舎衛城に於て大神通を顯はすであらうと告げ給うた。外道はその日から一瞬間も眼を放さず佛陀を見守り、日夜佛陀に従ひ歩いた。彼等は廣大なそして屋根のある場處さへあれば、神通を示して佛陀のそれを打ちまかして呉れると豪語した。彼等は又佛陀が白いマンゴー樹のある所に神通を顯はすと仰せられたのをきいてその方面のマンゴー樹を悉く破壊し去つたのである。

タバオンゲ月(二月)の満月の日、世尊は大衆を卒ゐて王舎城を去り給うた。佛陀は行く

く道傳へて、ワチャウ月の上弦の第七日に舎衛城の國に入り給うた。一人の花守は一個の大きなマンゴー樹の實を捧げた。阿難はこれを受けて料理をして世尊に奉つた。これが終つてから、一つの石が阿難に渡されて、兼ての用意ある場所へ植えつける様に命ぜられた。この石の上で世尊は御手を洗ひ給うた。その時不意に五十キュービットもあらうと思はるゝ美しい白椗樹が顯はれた。枝が繁つて居つて花も咲いて居れば實もたわゝに實つてゐる。この樹が又も外道に害せられてはといふので、守護のために、王の命令に依つて一群の兵隊が遣はされた。斯ういふ不思議なあらはれにあつてに取られて外道共は且つは恐れ、且つは恥ぢ、胸中の混亂を隠さんがために四方に逃げた。富蘭那といふその首領は、綱のついた大きな壺を或る家の主人から受けとつて、その綱の一端を船にしばりつけ、他の一端を自分の頭に巻きつけて、初め壺を河中に投げ次に自ら飛び込んだのである。深い場所なのでやがて溺れ死んで、無間と稱せらるゝ最底の地獄へ墮ち入つたのである。

佛陀は空中に、世界の東の端から西の端に達する無限の道を作り給うた。太陽が西へ傾きかけた頃、佛陀は、この三十六由旬の平場を埋めてゐる群衆の前で、今こそ神通を顯はす時であると思召してその空中道へ飛び上つていろくくの神通を顯はし給ふた。佛陀が丁度

天人等が世尊のために建立し奉つた閻を跨がうとなさる時であつた。ガラミーと呼ばれる、女性の弟子、既に不還果を得た人であるが、この人が、世尊の御前へ出て敬禮してかう申し上げた。「ひかり輝き給ふ世尊よ、あなたが斯ういふ神通を示すといふやうな煩はしいことをなさるゝには及ぶまいと存じます。あなたの下婢たる私が致したう御座います」。娘ガラミーよ御前はとういふ神通を示さうと思ふのか、「私は水を以て空間を満し、水鳥の如く、水の中を東の方へ潜り、又西の方へもどります。群衆の前へ私が顯はれますれば、彼等は問ひまじやう。何といふ水鳥だらうと。私は答へます、この水鳥はガラミーです、最尊最勝の世尊の娘たるガラミーであります。斯ういふ神通を私は顯はします。外道は私のこの神通をみて思ひまじやう。ガラミーの示す神通が斯のやうなものとすると、佛陀自身の神通はどんなに偉大でどんなに不思議であらうと。これに對して、佛陀は御答へになつた。「御前が斯のやうな神通を持つといふことは私は知つて居る。然しこの群衆の集まつたのは御前のためではない。」と宣うてその願を拒み給うた。ガラミーは思うやう。「佛陀はこの大神變を現はすことを許し給はぬ。此處には、私よりも大神變を現はすことの出来る人々があるが、佛陀は恐らく私と同じやうに誰にも許し給はぬであらう。」斯う思うてガラミー

は己れの坐に歸つた。

佛陀は自ら思ひ給ふやう。我が弟子の中には大神變を現はすことの出来るものは澤山ある。群衆がその事を知ることは適當のことである。又彼等がいかに、獅子のやうな堅固な精神を以て、最も不思議な神變を行はうとして居るかをみるがよい。佛陀は、「神變をなすことの出来るものは前に出でよ」と聲高く宣うた。多勢の人が、獅子の如く猛然として、雷の様な聲をたて、この不思議の力を顯はす名譽を得んと進み出た。この中に給孤獨といふ長者があつた。チエーラといふ女の子があつた。婦人もあつた。目連も居つた。この人々は皆驚くべき神通を現はして、一は外道を驚き怖れしめ、一は、弟子に斯種の力があれば、佛陀にはいか程の力があるであらうかといふことを知らせんために御用を願うたが、佛陀はこの群衆は彼等のために集つたのでなく、自分のために集まつたのであるから、自ら大神變を示して人々の心を狂喜せしめやうと宣うた。又目連に對して、自分は佛陀であるから自分の義務を他人になすりつけることは出来ないといふことを語り、前生に於て牡牛であつた時、一婆羅門の財寶を救ひ、その心を喜ばしめるがために、泥地の中から、重くはまつて居る車を引き出したことを語り給ふた。

佛陀は十八由旬の廣さで廿四由旬の長さの廣場へ集つて居る群衆の前で、空中へ作つた廣大な道に昇り給ふた。佛陀の今顯はし給はんとする不思議は自身の智慧の結果である。誰も模倣することの出来ないものである。佛陀は身體の上から水流を出し、下部から炎を吐き、右眼より火、左眼より水、鼻口、耳口、左右、前後から各々水火を出し給うた。又火に續いて水を出し、水の後より火を出し、しかも水火少しも亂るゝことがない。上方へ向けた水の流は梵天の座に達し、下方へ向いた水火二流は地獄を貫き、水平の流は世界の果に達した。佛陀の毛髮又各々この不思議を示して群衆の眼を驚かした。佛身の各部から六種の光明送り出で、名狀すべからざる美しさを示した。語を交すものがないので、佛陀は特に一人の人間を作り出し、空中道を一緒に歩るき、時としては佛陀は坐し、一人はこれに向ひ、或る時は佛陀は歩し一人は立つたり坐つたりする。始終佛陀は問題を呈供して、彼は直にこれに答へ、又彼の問の對して佛陀はこれに答へ給うた。間を措いて佛陀は群衆に説法し給ひ、群衆は大に喜び、彼の化人は讚歌を奉つた。かうして居る中に佛陀は群衆の心の上に起つた善良なる性質をみて取り種々の法を説き給ひ、人々はその説法をきゝ、神通をみ、四諦の理を了解した。

佛陀は群衆に對して二種の説法をなしたり、又非常な神通を顯はして人々の尊敬と賞讃を起し、自ら過去の諸佛は、大神通を顯はしたりて、いかなる場所に雨期を過し給ふたかを考へ給うた。佛陀は並びなき心眼力を押しすゝめ、過去の諸佛が一樣に忉利天に雨期を過し、各々の母后に説法し給ふたことをお知りになり、佛陀自身もその天界へ赴かうと決し、十六萬由旬の大距離を一飛び越えて、片足は持雙山ユカンドハラの頂に載せ、片足は須彌山スミラの頂に載せ給うた。これは佛陀の方では何も勞し給はぬので、これらの山が佛陀の御立ちなされる場所にその頂を低め、再びその高き位置に還らんと起ち上つたのであつた。佛陀は即時に忉利天に達し、バンドウカムバラといふ無限大の岩に位置を占め給ふた。佛陀が外衣をその岩の上に擴げ給うと、突然、大きな岩は佛陀の外衣の狭い中へ封じ込められて仕舞うた。

(一)佛陀の説法は人界といふ狭い領域に限られてゐるのではない。もつともつと廣く遠く達するので、六欲天の天人も、人類と同じくこの勝法開説の幸恵を分有してゐるのである。六欲天といふは前生の善業に依つて得た福徳の生であることは前に記した通りであるが、これら天界の幸福なる有情は、その善業の功徳が盡きて仕舞ふまで、その界に留まり、その後、人界に下る。人界はあらゆる有情の試煉の地である。それであるから天界も常住の處ではなく、徳業盡くれば地上に輪廻し、新しい生を初めて徳を實行して聖果を得るにつとめるのである。天人は涅槃から

ずつと離れてゐて、人間の様に勝法を學び、四聖果に達する道を得ればならぬのである。あらゆる有情に救濟の法を宣傳するために顯はれ給うた佛陀は自由に天界に行くことを得給ふ許りではなく、永遠の生の渦から免かれうる様に彼等を教へ給ふのである。引きつづいて三ヶ月間の佛陀の説法は、初め御考へなされたよりもつと大きな成功を齎したのであつた。百萬の天人は道に入つて解脱を得、その下のものは初果二果三果を得た。

他の欲天に滞在し給うた時であつた。佛陀は布施の徳に對して一の決定を與へ給うた。それは黄衣の比丘には確かに有利なものだが、正義と眞理にはどうも少し離れてゐるやうに見えるもので、それは、布施の徳は施者の心持に依るのでない、福田の上下に比例して高低するのだといふのである。これでは人をして積極的に善をなさうといふ最も清淨な最も高貴な動機を減ぼすやうなものであるが、現今佛教僧侶に依つて、この説は教理の上でも實行の上でも其儘に持たれてゐるのである。僧侶が、その歸依者から施を受ける場合には、この物質の供給者に對して禮を曰はうとは考へず、サードフ〜即ちよし〜といつて満足するのである。施者の方でも、この場合になし得た功德を頼みにし、更に徳を得る機会を待ち望んで満足と幸福を感じて引き下るのである。俗人が僧侶に對して布施をするとは信ぜられない程で、僧侶は政府の保護を待たずして、優に必要物を得、贅托な程に供給を得るのである。僧侶は實に土地の膏油で生活してゐるのである。

佛陀を見失うた人々は突然、日と月とが一時に空中から消え失せたやうに、あつけにとられて居つた。彼等は皆叫んだ。「我等は今三界の最勝尊を失ひ奉つた。」或るものは、あそこに行き給うたといひ、他のものは「否、外の處へ行き給うた」といふやうに相争うた。處々方々から集つて來た人々は皆悲しんで居る。彼等は皆目連の處へ行つて、佛陀の何れに行き

給うたかを知らうとした。目連はもとより佛陀の所在を知悉してゐたが、然し何那律に、佛陀の所在を人々に説かしめたいと思つた、阿那律は、佛陀が忉利天に赴いて母のために説法し、バンドウカムバラの岩に雨期を還し給ふことを知らしめた。阿那律は猶これに加へて、これより三ヶ月の後、シヤデン・キオート月(十月)の満月の日に世尊が此の人界に歸り給ふことを物語つた。彼等は皆自然と、再び佛陀を見奉るまでは、その處に留まり、家に歸らなると決心した。彼等は一時、間に合せの小屋を作り、狭いけれども、種々の方法を案出して日を過した。これより先佛陀は天界に赴き給ふ時、目連をして人々と共に止りて彼等のために説法するやうに命じ給うたのである。目連は、命に従うて、三ヶ月の間、人々を教へ導きいろ／＼な彼等の間に答へたのである。給孤獨長者はその間比丘及び諸々の人々を豊かに供養したのである。

Tatkasya hetos Tathāgata iti Subhūte. Bhūtatahatāyā etadadhivacanam.

Tathāgata iti Subhūte. Anutpādakādharmatāyā etadadhivacnam.

Tathāgata iti Subhūte. Dharmacchedasyaitadadhivacanam.

Tathāgata iti Subhūte. Atyantānutpanusyaitadadhivacanam.

須菩提よ、其故は、如來とは眞如實性の義なり。須菩提よ、如來とは無生法性の義なり。須菩提よ、如來とは法斷の義なり。須菩提よ、如來とは畢竟不生の義なればなり。

『梵文金剛經』

第十章

- (一) 忉利天上の説法
- (二) 天上より人界へ降下
- (三) 舍衛城の異教師等の譏誚
- (四) テーサカラの森に於て第八の安居
- (五) 安居後の説法

- (六) 憍賞彌の逆遇
- (七) 弟子の不和
- (八) 和解
- (九) 佛陀の巡錫
- (一〇) 野に耕す婆羅門への訓誨

佛陀が忉利天に於給ふ間に、諸天は數千萬の世界から雲の如く佛の御許に集まつて來た。その諸天の身から放つ光明は、佛陀の御光のために掻き消されてみえないのもあり、又大變にうすくされたものもある。佛陀の御母君、今天女にて在す母君は、自身の生みの御子に遇ひ其教を聞かんが爲めに忉利天から來て、佛の右邊に坐し給うた。二人の天はその母君の右と左に侍立してゐる。天の群衆は十八由旬の廣さを覆ふ程の大群衆であつた。この無数の群衆の中で、二人の天人は特別その勝れた行爲と高い位置とに依つて餘の天人より際立つて違つてみえた。その中の一人は、佛陀に接近して殆んどその御腰に觸れる程に近く侍立してゐた。他の一人は遙か離れて嚴かに立つてゐた。佛陀は後者の天人に向ひ、「卿は前

生にいかなる行業を積んで、その位置を得たのであるか」と尋ね給うた。その天人は「私は前生に非常な大布施を常に行うたのでありますが、清淨にして勝れた人々に善事をなさなかつたために、功德が比較的尠ないのであります」と答へ奉つた。佛陀は更に他の一人に同じいことを問ひ給うた。其天人は「前生非常に貧しい生活をしましたが、幸に分相當に、徳の高い人々に布施を行ふことが出来ました」と答へた。佛陀は大群衆のすべてに一様に聞え渡る大音聲を以て、比丘及び聖果を得たる人々に布施をすることの大利益を説き給うた。佛陀は宣ふやう。「それらの布施は丁度善い畑に下された善い種子が、善い果を結ぶと同じ道理である。欲情の横暴な枷の下にある人達に施す布施は宛も悪い畑に蒔かれた種子のやうなものである。布施を受ける當人の有する欲情が布施の徳の大きくならうとするのを妨げるのである。」この説法の終りに二人の天人は豫流果を得た。地上の群衆も亦その説法を聽問する利益を得た。

佛陀はその諸天の中に給ふ間に、母君の爲に、對法即ち論藏を御説きなされた。食事を御取りなされる時には、他の佛陀のすがたを作つて、それに對法を續けて説くべきやうに委任し、自らは、ヒマワンタ山に行つて、美味な或る種の果實を喰べ、阿耨達池の水にて顔を洗

ひ、北の島から受けた食物を分けて召し上り給うた。舍利弗は佛陀に御給事を申し上げるためにその場所へ行つた。やがて、佛陀は食事を終つて、舍利弗を呼び、行いて五百の比丘等に對法を説くやうにと命じ給うた。この五百の比丘といふは、佛陀が神變を現じ給うた時會坐にあつて大歡喜をした人である。これ等の五百の比丘は迦葉佛の世に蝙蝠であつたが、仕合せなことには、比丘の住むをしてゐた洞窟の中に住んでゐたので、その比丘が常に對法を繰り返して誦するをき、蝙蝠等はいつとはなしに意味のわからないまゝに、その言葉を暗誦する様にとめた。さうして、この對法を誦した功德に依つて、蝙蝠等は死んで、天上界に生れ、更にその天界から下つて、人間に生を受け、舍衛城の名高い人々の子として生れたのである。今、佛陀が神通を示し給ふに當つて、彼等はこの神變を見て非常に歡喜し歡喜の心を押へることが出来ないで遂に舍利弗に従つて比丘となつたのである。佛陀のお説きなされた對法の崇高なる法理を完全に了解し得た最初のもはこの人達であつたのである。

佛陀はやがて再び忉利天にもどり、續て法を演じ給うた。この時、佛陀の作り給うた代理の佛のすがたは消え失せた。この説法は三月の間續いた。無数の天人は佛陀のお説きな

れた四大理を知了した。母君は豫流果を得給うた。今や、佛陀が人間界へ下り給ふべき時は間近になつた。地上の群衆は佛陀の歸り給ふ時をはつきりと知りたいといふので目連の處へ行つて、その時を確めやうとした。目連はこの請を容れ、「直きに御前方の望みを満足させてやる」と答へて、先づ地の底へもぐり、再び地上に顯はれ、須彌山の麓、人々の眼の前に於て、空中に上り、姿を没し、忽ち佛陀の御前に顯はれ出て、使の趣きを言上した。佛陀は答へ給うやう。「我が佛子よ、御前の兄弟の舍利弗は何の國で雨期を過したか」、「僧伽舍の市に於て安居に入りました。」「よしそれなら、これから七日目即ち、シヤデン・キオート月（九月）の満月の日に、私は僧伽舍の市門の近くへ下るであらう。この旨を地上の人民に語つて呉れよ。佛に見えやうと思ふものは、舍衛城から三十由旬も離れたその國へ行かねばならぬ。然し私を迎へるために、人民に何等の準備もさせてはならぬ。たゞ禁戒を護持して、私の説かうとする法を聴くやうにさせて置くがよい。」目連は佛陀を敬拜して座を去り、待ちわびて居る群衆の間に下つて、佛陀に御目にかゝつた一具始終を物語り、佛陀のやがて人間の望みの通り地上に歸り給ふことを告げ知らせた。

シヤデン・キオート月（十月）の満月の日、佛陀は人界に下らうと覺召し、帝釋天を呼び寄

せ、下降に關する一切の準備を命じ給うた。帝釋天は佛命をかしこんで先づ三種の階梯を用意した。一は高價な寶石から出來て居るもので真中にあり、その右に黄金の階梯があり、左に白銀の階梯が掛つてある。その階梯は、高き須彌山の頂上から、僧伽舍の市門に近き地上にまでかゝつてゐるのである。真中の階梯は佛陀の用ひ給ふもので、右は欲天、左は梵天の用ゆるものである。佛陀は階梯の頂邊まで歩を運んで暫らく立ち止まり、茲で再び神變を示さうと思ひ給うた。佛陀は上を眺めては、梵天の座まで明かに見透し給ひ、下を眺めては地の底を透して無間地獄までも眺め給うた。この佛陀の照見の中で、一千世界の諸天は互に顔と顔と見合せ、人間は幸福な世界に住む諸天を見出し、諸天は浮世の家に住む人間をみたのである。佛陀の御身からは六種の光明が並ふものゝない輝きを以て流れ出た。群衆はすべてこの光明をみた。誰も乎も佛陀を讚美せずには居られなうた。右に欲天、左に梵天を伴ひて、最尊最勝の佛陀は徐々として、その凱旋の降下を始め給うた。佛陀の前には一人の天人が立琴を手にして微妙な諧調を奏で、先導し奉り、猶他の一人の天使は扇を以て世尊をあふぎ奉り、梵天主は世尊の後ろに従つて、黄金の傘をかざし奉つてゐる。すべて斯ういふ華々しい行列に取りまかれて、佛陀は僧伽舍の市門近くに下りて暫らく立ち止まり給

うた。舍利弗は佛陀の前に進み出で、程善い距離を持つて敬禮し、喜悅の溢る、心から左の様に申し上げた。「最尊最勝に在す世尊、今日、あらゆる人天は世尊に對して各々敬愛を示してゐます。」佛陀は答へ給うた。「善い哉舍利弗、私のための故に心の歡喜に躍るものはずべて幸の人である。人天は、最勝の法に達し、欲情を滅ぼし、思惟の最高の状態にいたつたものを敬愛する。」佛陀の教の終つた時には數限りもない人天は四聖諦を體得し、舍利弗が教導するやうに委任された五百の比丘は阿羅漢果を證得した。昔から、あらゆる諸佛方が、切利天から下降^{くだ}られて、降り立ち給ふ所には、いつも塔が立てられた。

(一)緬甸の各地に散在する宗教上の建物は特に注意を要するものである。これらの建物は緬甸の佛教聖典には制多と呼ばれてゐるが、人民は普通にバヤ、或はプフラと呼んで居る。最もこの場合のバヤ、プフラはたゞ宗教的崇敬の名稱に過ぎないのである。

佛教の一番最初の制多は、佛陀の御遺骨の奉安せられてある聖籠の上に立てられた聖墳であつた。これらの塔はその中に神聖な高貴な遺骨の在しますことを示し、信者の胸に佛陀の記憶を起させ、宗教に對する美しい信仰と追々燃え出して來る熱心とを養ふつもりで建てられた尊い建物であつた。

この佛傳を読む時には、制多が佛のみならず、教團の中で智徳の兩道に於て一生他の人達に超え勝れた個人の墳墓の上にも建てられたことを知るであらう。佛陀は自らその二大弟子舍利弗と目連の遺骨の上に制多を建立する様に命じ給うた。緬甸に於ては、大型の塔で、比丘の遺骨の上に建てられたものはない。ある地方では、特に北部の方で

は、五六呎の小さな制多が三四の聖者の遺骨の上に建てられてゐる。これらの制多は時折花や蠟燭が、その前及び周圍に立てられてゐるが、人民には余り注意せられない。

同じい種類の宗教的の建物が、時として三藏即ち聖典の全集を集めるために建てられることがある。錫蘭の一番奇麗な寺の一つは、この目的の建物である。アワ(Ava)の古市にも一つあつた。然しアマラプーラ(Amarapura)に、この種類のものがあるかどうかは私は知らない。

仕舞には、制多は荷答摩の佛像を安置する丈けの目的で建てられるやうになつた。然しこれは餘程後代のことであると信すべき理由がある。熱心な佛教徒が、その敬虔な信仰から湧き起る食るが如き渴望を満さんと欲して、宗教的建築を起さんとしても、舍利を得ることが出来ない場合に、佛陀の一生中特に目立つた行爲を想起せしむるやうな具合に古の佛像を作つてその欠陥を満したのである。多くの場合、制多は佛像を安置するためではなく、人々をして佛陀の御舍利を想起せしむる敬虔な目的で、彼等のいひ慣れた語を用えていへば、佛陀の人格及びその教法に對する崇敬の優しい情緒を燃やすために建てられるのである。制多建立の理由について今説明したことが實際であり又眞實であるとするれば、結論として、イツラワツテ河の流域の住民は最も獻身的に宗教的であると曰はればならぬ。何故なら、この地方の住民の制多建立の狂熱は、フハモの邊まで七百哩以上の廣衰を包んで、殆んど信ぜられない程の驚くべき多數の制多を建立せしむるに至り、今も猶つゞいてその通りであるからである。

佛教は印度からして東部亞細亞に輸入せられたものであるから、この宗教的建築物の建築様式も同一の地方から入り來つたものに相違ない。私共はこれらの大寺院の裝飾的な部分とか又塔などの外部の裝飾のこまかくしい所やなどは無論緬甸土着の工人の手になつたものと信するが、然しこの國の或る地方に見らるゝやうな建造物を最初計畫して建立するといふ如きことはこのイツラワツテ河の流域の種族のよくなし得る處でないやうに思ふ。この様に

いた處で、恐らく誰も非難をする人はいない。彼等の有する不完全な智識と、その下手な取扱方とで、かういふ偉大な建築を起しうるとは信ぜられぬからである。現今印度のある地方及び瓜哇に見うける今では大變に磨練してゐるが兎に角昔を思はせる佛教の記念塔と現今イッタワツテ河の兩岸にうぢや／＼する程建つてゐる記念塔との類似は、かういふ記念塔の形状様式の原形に關して疑を入れる餘地を無くするのである。

緬甸を旅行する人は、一見して、制多の形状及び建築法には大變な差別があると思ひ込むのであるが、これは未熟練な土着人が、この宗教的記念物に施してゐる澤山の奇形な裝飾に迷はされるので、仔細に點檢すれば、これらの紀念物は大凡三種の様式に統括され、その中に於て小異があるのであるといふことが知れるのである。

第一類は底部の著しく擴がつてゐる圓錐形のもので、これには壁龕がなく、偶々小さなものがあつてもそれはその塔の主要的な附屬物でなく、信者の異様を好む没趣味から附けるべからざる處へ附けたもので、ないのが當り前なのである。**ラングーン、ペーグ、アローメ**の塔はこの様式の最もよらしい代表的なものである。

第二類は、圓頂形のもので、緬甸には餘り數がなく、その中最も美しい、一番偉いものは**ツアガイン**の古都の西に位する**カオン・ムー・ドウ**(大なる功績ある仕事の意)のそれである。

第三類は寺院風に近い構造を有するすべての塔を含むので、心持矩形をなし、中央に大きな室があつて、幾本かの廊下が貫いてゐるのである。この矩形の上に、圓錐形の建物が立つてゐて一番頂きに傘が載せてあるのである。この様式の塔の中で最も注意すべき完全な代表作は**バゴタ**(塔)の市とも曰はるべき**バガン**にいくつがあるものである。

圓錐形様式の塔は一樣に高さ數呎の四角の礎臺を有し、圓錐形の塔身は下部が六角か八角で初め廣く、漸々と規則定しく高さの三分の二位の處までせばまつて、その上に正しい圓錐形のものに乗つて一番頂きに鍍金の傘を乗せてあるのである。

この種の建物の建築的裝飾は圓い大膽な曲線を使つた所謂剝形を用ひ、この上に圓錐形の乗せてある所に、中央から周圍に放出して一半は上に向き一半は下に向いてゐる葉の彫刻がある。然し**ショウアダゴン**のやうにこの種の彫刻を欠いて居るものもある。圓錐形の表面には圓狀の水平線を引き、間を置いて幾つも引いてある。その上に又前の葉とは違ふが同じいやうに彫つた葉の彫刻がある。礎臺の四面の中央部、殊に東面には壁龕を作り、跏趺の佛像を安置する慣はしにしてある。その壁龕に通ずる支闌様のものも彫り込んである。礎臺の四角には羽翼のある獅子像(**グリツヒン**)を置き、時としては奇妙な怪物の像を置く。下部の六角形又は八角形の處には、屢々小さな塔が配置してある。この種類の塔は元來裝飾がなく、塚の上に建てた柱狀形のもの、漸次に變形したので、非常に古い様式のものである。恐らく最初期佛教の記念塔と時代を同じうするものであらう。

第二類の塔は圓頂形のもので、緬甸には餘り多くないものである。これは方形の礎臺の上に立ち、下部には五六の剝形の裝飾があるが、大部分は完全な平滑面を呈してゐる。その頂に載せてある傘蓋は幾分その塔の外観に影響するものであるが、著しく水平に開いて、非常に無骨な外観をなしてゐる。**ツアガイン**近くの**カオン・ムー・ドウ**塔は礎臺が高さ十八乃至二十呎あつて、その上の圓頂塔は高さ百五十三呎、直径が最下部に於て約二百呎ある様に記載されてゐる。全部が鍍金されてゐる。方形の礎臺の四面には壁龕が彫られてあり、釋尊の小像が安置してある。その方形の礎臺の周圍に屋蓋のない全部鋪石の外廊があつて、高さ六呎位の小石柱が八百二本、すなりと並んでゐる。各石柱の上部には穿孔があつて、祭禮の時に油燈を受けるやうになつてゐる。暗夜この四面の各石柱から光明の潮を漲らしてこの莊重なる大塔を輝かし出す時にはすばらしく華麗なものであらう。

この塔は、看守人の一人が私に曰つた様に約三百年前のものか、或はその時分には修繕と莊飾を施されたので、造立は非常に古く、上述の第一類の塔より遅いことはないといふのが正しいが一寸解らない。然し後説の方がよろし

い様に思はれる。この様式の他の塔としては東門から程遠からぬ**ブハモ**に現存してゐる。

第三類の塔は一般に方形にて、第一類第二類の塔の様に堅密な石造衛に依つて作られたものであり、戸口を有し、室、廊下等を有し、釋尊の佛像を安置する爲めのものである。これらの塔は必ず上に普通の圓錐形の構造物を載せてゐるので、圓錐形の部分はすべての塔の主要な附屬物である様に見える。私の考に依れば、この建築は墳塔、廟所といふやうなものでなく、むしろ禮拜所、釋尊の佛像を安置する聖殿といふべきものである。この紀念塔は比較的近代のもので、原始佛教の崇拜の單純な様式と調和する塔廟の簡素と單純を失ひ、制多固有の目的に添ふ様には出来てゐない、これらのものは佛教の崇拜が原始的摸索式を出でて、宗教的大團體の好尚と要求とに調和する釣合をとり發展を遂ぐるに至つて建設せられたものであらう。この類の寺院は形狀面積及び建築の細部に至ると大變相互に異なつてゐるが、あらまし次の様にその略圖をとることが出来る。方形の殿堂に四方に支關があつて、東西の支關が一番大きく裝飾も一番見事になされてゐる。中には東丈け支關があつて、三方の眞中に戸口がある丈けのものもある。この四つの支關から各々廊下があつて、佛像の安置してある所に至つて居る。バガンの壯麗なる塔にはその塔の周圍に尖形の圓天井のある廊下がある。これらのすばらしい建築には二層になつてゐるものもあつて、塔には附きもの、圓錐形の部分は第二層の上に乗せてあるのである。中形の塔の或るものに圓錐塔の代りに形象文字に似た飾のある方尖塔を乗せたものもあつた。この方尖塔はその高さの中程の處まで著しく太つてゐる。私は同所で、半ば荒廢した無數の塔の中に、その廣張で驚きもせず、荒廢した状態に驚いたのでもなく、たつた一つ**ピラミッド**の正しい形をしたものを見つけて大變に驚いたことがある。

佛陀は、**僧伽舍市**を離れて吠舍離に道を取り、祇園精舍に歸り給うた。佛陀の行ひ給うた

神通は佛陀の名聲を増し、人民をして益、尊敬の意志を表せしめた。施物は四方から精舍に集つた。佛陀に對する人民及び弟子達の歸投心、従つて何物をも惜氣もなく投げ出す心持は、驚くべき有様に擴がつて行つた。吠舍離及びその附近に集うてゐる外道共は佛陀の成功に對して嫉妬に堪へなう。殊に今まで人民の施物を受けて生活して來た彼等がその生活の資糧を奪はるゝに至つては、益々彼等の内心の不滿の火に薪を加ふることとなつた。彼等はいかにもして、人民の間から佛陀の名聲を取り去らうと惡策をたくらんだ。ある美しい女、性質は無論さういふ方でないが、その女が彼等の旨を含んで、佛陀に姦せられたといひ觸らした。その女は先づ妊娠した模様を見せやうとして、赤い布切を身に巻きつけ市中へ出掛けて、佛陀の惡聲を放つた。女は又鐵面皮にも、祇園精舍へ出掛け、公衆の面前で世尊に對して、妊ませた子供の産期が近づいたから産屋の用意をして呉れといふこと、自分と自分の子供を養うて貰ひたいといふことを申し上げることすらしたのである。然しこんな無謀な讒誣は少しも世尊を動かすに足りない。世尊は依然として平常の沈着な清らかな有様でゐらせられた。帝釋天は自ら計うてその奸策を發いた。二匹の鼠が何處ともなく顯はれ來つて女の腹を縛つた帶を噛み切つた。巧らみは暴露れて、ふくらませた中のもの

は落ちた。聖者の神聖は保證されて敵は混亂に打たれた。

この場所に合わせた誰も彼もみなこの惡刺な外道の忤計に對して義忿を洩した。然し佛陀は靜かにこの事がむくいであること、前世の惡業の結果であることを語り給うた。過去生に於て、佛陀は酒醉漢であつた。ある日途中で辟支佛に遇はれたが、何等の理由もなく怒る謂れもなく、只酒の勢に馳られて辟支佛を罵つた。最下等な野卑な身振りをして、惡罵の結果、辟支佛の一生は僞善の連續に過ぎぬとまでいつた。このことを佛陀は語り給うて、改めて弟子達に向ひ嚴な容子をして、汝等が目撃した只今の譏誣は、前生の惡業から來た惡徳に依つて加へられた刑罰であるといふことを附け加へて語り給うた。

第八の雨期はテーサカラの森に過し給うた。雨期が終つてから、國々を遍歴して、人々に聖道を説教し給うた。四果の一つを得るもの多く、一時に解脱を得るものも多かつた。

サントー・マラギリの町に、佛陀は自分と自分の弟子を給養して呉れた施主に對して法を説き給へつゝあつた。その聽衆の中にナクラビタとナクラマターといふ二人があつた。婆羅門種に屬するもので夫と妻である。彼等は過去幾生の間、幸にも佛陀の父、母となり、叔父、叔母となり、さういふ親しい關係を持つて來たのであつた。それで今生もその關係の深

かつた佛陀に對して愛慕の感情が非常に強く彼等兩人の間に起つた。この自然の親愛な心持から彼等は進んで佛陀の御前に出で世尊の前に平伏して申し上げた。「可愛い子よ、御前が私達の手を離れてから、どんなに長い時間が経つたであらう。私達は久しぶりに今御前を見て何ともいへぬうれしさを覺える。」佛陀はこの様子を見てこの語を聞き給うても平然として在し、この心善い夫婦の眞に欲する所が何か、過去の幾生の間、彼等から受けた大きな恩惠を、どうして何に依りて知り得たかを知り給うて、最勝の法を説ききかせ給うた。夫婦のものは直に道の人となつた。翌朝彼等は佛陀と佛陀の御弟子達を招待して最善の食をすゝめ奉る幸福を得た。暫くして彼等は世尊に對して次の要求をした。「私共は幾生の間も幸に結び付いて來ました。私共の間には一言の不平も争も起らずに仕舞ひました。どうかこの後の生にも私共が同じい愛情に依つて續かれるといふことを望ましく存じます。」彼等の要求は情深い語で許された。佛陀は群衆の前で、彼等が男と女の間仕合物であることを宣言し給うた。

これらの事柄のあつた國の太子には子供がなかつたので非常な心配となつてゐた。太子は自分の宮に世尊を御招待申して許された。世尊を接待申すために大準備が施された。王

子は世尊の踏み給ふ道へ自分の衣服を布いて、世尊から踏んで頂いて、この功德で、自分の最大の熱望のぞみを満して貰ひたいと思うた。世尊は宮殿の入口まで来て立ち停まり阿難に命じて衣を取り除けしめ給うた。太子は非常に失望した。食事の後に、世尊は、太子夫婦が前生に卵を食料とし多くの鳥を殺した罪で子のないこと、然し今生の善行は過去の罪惡をつくなふに充分であるから、やがて子供を恵まるゝであらうと教へ給うた。太子夫婦はこの教を聞いて非常に喜んで、佛陀を信じ、豫流の聖果を得た。彼等が佛語を信じた結果はこの様に幸福であつた。

雨期を過して後は、佛陀は始終大道宣傳のために國々を遍歴して人天を教化し給ひつゝ、あつた。ガルリトといふ國のマガリアと呼はるゝ婆羅門の村に一番の長者で村長を勤めて居るものがあつたが、彼は一人の娘をもつてゐた。その娘は非常な美貌を有し、天津乙女かとも思はれる位であつたので、王子、貴族、婆羅門から續々結婚の申込みがあつたが、美貌に誇る娘は悉く斥けて容易に承知をしなかつた。或る日娘の父はゆくりなく世尊に御遇ひ申して、世尊の男々しい容貌と典雅な舉止ものこしとに打たれて、「この人ならば私の娘の驛むすめとしても耻かしくない」と思つて、歸つて妻に話をした。翌日、彼等は娘に一番立派な衣服を著せ、一

番念入りに御化粧をさせて、三人連れて祇園精舎に参り、許されて世尊の御前に出て、娘を御給事にさし上げたいが御許を願ひたい」と申し上げた。一言の返答をもせず、よいとも悪いともいはず、世尊は床の上へ一つの足跡を残した儘、立ち上つて、他の遠からぬ處へ避け給うた。こゝにいふ不思議なしを説明するに巧みな村長の妻は、この御足の跡を見て、この方は欲情を制服し、姪火の支配を受けぬ方であると解いて、自分の意見を夫に語つた。然し夫は猶、世尊の御前にいたつて前の願を繰り返した。世尊は靜かに答へ給うやう。「婆羅門よ、私は御前の要求を入れもしないし、斥けもしない。まあ私のいふことをきけよ。」世尊は進んで、御自分の世を棄て家を捨て給うたことから、惡魔の誘惑を斥け、六年の間獨りぼつち苦行を積んで、今は欲情の網を脱し、佛陀のさとりをひらき、永へにすべての欲情を征服したことを説いて結び止めとなし給うた。この説法をきいて父母兩人は豫流の聖果を得たが、娘は折角の自分の望みを無下に斥けられて、世尊に對して怒と怨との情を抱くに至つた。両親は娘を連れて喬賞彌へ行いて國王に娘を捧げた。國王は女の美貌に迷はされて、直ぐに第一の皇后の位に列ねた。

喬賞彌の國には三人の長者があつて、雨期の間はいつも五百人の隱者に施食をして居つ

た。この隠者達は、その季節になるとヒマラヤの連峯から扶養を得んがためにこの里へ下つて來るのである。三人の慈愛の深い長者はある時商買のために吠舍離へ赴いた。其處で彼等は世尊に謁し、世尊に一度喬賞彌に歩を曲げて教を垂れ給はんことを願うた。この願は許された。彼等は家に歸つて世尊を御待請けするために、三人が銘々一寺院を建立した。すべて準備の整うた時に、世尊は五百の弟子を卒へて喬賞彌へ赴むき給うた。そして茲に第九の雨期を過し給うた。この土地に滞在中、世尊は三寺院に代る／＼住んで其處に長者の銘々から懇ろなる歡待を受け給うた。

喬賞彌に於てはその當時佛陀を信奉するものは尠なく、外道は非常に多かつた。この外道共は陰には例の第一皇后の煽動を受け、又自分達としても新來者に對する嫉妬の情かち、いろ／＼の方法を運らして世尊及世尊の御弟子を迫害した。そしてだん／＼と廣く高く上つて來る世尊の名聲を破壊するために全力を盡した。彼等は御弟子方に遇ふときには何時でも、粗野な限りを盡した言語を以て罵詈した。餘り彼等の罵詈が甚しいので、阿難は餘の御弟子方を代表して世尊の御前に出で、外に適當な歡待を受ける處も澤山あることであるから、どうぞ餘處へ移つて頂きたいと願ひ出でた。世尊はその時宣ふには、「もし別な變つた

處へ行つた處で又ぞろ逆遇されたらどうするか。」「又外の場所へ移ります。」「又其の處で逆待されたらどうするか。」「又他の處へ移り住みます。」「こゝに至つて世尊は默然として語り給はず、暫く阿難を優しく眺め給ひ、やゝあつて又語り給うた。「暫く辛抱せよ、さすれば、そんなに歩きまわらずとも、求むるものは得られるやうになる。賢い人は堪忍と辛抱とで敵を征服するものである。あの戦争に従ふ象をみよ、烈しい戦の最中へ飛び込んで、四方に飛び遠ふ投槍や矢を物ともせず、やがて周圍を征服して仕舞うではないか。最尊最勝の佛陀たる私も、亦必ずこの地に止まつて熱心に最勝の法を説き、辛抱強く人々を救うて欲情の網を免れしめやうと思ふ。私はどんな罵詈譏誘が私や弟子達の上に雨の様に降り注がうとも、決して氣にはかけない。」

これから間のないことであつたが、僧衆の中に不和の火が燃え出した。問題はほんのつまらぬことであつたが、一比丘が、思ひがけもなく犯したといふ、さほど重大ではない戒律のことであつた。その比丘は、他の比丘から、罪を犯したと非難せられて、別に故意に犯したことではなかつたのであるから、自分は罪を犯したとは思はないと答へた。これから犯不犯について論争が起つて銘々自分の味方を作つて争つた。この喬賞彌の比丘が、後に教團

に蔓延して食う炎のやうに、比丘尼達の間にも起つた不和の原因となつたのである。佛陀は双方の比丘に對して、忍耐と一致と慈愛とを教へて争を解かうとなされたけれどもすべて無効であつた。世尊の前では、互に沈黙を守つてゐたけれども、世尊の御在おんまゐにならない處では争がだん／＼大きくなる許りであつた。遂に世尊の御願も無視せられて、争は高じて、和合の綱を斷切するやうになつた。斯ういふ状態を厭うて、世尊は、僧衆の主なる者に、平和と一致の福音を説き勧め給うた。拔提パッタ、金毘羅キンピラ、阿那律陀アヌルツダは世尊の御教をうけ入れたが、他のものは争を續けた。遂に世尊は暫らく教團から遠ざかつて、自分獨り平和と默想の樂を味はんと決心して、道を**パーリレツヤカ**の村にとり、食を得て、娑羅樹の森に入り、樹の蔭に座を占め給ふた。村人は世尊の御企をきき、その場所へ急いで、隱者の小屋を作つて奉り、日々食物を御送り申すやうに約束した。

世尊はこの處に於て、獨り朗かな眞理を冥想してその樂みに第十の雨期を過し給うた。喬賞彌の三人の長者は、比丘達がいづも争ばかりしてゐるものであるから、佛陀が去り給うたのであるときいて腹を立てた。そして比丘等の争論がつゞく限りは、決して施物をせなといふことを發表した。この壓迫が効を奏して、争論者は自分達の不安の位置について

心配し出して最早争を續けてゐることが出来なくなつた。彼等は互に和解をして佛陀の所へ行いて御恕を願はふと約束した。**パーリレツヤカ**の森には功德を積んだ象が住んでゐて世尊の御許へ行つて三ヶ月の間、最も情の濃かな獻身的な御弟子がするやうに、世尊の御給事を申し上げてゐたのである。

三ヶ月の雨期が濟んでから、給孤獨長者は阿難と共に、佛陀の隠れ給うた所をいろ／＼に穿鑿して、世尊に舍衛城に歸つていつもの如く祇園精舎に御住みなされるやうに願うて下さいと阿難に頼んだ。阿難は長者の敬虔な願に動かされて、五百の比丘を連れて**パーリレツヤカ**の隱家へ赴いた。その途々、阿難は又例の我儘な喬賞彌の五百の比丘を連れて吠舍離へ來た。吠舍離の王と給孤獨長者とは最初五百の比丘の入國を拒んだが、彼等の後悔の至情に動かされて、この禁止を解いた。阿難は獨り世尊の御住家にいたつて例の御挨拶を申した後、世尊の「何故獨りで來たか」といふ御問ひに答へて、「私は多數の忠實な弟子達と外に喬賞彌の比丘を連れて參りました。喬賞彌の比丘は今や先非を後悔して、世尊の御免恕を乞ひ、以後どんなことがあつても世尊の御教に服従するといふ確い決心を示して居ります」と申し上げた。世尊は兎も角も彼等を連れて來るやうに命じて、快く引見して、その罪

過を免して下された。そして悪友と遠かり、静寂に生活する大利益を教へ給ひ、聽衆は心開けて豫流の聖者を得た。世尊はこの吠舍離に滞在し給ふ間、例の如く、處々を経めぐつて教を説き欲天色天無色天三界の多數を教化し給うた。この度の祇園精舎の滞在は餘り長くはなかつた。世尊は間もなく摩揭陀國の那羅と呼ぶる、婆羅門の村に入り給うた。この村の程近い處へ南山ダクシナギリと呼ぶる、山があつた。その上には一つの精舎がある。佛陀は茲で第十一の雨期を過し給うた。佛陀の施主はその村の婆羅門達であつた。この婆羅門達の主な仕事は耕作であつた。佛陀は毎日田畑に仕事をして居るこれらの人達と話し給ふことを特別の快樂たのしみとなされてゐ給うた。

(一)佛陀がその教を傳播し給うた仕方に関して集められた僅か許りの材料に依ると、佛陀は熱心な徳むことを知らない宣教師であつた。我等の見る通り、佛陀は愚なるものを教へ、解脱の正道を指示せんために一處から一處へと巡歴し給うた。今のベハル、ウードの地は事情や階級や男女の性に依らず、あらゆるものゝために勤め勵み活動し給うた舞臺であつた様に思はれる。人生の最も悲惨な歩みを踏む人々、惡事をはたらく男、捨て鉢になつた女は同じい程度に佛陀の優しい同情の對象であつたのである。その人達はすべて、佛陀の御足の下に集まり、佛陀が自分達の爲に貯へて下された天恵を分け得たのである。喬答摩は極度まで熱誠にして學賢な宣教師であつた。この點は同時代の人々許りではなく、印度半島中前後を通じて現れたあらゆる哲學者と異なる佛陀の一特性である。他の聖者は皆一派の主領となる事を目掛けたが、全人類に對して道德の教典を宣布する事を思はなかつたのである。釋尊は廣

き心を以て、平等に自分の教益を得るべきものと全人類を眺めた最初の人たる名譽を擔ひ給うた。全人類に對する愛は、佛陀をして自から大なる資賜と考へ給うたもの人々に與へるために、あらゆる勞苦を堪へ忍ばしむるやうにしたのである。私はこの事を記して、佛教創始者の教理の上に意見を立てやうといふのではない。たゞ私は、私の考に依ればオクスウス河の流域から日本の島まで佛教の非常に廣まつた一原因をなしてあるこの聖者のこの特性に讀者の注意を引きたいのである。かくの如く佛陀の教條はすべての人々に指し向けられたから通俗的になつたのである。よしその佛教の教理、殊にトクマに關するものに誤謬があつたにしても、佛教の外に人民に説かれた他の教理がないから、佛教は一般群衆に受け入れられたのである。また、釋尊の弟子達は至る所に歡迎せられたに相違ない。何故なら、弟子達はその當時に於て誰にも全然知られて居らない心の一性質、即ち全有情の福祉を希ふ生き／＼した願望を世間に示したからである。佛陀及びその初期佛教の間に、このやうに著しく顯はれたこの熱心は全然消え去つて仕舞うた。今日その教の流を汲む人々には他の國民種族の間にその教を宣傳する願望はないのである。

ある日世尊は野へ行いて、婆羅門種の一人に御遇ひなされて、仕舞には勝法を説き聞かせる目的でいろ／＼とお話をなされた。世尊は始め、婆羅門及びその家族に、一年中の食物を得るための勞働のこと、耕牛のこと、犁のこと、種蒔、收穫のことを話してゐ給うたが、進んで、「私も亦一人の勞働者である。耕作に必要な種子や道具は全部用意してある」と語り給うた。この御語を聞いた婆羅門は大に驚いて、「あなたの耕牛や種子や犁などは何處にあります」とお問ひ申した。世尊は冷然として答へ給うた。「さういふものは現在茲にある。婆

羅門よ、私の話さうとすることをよくきけよ。種子といふは嘗て燃燈佛の御許に於て、佛果——菩提樹の下にて遂に得た——を求めた熱望と仁惠の性情とである。私が佛となるまでに一時も休まずに行うた大善事は種子を育てる雨露である。智識は耕牛の軛である。犁の柄である。即ち私にあつて智識の根本となる心に耕牛を導く手綱である。勤勉は犁の齒で悪業と悪業の果を刈るものである。正法は犁そのもので、悪を去り善を増すものである。婆羅門よ、汝が汝の勤勉から得る食物といふは、悪を捨てて善をなすことにかゝり果て、居る人の得る清らかな趣味に當るのである。汝が犁を用ひて悪草を根抜きにするやうに、四聖諦の理に明かな人も亦、自分自身の中にある悪心と下劣の情を除き去るのである。野の仕事が終つてから、汝は汝の耕牛の軛をとつて自由に行きたい所へ放してやるやうに、賢い人も亦聖果へ進ましむる善行を勵まんがために、墮落のもととなる悪行を遠ざけるのである。耕牛は耕牛の仕事を果さんがために一生懸命に勵むやうに、賢き人も自分の存在の土を完全に耕し、涅槃の幸福に達するやうに勵むのである。又種子を蒔くに適當なやうに田畑を勵んで耕す家主は恰も、生存に附着する過惡を去り、善事を行うて徳の道にすゝみ、聖果の幸福を渴愛する眞の聖者に等しいのである。田畑を耕す人は時として失望したり、飢の

喘ぎを覚えることはあるが智慧の野を耕す人はすべての過惡や苦痛から免れるのである。彼は自分の労作の果實を念ひ、涅槃をみて満足を感じるのである。婆羅門よ、私が眞の農夫であつて、人の土を耕作するに必要なすべての道具を具へてゐるといふのはこの謂れである。婆羅門は世尊のこの明かな御教を喜んで道に入り、佛法僧に對する歸依を表明した。次で彼は教團の人となり、熱心なる瞑想の結果に依つて、遂に沙門果を開いたのである。

雨期が終つてから佛陀は國々を遍歴して教を説き大効果を收め給うた。佛陀はその後喬薩羅國のサチアピア市に赴き給うた。そこでエーランチャーの一婆羅門から招請を受けさせられ、快く承知をしてその地に赴き、その市で第十二の雨期を過し給うた。この時、多數の婆羅門が非常に歡喜して道に入り、三寶に歸依を表明した。惡魔は世尊の大成功を恐れ、邪魔をするために全力を盡した。大飢饉を流行させて、世尊及び世尊の御弟子の方を飢えしめ奉らうとしたが、五百頭の馬を連れて、オーサラバタから來てその時エーランチャーに滞在して居た商人の仁慈に依つて、危くも、惡魔の計畫は破れたのである。

世尊はそれから、その國を去つて、大マンタラ國に道を取り、一番の近路を取つて猶五百由旬もある大旅行をなし給うた。出達し結うたのがタボドウェイ月の満月の翌日で五ヶ月

の間も旅をつゞけて、漸やくに、ガヤガテの恒河の岸に到着し、大河を横ぎつてベナレスに到着し給うた。世尊はベナレスにも長く滞在し給はず、更に恒河を横ぎつて吠舍離の國に入り重閣講堂クイックラハハに居を占め給うた。それから更に舍衛城に歸り給うた。かくして世尊はいたる所に大法を宣傳し給うた。世尊は祇園精舎に居給ふ時に、御子羅睺羅のため大羅云經マ、ヒラフラスッタを説き給うた。羅睺羅は當時十八歳であつた。

第十一章

- (一) チュハリヤの町
- (二) メツギアに對する訓誨
- (三) 羅睺羅比丘となる
- (四) 摩訶那摩の四問
- (五) 善覺長者の悪行
- (六) 天人の四問

- (七) 夜叉の歸佛
- (八) 美女シリマーの死
- (九) 飢えたる婆羅門
- (一〇) 糞織姫
- (一一) 阿難陀侍者となる
- (一二) 鶯居摩羅の入道

舍衛城に留まり給うたのも僅かの間で、世尊は更にチュハリヤの町に赴き給うた。その町の人々は、町から程遠からぬ小山の頂に、世尊のために一精舎を建立し、世尊の日常の必要物は、これを豊に供給し奉つた。世尊はこの町の人々の歡待を快く思召し、その精舎で第十三の雨期を過し給うた。世尊はチャントーの村へ行乞に出掛け給うた。それから國々を遍歴して、キミキラ河の岸にいたり、マンゴ樹の美しい森の中に獨り靜寂を樂み給うた。御弟子のメツギアは、その森の景色の余りの美しさに心を奪はれて、暫らくこの場所に滞在したいといふ燃えるやうな烈しい望みを起した。浮世を捨て、欲情の追求を捨てた人が、斯

ういふ風に特種のある地に並はづれて執着する場合には、その刑罰として不意に奇體な變化が自分の上に湧き起るを感ずるものである。今もその例で、欲情が潮のやうにメツギア^{メツギア}の精神内に押し寄せた。世尊はメツギアの心持をすつかり知り給ふものであるから、浮世の事物のつまらぬものであることを説いて、彼の精神上の大病を治し給うた。

世尊は舍衛城に歸り、祇園精舎に於て第十四の雨期を過し給うた。大弟子舍利弗は五百の比丘を卒ゐて、近所の村にこの雨期を過して居つた。村人は舍利弗と舍利弗の同伴者とに隨喜して、銘々に黄色の絹布を贈つた。或る御弟子は、これを視て、舍利弗を嫉み悪んで佛陀の御許へ來て、舍利弗は貪欲であると讒誣した。然し佛陀は大弟子、舍利弗を信用して辯護し、自分の宏量を満足し功德を得る機會を得た布施主の宏量を推奨し給うた。

沙彌羅睺羅はその時二十歳となり、教團の丁年に達したので、新に一沙門として入團を許された。この若い沙門は生父佛陀の尊嚴と、自分の容色の美しき舉止の典雅なことについて虚榮の念を絶つことが出来なうた。佛陀は密に羅睺羅の胸中の所念を知り、自我及び容色の卑むべきことを懇ろに教へ給ひ、羅睺羅は非常に感銘して、この教に依つて沙門果を得ることとなつた。ある夜羅睺羅は世尊の私室の戸に近く眠つて居つたが、惡魔はこの若

い羅漢を驚かさんとして一象と化し、羅睺羅の頭の處へその長鼻を延して不意に恐ろしい音を立てたのである。その時室の内にお給うた佛陀は惡魔の誘惑と知り給ふと直に、「惡魔汝は沙門果を得たものには最早恐怖といふものゝないことを知らないのか」と叱し給うた。惡魔は發見されて、その毒計の失敗に恥と混亂とを感じて消え失せた。

その年、佛陀は釋迦族の迦維羅城に赴き、ロヒニー^{ロヒニー}河の岸に接近して立てられた尼拘律陀精舎に入り、第十五の雨期を過し給うた。ある日、世尊の從弟に當り甘露飯王の子であつて淨飯王の養子となつた摩訶那摩が僧團に來て、自分の高名なる親戚、即ち世尊に敬禮し次の四個の質問を呈出した。一には宗教的義務の充足はいかにして成立するか。二には宗教的性情とはいかなるものか。三には眞の放棄は何であるか。四には眞の智識とはいかなるものか。この四問題である。

佛陀は次のやうに答へ給うた。「宗教的義務の充足は、いかなる人も守らねばならぬ五戒を實踐すること成り立つのである。宗教的性情とは、佛陀、及び佛陀の説き給うた教法に關するすべてに向つて生ずる愛慕の情に外ならぬ。この宗教的性情を有する人は功德を得たいといふ不斷の欲求を経験するのである。放棄といふは、貧乏人を救濟し教團の僧衆に

施物を與ふる時に愉快の情を覺ゆるその時の精神の傾向をいふのである。終りに智慧といふは現在及び未來の功德を得る方法を知らしむるもので、人々はこの智慧に照されて、禍惡を遠離せんがために最上の精進をするのである。

世尊はその最も近い親族の中に於て最も烈しい敵に遇はねばならぬ運命を持つて御出になつた。世尊の叔父に當り且つ養父である善覺王は世尊に對して非常な惡しみを持つて居られて、密に復讐の機會を待つてゐられた。善覺王がかく世尊に對して惡心を抱かれたのは一は自分の娘の耶輸陀羅姫を捨て、出家をせられたといふこと、一は息子の提婆達多を出家せしめたといふ二つの理由からである。ある日、善覺王は、佛陀が乞行のために町のある方面へ行き給ふであらうときいて、平素心待ちしてゐた復讐の機會今こそ至れりと喜んで、元氣をつけるために酒をあほり、世尊の來給ふと思はれる方面へ出掛けて待つてゐた。世尊の近づき給ふを見るや否や、道の真中へ突つ立つて往來を止め、世尊に向つて惡罵を浴せかけた。世尊は神色自若として暫らく立ち停まり、阿難に向つて左の如く語り給うた。「私の叔父の罪はまことに大きい。今後七日のうちに叔父の宮殿の大階段の下で生きながら大地に吸ひ込まれるであらう。」この恐ろしい豫言が、善覺王に告げられた時に王は冷笑

して、「そんなら八日の間宮殿の上層にゐて甥の豫言を反古にしてみせる」と力まれたが、種々の注意にも拘らず、豫言は的中して、この不幸にも懺悔を知らない王は、脚下に裂けて燃える大地をみて、無間地獄のドン底へ眞逆様に墮ち込まれたのである。佛陀はこの自分の身内の王の上に墮ちかゝつた恐ろしい刑罰のことについて、摩訶那摩マハナマに語り、三寶に歸依して法を喜び、法を行うやうにと教へ給うた。

世尊はこの時まで布施をするものがあれば、その施物を弟子達と分ちて後、その施主に法を説き、その功德を讃え給うた。この教は感謝の説教、**アナウ・マウ・ダナ**と呼ばれて居る。世尊はこの後弟子達に許して、自身と同じい様に、施主に法を説き、眞理を知らしむるやうになし給うた。

その時佛陀は四暴流の教、即ち生存の渦巻の中に有情をつなぎ止むる四つの繫縛のことを説き給うた。それから、迦維羅城を去つて、舍衛城に歸り、祇園精舎に入り給うた。その時一人の天人が、仲間の間に四個の問題を呈出したが、誰もこの問題について解答の出來るものがなかつた。六欲天中に問題は廻されたが、猶解答の出來るものはなかつた。今は仕方がないといふので、一切を最尊最勝の佛陀に御任せすることに一致した。佛陀はその時

祇園精舎に在り給うたので、一人の代表者がこの精舎に送られた。天人達の困迷して居る問題を呈出して、皆の望んで止まない解答を下し給はんことを願ふ目的である。代表者は世尊の御前に出て、いつもの敬禮をなし、さていふやう。「最勝に在ます世尊よ、施物として與へらるゝものゝ中何ものが最善でありますか。すべてのものゝうち、香の最も高く味の最も善いものは何でありますか。最も楽しいものは何でありますか。欲情を絶滅させるに最も善い最も適當なものは何でありますか。」これらの四個の問題について佛陀は一言にして答へ給うた。「それは教法である。」佛陀は更に諸天と比丘等に語り給うやう。「物を施すといふことは善事には違ひないけれども、人を解脱の聖道に導き入るゝことは出来ぬ。この解脱の聖道に導き入るゝことは獨り法の善くする所である。それ故に、法を説くこと、他人につとめて法の智慧を與ふることは、最も勝れた布施である。浮世の快樂を味はしむるものは、すべてみな生存の渦巻の中にすべての禍惡の中に人を巻き入るゝ道具となるものである。これに反して法を聽聞することは、歡喜の涙を流さしむる程心を樂しましめるものである。欲情を消し、生存の旋風の中から免れ出しめ、最後にすべての欲情を征服し終れる阿羅漢のさとりを開かしむるのである。それであるから、法はすべての禍惡を離れしむる

香の最も高いもの、最も楽しいものといふべきである。我が愛する弟子達よ、四方に道を傳へ宣べて、人々に法を知らしめよ。これこそ人天梵の三界の有情に汝等が與へ得る最善の施物である。

佛陀は舍衛城を去つて、阿羅毘アライキに向ひ給うた。その時、丁度阿羅毘には一夜叉神あつて毎日幾人かの子供を食ひつゝあつた。その夜叉神の貪つて厭かない恐ろしい餌食となつてその國の子供達は悉くなくなつた。只國王の子が一人残るのみとなつた。それも翌日は食はれて仕舞う運命にあるので、悲痛の色が國中に漲つて居る時であつた。佛陀はいつもの如く、早朝にすべての衆生の状態を観察し給うたが、阿羅毘の王とその王の悲しむべき境遇を憐察し給ひ、兩人を救ひ且つその夜叉神を道に入れんがために、その地に到着し給うた。王を始め國民は非常な歡喜を以て世尊を迎ひ奉つた。世尊は直に夜叉神の住む森に入り給うた。初め夜叉神は佛陀に對し、非常に恐ろしい烈しい抵抗をした、然しその火の様な抵抗に對して世尊は優しさと堪忍と親切とを以て向ひ、やがてその恐ろしい性質を柔げ給うた。けれども、夜叉神はその内心に起つて居る變化を押し隠し、その邪惡な性情を出して、佛陀に申し上げた。「俺は多數の有名な隱者に疑問を呈したことがある。然し彼等は一人もこ

の疑問に答へることの出来るものはなかつた。俺は彼等が全く無能であると思ふや直ぐに彼等を掴まへて切々に裂いて、そのわななく四肢を恆河の流れに投げ込んだ。喬答摩よ、汝ももし私の間に失敗すれば同じ運命のさばきを受けねばならぬぞ、私の質問といふは外にはない。いかにしたら、人は欲情の流れから脱しうるか。いかにしたら生死の海を渡ることが出来るか。いかにしたら悪の勢力から免れ出ることが出来るか。どうしたら淫情の至極微細な汚れすらも滅ぼして清淨に身を保つことが出来るか。」世尊は答へ給うた。「夜叉よ、私の語る所をきけ、私の答は御前を満足させるであらう。三寶の信仰と敬愛とに依つて人は欲情の流れから脱することが出来る。功德の法を熱心に學ぶものは生死の海を渡ることが出来る。功德の行業を積むものは悪の勢力を免かれ、惡業に従ふ禍惡から脱することが出来る。猶終りに、涅槃へ導く四聖道の智慧は、能く淫情の些かなる汚れをも免れしめ清淨ならしむるのである。」夜叉神は佛陀の語り給ふ所をきいて非常に歡喜し佛陀を信じやがて豫流の聖果を得たのである。この華々しい豫想以上の宗教的成功の贏ち得られた所は一の精舎が建てられた。佛陀は茲に第十六の雨期を過し給うた。例の如く無量無數の天人は佛陀の説法を聞いて解脱を得た。

この阿羅毘から佛陀は更に王舎城に歸り給うた。そしてその竹林精舎に於て第十七の雨期を過し給うた。この雨期の間、有名な醫者の耆婆の妹で、その性質のさがしさと、容色の又なき美しさで國中に双ぶものゝない程に思はれた名高い娼婦のシリマーは、佛陀の御弟子達に施しをしたいと思つてゐた。毎日、多數の弟子達はシリマーの邸宅へ赴いて食物と一緒に豊かな施物を受けて得た。その中、敬虔な乞士の一人であつたが、自制を忘れた刹那、不圖した心に引かされてシリマーを眺めて、忽ちその艷容に打たれて戀の癡となつた。この哀れな傷は偶然の出來事で益々廣く深くなつた。ある日シリマーは病に犯された。シリマーは病氣にかゝつても一日もその行施を怠らうとはしなかつた。身體が弱つて動かすことが出来なくなつても、猶比丘等を敬禮せんがために、自分の病室まで比丘等を引き入れた。不幸な戀する比丘もその中であつた。シリマーの比べるものゝない艷容はその清素な室著と、少しくやつれたすがたに依つて一層美しさを増した。不幸な戀する比丘は仲間のものと一緒に僧團に歸つたが、戀の矢は深く心臓の髓を射體いて、食を取らうとせせず、二三日の中は仲間を外れて物思ひに耽つてゐた。處が比丘がこの内心の戦闘に人知れず苦しんでゐる中にシリマーは死んで仕舞つた。佛陀はこの哀れな比丘に同情してその心の病を

療治するために、比丘を連れてシリマーの宅へ出向き給うた。それはシリマーの死去四日目であつた。佛陀は使を遣はして頻婆娑羅王を招き給うた。シリマーの遺骸は今世尊の御前に横はつてゐる。生きてゐた時と同じすがたではあるけれども今は身體中が水ぶくれのやうに膨れ上つてゐる。數知れぬ蟲が、うちや／＼と毛孔などから出入りしてゐる、ぞつとする程厭な光景と、それに強い臭氣とは殆んど誰人も近くへ立ち寄らせぬ有様である。世尊は靜かに王に語り給うた。「私共の前のもは何でありますか。」「シリマーの遺骸であります。」「シリマーの生前には人々はこの女と一日の樂を共にしたい許りに數千の金を投じました。今はこの女のためにその半分の金を投ずるものがあらうか。」「否、國中何處を尋ねても一人も今はこの遺骸を得たいために半錢出すものもありません。それ許りではない、余儀ないことなら仕方もないが、自分の好きでこの遺骸を少しく運んでやらうといふものもありません。」「佛陀は會座の久々を呼び掛けて語り給うた。「生前にはあれ程人の心を狂はすまでに美しかつたシリマーの遺骸をみよ、人々の心を欺きまどはして擒にした容色は今は何となつたであらうか。すべてのものは皆滅ぶるものである。この世に永久の實在はないのである。」「この教を聞いて、八萬二千の人々が四諦の理を悟つた。食事を取らない

迄に戀に惱まされた比丘は惡夢の覺めた様に、戀の病から癒えて、豫流の聖果を得た。この事はすべて世尊が竹林精舎に於て第十七の雨期を過し給ふ中に起つたことである。

この雨期が過ぎて、世尊はいつもの如く處々を遊歴して舍衛城に歸り祇園精舎に入り給うた。然しその御滞在は長くはなかつた。世尊は直に阿羅毘に趣き給うた。人民は非常に歡喜して世尊を迎ひ奉り、世尊の必要とし給ふものは悉く豊かに送り奉つた。或日世尊が人民から澤山の施物を受けて説法してゐ給うた時であつた。その日貧乏な一婆羅門、平素熱心に心掛けてゐて今日こそ佛の説法をきかれることと樂んで居つたのに、丁度その日の早朝、一頭の牡牛が牧場から逃げ出して行衛が知れぬといふ知らせを得て非常に困つて、今日も教をきくことが出来ぬ、黄金の機會を取り逃しはしまいかと恐れてゐた、然し彼は全力を盡して早く仕事を済して丁度教のきける時分に戻つて來やうと思つてゐた。彼は牡牛を探し出して連れて來るまではあらん限りの力を出して飛び廻つたが、そのことを果して町へ歸つて來たのは丁度正午頃であつた。彼は飢に喘ぎ、疲れあひに疲れて居つたけれども、眞直に世尊の會座へ趣いた。人々は既に集まつて施物をした後で、尊敬を表して、互に手を結び合せて、佛陀の御前に立つてゐた。佛陀は又人々が今口を開き給ふか、今か今かと待ち

構へて居るにも拘らず、沈黙して口を開かず居給ふた。世尊は神通力を以てこの貧乏な婆羅門を観察し、その機縁の熟せるを知り、彼をしてこの會座に參り聽法の幸惠を分け持たしめたいと欲して待ち給うたのである。その婆羅門が會座の間にあらはるゝや、世尊は優しい眼眸を以て彼を御覽なされ、身近く參るやうにと招き寄せ、御弟子に命じて、食物を御與へなされた。世尊は彼が食物を喰べて飢の喘ぎから救はるゝまでは法を御説きなされなんだ。説法が畢つた後で、比丘のうちには、世尊が何故、普通の一人の人間に、このやうに特別の注意を與へ給ふのかと怪み嘲るものもあつた。世尊は、彼等比丘の内心を知り通し給うて、左の教訓を説いて、その嘲りの心を叱し給うた。「我が愛する弟子達よ、汝等は私が特別にこの貧しい婆羅門のために恩惠をかけたことについて驚いて居るやうにみえる。然し私は彼が何物よりも勝れた心掛と法をきかんとしふ熱心と、私に對する生き／＼した強い信仰と、法をききたいといふ一念から、飢も疲れも忘れて、自分の苦しさを、何とも思はぬその崇高い心を觀て取つたのである。」この教に依つて居あはした多數の人々は道に入つたのであつた。

佛陀はチハリーヤの町近い小山の上に建てられた精舎に赴いて第十八の雨期を過し給

うた。その町に一人の機織があつて、一人の娘を持つてゐた。その娘も父と同じい仕事をして居たが、娘は世尊の説法を御聞き申したいといふ熱心な願をもつてゐた。佛陀が町へ來て説法なさる丁度その日に、機織を頼まれて、その日の中に仕上げて仕舞はねばならぬ破目になつた。娘は獨り謂ふやう。「今日は一生懸命に働いて、この機も仕上げ、世尊の教も聽聞しませう。」娘は直に仕事にとりかゝつて、糸を簍に入れて、父の機場のある小屋に赴いた。その小屋への途中、澤山の人達が世尊の前に群れ集うて、身動きもせず、音も立てず、世尊の御口から洩れ出づる御語を待つて居るのを見て、娘は堪まらずに、近くへ行いて簍を傍に置き、氣遅れしたやうに群集の一番の後へ躊躇つてゐたのである。佛陀は一目見て、娘の機縁の至れるをみ、長い旅をして茲に來たのもこの娘のためで、効があつたと喜び給うた。世尊は娘を呼びかけて近くへと仰せられ娘は喜んでその仰せに従つた。世尊は御聲にも何となく機みがついて、「御前は何處から來て何處へ行くのか」と尋ね給うた。娘は優しく控ひ目に、「私は何處から來たか、何處へ行くのか知つて居ります。又それと一緒に、何處から來たか、何處へ行くのか知りません」と答へ奉つた。この一見矛盾した答辯をきいて、多くの聽衆は皆何となく憤りの情を覺えた。然し佛陀は娘の智慧を知り給ふものであるから、ざ

わつき出した群衆を静にせよと制して、この若い談論者に向つて答辯の意味を委しく解釋するやうにと命じ給うた。娘のいふやう。「私は私の父の家から来たこと、父の機織小屋へ行くことを知つて居ります。然し私はいかなる過去の生から此の世へ生れ出でたか、又この生から如何なる生へ移つて行くのか少しも解りません。私の心は何れもこれも知つては居りません。」佛陀は娘の智慧を稱讚して説教を初め給うた、その御話の終つた時、娘は豫流の聖果を得た。娘は直に立ち上り簍をとつて小屋の内へ入つた。丁度その時娘の父は機の柄の上手に手を上げて眠つてゐた。娘は機に近づいて、糸をそろへ初めた。その時不意に父親は眼を醒して今まで手を舉げて置いた機の部分を不注意にも強く押した。而して押された機が、娘の胸を強く打つて、娘は直に斃れて呼吸を引き取つた。不幸な父親は、悲しみに身も世もなく、娘の遺骸の上に瀧なす涙を注いで、悲しみに堪へられないで、世尊の御許へ走つて、哀情を訴へた。世尊は優しくこの不幸の父親を待遇し給うて、懇ろに法を説き、その心の重荷を取り除き、猶も法を説き勸めて、四諦の理を教へ、不幸に泣く暗い心を追々に明るくさせて下された。不幸な彼もやう／＼に心の結ばれが解けて喜びを覺えるやうになつた。その喜びといふは、聖道の智慧のみが與へ得るものである。彼は今の浮世を捨て、教

團に入らんことを願ひ、許されて沙門となり間もなく聖果の人となつた。このことに習うて多くの人々も亦道に入つた。

佛陀は王舎城に歸つて第二十の雨期を竹林精舎に過し、雨期後、摩揭陀國の田舎の地方を巡歴して處々法を説き給うた。これより先、王舎城にある長者があつて、一人の娘を持つてゐたが、その娘はいつも美しい宮殿の上層に住居してゐた。ある日早朝、娘はその室から田舎の人々の市へ入り込むのを面白く見てゐたが、多くの人々の中に、獸の肉を車に載せて引いて来る若い獵師を見て、その若い美しい生き／＼した活氣に満ちた容貌をみて戀に囚はれ、やがてその男と一緒に逃げ出す準備をした。娘はそれに成功して獵師と一緒に、多くの子供を持つて大家族を作つたのである。ある日世尊は森を通つて、その獵師の係蹄けいひに落ちた鹿をみ出し、憐愍の情に堪へないで、係蹄を外して逃して下され、自分は退いて森の木の下で禪定に入つてゐられた。獵師は時分は好しと出てみたが、係蹄の外されてゐるのを見て、誰か悪戯をしたのであらうと思ひ込み、非常に腹を立て、周圍を見廻して、大樹の下に靜に禪定に入り給へる黄衣の佛陀を見出し、「これが悪戯をした奴に相違ない。要らぬ御世話をした報償をしてやらう」と弓を取つて矢を番へ、將に世尊を射殺し奉らふとし

たが、兩手が急にしびれて、心があせればあせる程自由がきかず、足は大地に釘打られたやうに動かす、弓矢をとつた形のまゝで凝り付いたのである。佛陀は猶深い禪定に入つてゐ給ふので、身の近くに起つて居るその事實を知らずにゐ給うた。

その獵師の息子等は、父がいつも係蹄を見舞つて歸る時間に見えないので、もしや不吉の事でも起つたのではないかと心配して、銘々武装して搜索に出掛けた。彼等は自分の父が、奇妙な有様に立ち竦んでゐるのをみて不思議に思ひ、その直ぐ近くに黄衣の比丘の靜坐するのをみて、的確り、この比丘が魔術にかけて父をあゝいふ目に合してゐるのだと思ひ込み、比丘を殺さうと決心して、用意にとりかゝつたが、息子等も急に兩手が萎えて、劍をとることが出来ず、動くことも聲を出すことも出来ず、そのまゝ、化石したやうなすがたになつたのである。世尊はこの時禪定から覺め出で、眼の前に父子一家の有様をみて、憐れに思ひ、もとのすがたに戻して、法を説いて聽かしめ給うた。父子は五體を地に投じて罪を謝し、世尊を信仰して熱心なる優婆塞となつた。

佛陀は舍衛城に歸つて祇園精舎に、第二十一の雨期を過し給うた。佛陀御一身の御給事の上に一大變化のあつたのはこの時期中である。この時までは、佛陀に侍して、御給仕を申

し上げる御弟子に誰々といふ定りはなかつた。四五人の人々が折々、この快い譽あるつとめをして來たのであつた。人間といふものは、どんな善い人でも、時折り、その持つて生れた素地の性質を表に顯はすものであるが、佛陀に侍し、鉢を持ち衣を捧げてゐた比丘が二度佛陀の行けと仰せられた方面へ行かないで、自分勝手の方面へ行つたことがある。而して彼等のこの不謹慎な反抗は哀れな結果に終つて、彼等は盜賊の手に捕はれて、持つて居たものをすつかり奪られたのみならず、烈しく頭を打たれたのであつた。この反抗とその結果とは佛陀を悲しく感せしめ奉つた。佛陀は比丘等呼び集め、自分も今は年老いたから、當時自分に隨侍する一人の比丘を定めて貰ひたいと仰せられた。舍利弗と目連とは直にその常侍の比丘になりたいといふ志望をやさしい心から驚くべき熱心を以て申し述べた。然し佛陀はこの兩人の申入のみならず、外の八十人の重要な地位の比丘の申出をも拒み給うたその理由は、彼等のつとめが、人民に法を説くといふ所にあるので、自分と一緒に大法の宣布といふ重任を有するからといふのであつた。それで弟子達の中には、阿難にすゝめて、常隨の比丘となりたいと自ら曰はしめやうとしたが、阿難は謙下りて沈黙をして居つた。到頭迫られて阿難は申すやう。「もし佛陀さへ私の卑賤しい給仕を受け入れて下さるならば、

又私の心の性癖きせつを知り、いつの場合でも給仕を申し上げたいといふ私の希望ねがひを許し給うならば、私はいつでも只世尊の御樂みを願うて居る許りであります。私はこの尊い務を受け身の仕合せを餘りのことと喜んで居るのであります」と申し出した。世尊は今まで阿難のこの語を待ち設けて得給うたやうに、直ぐにその聖務を阿難に與へ給うた。阿難は正式に佛陀の侍者として指定任命せられた。かうして阿難はこの後廿五年の間、世尊の隨侍の比丘として愛情に満ち／＼た献身的の行爲をして來たのである。この後すべて佛陀の面謁者は悉く阿難を通じて初めて世尊の御前に出づるを許され、阿難を通じて一切の教令が出されたのである。世尊はその時に五十五歳であらせられた。

ある日世尊は食を得るためにチャントウの村へ行き給うた。世尊の生涯の敵である惡魔は、村人をして世尊に食を奉らしめないやうに村人の心の内へ入り込んだ。惡魔の奸計は成功して、村人は第一街道を御通りになる世尊の御すがたを認めるものもなく、従つて食物を獻らうとする者もなかつた。世尊が門近く來給うた時街道の傍に立つてゐた惡魔は冷笑的な語調で、「飢の喘をいかに感じたか」と問ひかけた。世尊はこれに對して、「禪定に憩ふものは大梵天の如く、肉團の食を用ひすともたゞかの清明なる眞理を觀察して得る内心の

歡喜に依つて生きることが出来るものである」と答へ給ふた。その時又五百の乙女等が、他郷からの歸路その場所へ出遇はして世尊を敬禮し教をきいて豫流の聖果を得た。

その所を離れて、世尊はある森を通過なさうとし給ふた。その森といふのは有名な兇賊で殺人者である鴛屈摩羅アングリマテヤの名高い住家として喬薩羅の人民に非常に恐れられた場所である。波斯匿王は宮殿の窓から、臣民の驚きの叫びを聞かれた。世尊のその森へ入られるといふことについては、いづれも危懼の念に驅られていろ／＼に御諫め申した。然し世尊はそれに拘らず泰然として、この恐るべき兇賊の棲家へ向つて進まれた。鴛屈摩羅は、森に進み入り給ふ世尊をみて、よくもまあ、無遠慮に大膽にこの名高い森に侵入したものと憤り今目に物見せて呉れやうと待ち構へてゐた。然し、今度の對手は今迄のものとは違て容易には驚かすことの出来ない人であるので、鴛屈摩羅もこの應對には随分骨を折らねばならなんだ。危害を加へやうといふ脅迫と計畫とは最も溫和な態度とやさしい容貌と侵し難い忍耐を以て報いられた。こうした對手の溫和に遂に心を柔げられた鴛屈摩羅は、今までの劇しい語調や態度を變へて、佛陀を禮拜した。佛陀は直ちにその兇賊の心中の變化を見てとり、法を説いて心機の大轉換を來らしめ給ふた。人々の驚愕の叫びの中に、鴛屈摩羅は世

尊に従つて森を出て世尊の御弟子となつた。喬薩羅の人民は惹屈摩羅の心機の轉換を信用することが出来なうだが、彼は間もなく沙門果を開いたのであつた。そしてそれから間もなく涅槃に入つたのである。ある日比丘達は一處に集まつて惹屈摩羅が何處へ轉生したであらうかといふことをいろいろに論議して居つた。世尊はこの論議をきいて比丘等に語り給ふやう。「愛する比丘等よ、惹屈摩羅比丘は、道に入つて間もなく入寂したけれども彼は解脱を得たのである。彼の入道は頓極であつて、又圓滿であつた。彼は入道以前は非常に兇惡であつた。これも一は彼が横惡なる仲間と常に同居してゐたので、仲間のために斯ういふ混亂の状態に導かれたのである。然し彼は幸ひに私に遇ひ、私の教をきき、汝等と語り合ふに及んで直に私の教を信じ、全身を投げ込んで私に信頼し、涅槃の聖道に入つたのである。彼は猛然として奮ひ立つて、惡徳の法を滅ぼすにつとめ、かくて速に最上の聖果を得たのである。

第十一章

- (一) 異教師、孫陀利女を使って佛陀を讒誣す
- (二) 一婆羅門の質問
- (三) 給孤獨長者の姫
- (四) 躋より放光する婆羅門の歸佛
- (五) 佛傳の缺所
- (六) 提婆達多物語

- (七) 佛陀に對する嫉妬
- (八) 阿闍世太子と結ぶ
- (九) その野望
- (一〇) 佛陀試害の惡計
- (一一) その凄慘なる最後

最尊最勝に在す佛陀が祇園精舎に滞留し給うた時であつた。舍衛國の外道は佛陀の名聲を殺ぎ滅ぼさんがために他の奸計をめぐらした。彼等は先づ自分達の教に心酔して何事にもいひなりになる孫陀利^{スンダリ}といふ女を使うて、一夜佛陀と共に佛陀の私室に過したといふことを觸れて歩かした。この讒誣が世間に充分に擴がつた頃、一群の惡漢をやとつて、多額の金を呉れると約束して、讒誣の道具に使うた孫陀利を殺すやうにと教唆した。金に目が眩んだ惡漢共は、善い機會を見つけて、孫陀利を殺し、佛陀の居所近い藪の中へその屍骸を投げ入れた。一方では外道共はこの兇行が行はれてから急に孫陀利を求め出して國々をめぐ

ぐつたが見當らない。八方に手を擴げて探して、もとく約束の屍骸を投げ込んだ處で見出して、罪を佛陀になすりつけ、國王に訴へて無理強に世尊を訊問せしめ奉らうとした。然しこの醜陋極まる奸計は次のやうな次第で暴露して來た。惡漢共は金に懷を温めて酒屋に行つて、酒を煽つた結果互に孫陀利を殺した罪のなすり合ひをした。この争が王の臣下にきつつけられ、直に捕はれて王宮に縛められたのである。「惡漢共、孫陀利を殺したのは貴様達だといふは偽りないか。」「私共が殺したに相違ありません。」「誰か貴様達を教唆してやらしめたものがあらう。」「それは天を祭る先生達であります。私共に一千銀呉れました。」「王の訊問にすべてが暴れて、彼等教唆者は皆囚はれた。王はこの兇惡な所行に激怒して、下手人も教唆者も共に死罪を宣し、生きながら地中に腰まで埋めて、藁を積んで火を付けて火炙あぶりの刑に處罰した、佛陀はこの悲しむべき出來事は、悉く、自分が前生に亂醉して、聖者を讒誣した正當な報酬であると物語り給うた。

世尊はその布教的遍歴の間に、有名なる婆羅門を道に入れ給うた。婆羅門は問ふやう、「最尊最勝に在す佛陀よ、大梵天は前世如何なる善根を植ゑて今日あのやうに身體から非常な光明を放ち、比類ない幸福を得て居るのでありましやうか。」「世尊は答へ給うた。「大梵天は

過去七生の間常に貧民を賑はし危きより多くの生靈を救ひ、愚かなものに教を垂るゝことを樂とした。これらの功德に依つて、彼は今日あの高い位を占め限りなき時の間、比べるもののない幸福を得て居るのである。」

舍衛城の長者と、鶖伽アングの一市民たる長者と若い時分に一緒に學問して居つて、もし二人のうち娘のあるものは、嫁にやらう貫はふといふ約束をして居つた。生長してから、舍衛城の長者は佛陀の信奉者となり、鶖伽の長者は外道を信仰してゐた。舍衛城の長者といふは給孤獨長者のことであるが、長者には一人の美しい愛嬢があつた。鶖伽の長者も亦立派な若い息子を持つてゐた。ある時鶖伽の長者は五百輛の車に商品を積んで商賣のために舍衛城アングに來り、いつもの如く給孤獨長者の家を宿とした。いろ／＼四方山の話をして居るうちに、鶖伽の長者は前約を思ひ出して、日ならず愛嬢を貰ひうけて息子の嫁にしたいと申し入れた。給孤獨長者は家内や娘に相談して申出を承諾して前約を履むこととなつた。然し敬虔なる長者は、外道の信仰者の間に、一人の娘を手放すことを何となく氣づかはしく思ひ、多勢の侍女をつけて嫁入りをさすこととなつた。その侍女達さへ居れば、娘の信仰を佛陀に繼いで置くことが出來やうと思つたのである。長い旅をして鶖伽の市へ到着した時に、花

嫁は先づ養父の請求を受けた。それは養母と一緒に修行者を禮拜して来いといふのである。修行者は全身全裸で、髪を振り亂し、かねて用意の小舎の非常に汚ない中に平氣で坐つてゐるのである。斯ういふ見るに忍びない光景に、溫和やかな生娘は、恥ぢ恐れ一瞥だも與へることを屑しとせず、身を振はして、後すぎりした。無法なる養父は、この娘の修行者に對する態度に激怒して、息子の嫁には不相應だから、直に家から追ひ出さうと脅迫したが、信仰の堅い娘は、あらゆる壓迫をしのぎ、その決心を鈍らして修行者に敬意を表さしめやうとするすべての努力を無効にした。娘は自分の室へ歸つて、暫らく神氣を休め、いつもの平靜な態度をとり直して、改めて養母を初め、市の娘達に對して、自分の大師即ち佛陀及び佛陀の御弟子方の光輝と溫柔と謙讓と、その他すべての徳を讚嘆した。養母を初めそのさゝ手であつた女達は、非常に喜んで、佛陀や御弟子達を拜してその教を受けたいといふ熱望を顯はすに至つた。

丁度その日佛陀はいつもの如く早朝、教化を受くる衆生があらうかと閻浮提の衆生を觀はし給うたが、直に鶖伽の長者の家に起りつゝある事件を知り、家人の縁の熟せるを見てとり給うた。「これから急いで行いて法を説かう、道に入るものが澤山あるであらう。」世尊は

かく宣うて五百の弟子達を集め、鉢や他のものを持ちこれらの弟子達を伴ひ空を飛んで直に長者の家の庭に下り給うた。家の人達は佛陀及び弟子達を拜して非常に喜び、その説き給ふ教に熱心に耳傾けた。長者を初め市の人達も多く道に入つた。佛陀はこの道を開きかけた鶖伽の信道の大業を完成する爲めに阿那律を残して、自らは舍衛城に歸り給うた。

その時ある婆羅門があつて、臍からして月形の一種の光明を放つといふので大評判であつた。彼は未信者の部に屬し、さういふ未信者に依つて不思議力を有する生きた證據として村々や町の間を連れて歩かされた。遂に彼の友達を祇園精舎へ連れて來た。處が不思議にも世尊の御前に出るとその怪事がばつたりと止んで仕舞ふ。精舎の闕を出ると再び光明を放つ。又世尊の御前に出ると光明が消える。かくすること三度に及んだ。茲に至つては佛陀に不思議の御力、婆羅門の有するものよりは勝れた力のあることは疑を容るゝ餘地がないのである。婆羅門は困迷し惱亂して、愚かにもこの出來事を世尊が不思議な魔術を施し給ふからだと思ひ込んで、その魔術を教へて下さるやうに願うた。佛陀は宣うた。「婆羅門よ、私は咒文は持たない。すべて魔術といふものは知らない。私にあるものはたゞ徳丈けである。菩提樹の下で四十九日の間、最も深い禪定に入つて集めた徳丈けである。」

汝が今人々の注意を引いて居るものは、實は汝が、前生に於てあの佛陀に月形の金冠を捧げた天の功德に依るのである。さういふ善行に依て與へられた汝の報酬は一時的のものである。決して汝に實のある、實質のある永久的の幸福を與へ得るものではない。私の説く教をきけよ、これこそ決して滅びない報償を與へるであらう。」かくて世尊は教法の要點を説教し給ひ、婆羅門は佛陀を信仰し、比丘の群に入りやがて沙門果を開いたのである。

ビ氏の註。佛陀の傳記は殆んど第二十一の雨期即ち佛陀の五十六歳の御年から第四十四の雨期即ち七十九歳迄の二十三年間の行實、説教共に知られて居らない。この長い間の事件について、記者もいろ／＼の寫本を取り調べてみたが、不幸にして緬甸原譯者が到着した結論、即ち佛陀がこの二十三年の間、何といふ處に雨期を過し給うたかといふことさへ明瞭に分つて居らないといふ結論に終つたのである。長年の間、佛陀の最大なる施主であつた給孤獨長者に對する敬意に依つて、殘年の多分を祇園精舎に過し給うたことは明かである。その他の年は、王舎城又は王舎城の近く、主に竹林精舎に滞在し給うたやうに見える。世尊成道以後、入涅槃の際まで過し給うた雨期は四十五である。

(一)佛陀の一生中過去二十雨期を過し給うた場處の名丈け示して、後の二十三回の雨期に於ける巨細に關して何

等記述のないこの短かい傳記は、前にも記したことのある通りこの編輯が甚だ簡單なもので、佛陀が教法宣傳に従事し給うた間のホンの一部の輪畫だけを示した不完全なものだといふ斷定の一つの證明となるものである。佛陀は八十歳に達し給うた。この傳記の典據に依れば、佛陀は正覺成就以來四十五年間生き給うた。それで佛陀が公生涯に入り教法を宣傳し始め給うたのは三十五歳の時であつた。この傳記書が古く出来たものかどうかを積極的に云ふ方は私にないが、然し、重なる出来事の記述は東方亞細亞の諸處及び諸國語に現存してゐる佛教書籍の記述と一致してゐるのでその確實を證明されてゐる。佛陀が左様に長命を保ち給うたものなら、最後の二十五年間も同様に慈悲を行し、正法を説いて解脱に導くといふ聖業に従へ給うたに相違ない。多くの書には佛陀とその對手の異教者との間に交換された宗教上の辨難が記されてゐる。私はこれらの辨難が佛陀の後生涯に起つたものだと思つてゐる。何故なら、この新しい教が人民の間に廣まる度に準して左様いふ場合も多くなつたに相違ないからである。佛陀の後半生の後の部分は、こゝ云ふ風に全然暗黒になつてゐるが、その代りに、最後の一年の趣味多い出来事は委しく示されてゐる。

茲に猶注意に値えすることは、毘舍佉と名づくる吠舍離の富貴な未亡人に依つて建立せられた東園精舎のことである。この精舎は有名な祇園から東の方向へ遠からぬ處にあつた。佛陀が祇園精舎の東門から出門し給ふ時には人々は世尊は東園精舎へ行き給ふのだと噂さし合ひ、北門から出て給ふ時には國々を巡歴して説法の旅に上り給ふのだと噂さし合つたのである。何時この精舎が建立献納せられたかは確り解つて居らない。然し二三の事實を綜合してみると佛陀が六十歳に在した時であつたであらうと思はれる。

寫本には大抵この處で。佛陀が弟子達に向つて話し給うたものとして提婆達多に關する委しい記事が載せてある。佛陀が王舍城の王としての阿闍世王の名を記載し給ふ處からみれば、提婆達多が、その責を負はねばならぬ多くの惡むべき犯罪のために恐ろしい刑罰を受けた時期もいつ頃か大抵は知れるのである。阿闍世は牢獄へ閉ぢ込めて食を斷つて父王頻婆娑羅を弑し王位を奪ふたのであるがこれは大抵世尊の七十二歳の時であらう。その結果として阿闍世は王となつた。提婆達多は猶その精神上の助言者であつた。それで次の事實は、この事あつて後二年間に起つた出來事であらう。

佛陀は祇園精舍にあつて、提婆達多の上に降りかゝれる悲運を説いて、この恐ろしい事件を起して來た原因を示し給うた。

ある時、佛陀が喬賞彌國にゐ給うた時であつた。人民は毎日僧園に群り集まつて、世尊及御弟子方に豊かな贈物をして敬拜の意を表した。或る時彼等人民は舍利弗、目連、阿那律、阿難陀、跋婁、金毘羅等の教團の勝れた人々の御憐謙を伺ひ、自分達の抱いて居る稱讚と愛慕の情を表した。然し彼等は提婆達多には一顧も與へななだ。提婆達多はこの故意の輕視を非常に強く怨んだ。提婆は教團員中の自分の能力の勝れたるを自任し、且つ王族である

といふ誇をもつて居るから殊更に憤怒の情に堪えななだのである。彼は能力といひ素性といひ自分よりは遙かに劣つてゐる人達が重んぜられて、其の二つの點の特に勝れてゐる自分が輕視せられてゐるやうに思うたのである。提婆達多はこの憤懣の情から佛陀の僧團を離れて他所へ移らんと決心して、王舍城へ行いて頻婆娑羅王の若き太子阿闍世に取り入つてその眷顧に身を寄せたのである。若き太子はこの新來の比丘の壯重なる様子に靡せられて、師として仰ぎ、提婆の爲に市に接近してゐるヤウシヤ丘に一精舍を建立した。

その後數年にして、佛陀は竹林精舍に雨期を過ぎうといふので王舍城に來給うた。その時提婆達多は世尊の精舍を訪れて、常に變らぬ様で禮拜して、一面に退き、佛陀直接の指導の下にある教團の外に特別に自分の配下の教團を作りたいといふ要求を三度も申し上げた。然し世尊は三度その要求を斥け給うた。その日から提婆の佛陀に對して抱いた嫉妬の情は野卑猛惡となり、佛陀に對する恐るべき憎惡の念となつたのである。提婆は佛陀と精神的關係を全然斷ち切つて、新しい宗教團體の主長にならうと決心した。この不逞の計畫を成功せしむるには確かな筋の保護を受けねばならぬ。摩揭陀の王は佛陀の味方であるが、その太子は提婆に對して大に好意を持つてゐる人である。それでこの機を見てとり惡心の燃

え立つて居る提婆は阿闍世太子を唆して王位を奪はんがために父の王を弑せしめたのである。野心満々たる太子はその惡むべき勸告に従つて、父の王を牢獄に閉ぢ込め、食を斷つて生みの母が何とかしてその夫王の生命を助けたいと盡されたにも拘らず飢死せしめたのである。

阿闍世が摩揭陀の王位に即いたのは、佛陀成道後第三十七年目であつた。提婆はこの新王の保護の下に何事も自由に我儘に振舞つた。新王の力で三十人の弓術師を雇ひ、佛陀を殺して呉れ、ば充分の報酬をすると約束した。惡漢共は喜んでこの約束を結んだが、いざ仕事にかゝらうとした時に、佛陀の威光に威壓せられ、受けた命令を果す所ではない。却つて、佛陀の脚下に身を投じ、免恕を願ひ、教を聞いて引き續いて道に入つたのである。提婆は第一の計畫に失敗して、更に第二の計畫に移つて大師を失はんと計つた。彼は世尊が、**イチヤクータ**と名づくる小山の麓を御通りになるのを待つて、上から大石を轉がし落した幸にもその石は途中小さな障碍物に打ち合つて幾つかに割れて落ちたが、その一片が佛陀の御足の指を傷つけて血を流し奉つた。斯ういふ兇惡にして憶病な計畫をきいて、弟子達は、その場所にかけて、佛陀を精舎に御連れ還り申し、今後世尊の身邊を護衛して兇猛

な手段を防ぎ奉りたいと申し上げた。然し佛陀は人間は決して佛陀の生命をとる程の害を加へ得るものではないと告げ、弟子達のいろ／＼盡して呉れた親切を謝して、銘々の棲家に還らしめ給うた。呼び迎へられた名醫者婆が繃帯を申し上げ、翌朝になるとすつかり傷も直つて居つたものであるから、居並ぶ人達はすべて且つ驚き且つ喜んだ。後又、提婆は王舎城の郊外に於て酒に狂える象を用ゐて佛陀を害し奉らうとした。佛陀が乞鉢を手にして食を求めて巡行し給ふ街道にて狂象は放たれた。然し、狂象は一見佛陀に接するや、害を加へる所ではない。佛陀のみに至つて暫らく立ち止まり、やがて膝を屈して尊敬の意を表はしたのである。これに依つて、提婆は明かにその最後の惡計にも失敗したのである。

(一)提婆達多が佛陀に迫つて佛陀の定め給うた律法よりはもつと嚴重な律法の採用を主張したといふことは諸書に記してあることであるが、これはある程度まで、その相手の異教派の比丘の行爲に倣はんとしたのである。即ち提婆達多は苦行の實行に依つて彼等異教派に對抗しやうとしたのである。佛陀から受けたドグマを改めやうとしたとは見えない。彼の宮庭の弟子阿闍世は、これまで、婆羅門の保護者であつたから、提婆が二派の行觀の差異を減じ、もつと目につかないやうにし、これに依つて、漸々と近づけて、兩教を全く混同させやうと思つたらしいのである。彼は性格が嚴峻で、佛陀の制定し給うた律法の生温さを喜ばなかつたことは事實である。それは兎も角彼には始めから嫉妬の情があつて、これが教團以外へ立たうといふ考を起したことは確かである。この踏み出しが、始めに考へて居つたよりも飛び過ぎて、彼は自分自身の教團を作り、これに依つて従弟の佛陀と同一相手の地歩を占めやうと思ふに

至つたのである。やりかけてみて、意想外の抵抗に遇ひ、佛陀の存生中は、兎ても成功し難いといふことを知つたものであるから、今度は佛陀の御身の上に種々の計畫を敢てするを憚らぬに至つたのである。佛教々團の中で、この後續いて起つた争動が、多くの場合大抵その源を律法の解釋に發し、大部分の比丘は佛陀の制定し給うたのだといふので、無暗矢多羅に固執するに對して、他の一部の比丘が多少自由に變更したその些々たる律法に關して起つてゐるといふことは注意に値する事實である。この觀察は、佛陀の死後、開かれた結集について私の記さんとする事實に依つて充分に確かめられるであらう。

提婆達多はその弟子訓練の法に於て、佛陀のそれと異なる點を有してゐた。而してこの異點がやがて後に一分派を起す本となつたのである。提婆は世尊に向つて、すべての比丘は必ず森の中の樹下に棲むべきこと。居ながらに人民の與ふる食を受けてはならない、必ず自ら難義をして出掛けて貰うた食に依つて生活すべきこと。塵芥捨場に棄てられた襤褸をつくらうて作つた衣を用ゐねばならぬこと、決して俗士の施與の衣を貰ひ受けてはならぬこと。魚獸の肉を食へばならぬこと。覆ふべき屋根のない場所へ住まねばならぬこと。斯ういふことを比丘たるもの、行持の條件として持ち出した。世尊ははつきりと彼の提言を採用せぬことを宣言し、猶靜かに異を樹て派を分つは、非常な大罪にて、これを犯せば、成住壞空の四劫の間、無間地獄に墮ちて苦しまねばならぬと教へ給うた。斯ういふ懇ろな教

にも耳を傾けず、提婆は自ら分派の危険を犯し、卑地國の訓練のない五百の比丘を欺き引き入れてガヤーシーサの精舎に住んだのである。提婆は侍者として阿難を引き入れたいと望んだのであるが、この非望は失敗した。舍利弗は佛陀の命を受け、提婆の僧團に赴き、提婆の眠つて居る時間を利用して、五百の比丘に説いて邪宗を離れ當時吠舍離の祇園精舎にゐ給ふ和合の中心たる佛陀に歸るやうにすゝめた。提婆は眠より覺めて、このことを知つて大に怒り、直に祇園精舎へ走つてこの復讐をなさんと決心した。彼は擔荷に載つて走つた。使は櫛齒の様に續いて、佛敵の寄せ來る旨を世尊に申し上げた。佛陀は靜かに宣うやう。「愛する比丘等よ、心配するな、提婆達多は、私の顔も見ねば又この場所へも來ぬであらう。」然し尙急使は飛んで、提婆達多が既に精舎の傍の池の畔まで來て暫らく樹下で憩うて居る旨を知らせて來た。佛陀は依然として恐るゝ比丘等に前の確信を語り給うた。恐るべき刑罰は今や顯はれた。提婆がその臥榻を出で、疲れた四肢を休めんために暫し立ち居る中に、恐れ戦くその仲間の眼前に、徐々として地中に沈みかけた。初め膝まで、次で臍まで最後に肩まで沈んだ。茲に至つて流石の提婆も漸やくその我を折つて、過惡を懺悔し、世尊の榮光を證認した。提婆は炎に包まれて見えなくなつて無間地獄の底に墮ちた。刑罰として、提婆

は炎の大地に蹠の深さで植えつけられ、赤熱の鍋を頭から耳朶まで頂かされ、二本の火熱の鐵棒を以て右から左、前から後ろに縛られ猶一本の鐵棒を以て、上から下まで刺し貫かれた。提婆はこのいふに忍びない状態を世界が出来て崩れるまでの大劫の間苦しみ受けねばならぬのである。然し遅れ走せではあつたが、墮獄の刹那に告白した、その懺悔の功に依つて彼はやがて救はれて、その善行に依つてアテサラといふ獨覺佛となるであらうといふことである。

阿闍世王は鶖伽と摩揭陀の二國を領してゐた。王の母は韋提希と稱し迦尸國と喬薩羅國を領する波斯匿王の妹である。阿闍世王は戰を好み、迦尸國の或る地方のことで叔父の波斯匿王と争ひ、勝つて波斯匿王を囚へた。波斯匿王は戰の利なきを知つて和議を結んで、王女のワチヘーラ・コンマーを阿闍世王に與へた。この後三年にして波斯匿王はメーッタドウッパの爲めに王位を奪はれた。メーッタドウッパは王の妾の子である。決斯匿王は阿闍世王に頼らんとして摩揭陀に奔つたがその途中で崩御した。

野心の多い阿闍世王のために喬薩羅、及迦維羅城の釋迦族が全滅せしめられたのは、佛陀成道後第四十四年、このメーッタドウッパ王(Methadonbo-Mitadho 提婆王のこと)の治世の時であつた。

佛陀は第四十四の雨期を祇園精舎に送り給うた。この雨期後王舎城に近き耆闍崛山の精舎に暫らく滞在し給うた。その時阿闍世王が吠舍離征討の意志を有するといふ評判が世間に高かつた。世尊は吠舍離の貴族等が相和して内輪採めのない内は、決して侵入者に對して敗を取らないこと、内部が敗れて來れば、直ぐに國を失ふに至るであらうと宣うた。阿闍世の大臣である婆羅門はこの語を忘れず、國母の贊成と祕密の獎勵に依つて、離車族の貴族の不和を起さしめ吠舍離の爲政者を滅ぼしその國を征服せんと企らんだ。この計畫は、釋尊入滅後數年にして遂に實現せられることとなつた。そのことは後章に至つて更に述べることとする。

Fasmāt Tathāgato bhāṣāte nirātmānaḥ
sarvadharmā nirjivā niṣpoṣa niṣpudgalāḥ
sarvadharmā iti.

このゆゑに如來は説き給へり、
一切諸法は無我なり無壽なり、
非人なり、一切諸法は非人なり
と。

『梵文金剛經。』

第十三章

- (一) 佛陀七十九歳に達し、諸比丘に法教を垂れ給ふ
- (二) 華氏城の豫言と説教
- (三) 神變を現して恆河を渡る
- (四) 娼婦菴婆波利の歸佛
- (五) 佛陀病み給ふ

- (六) 阿難陀に對する法教
- (七) 舍利弗の臨終と入寂
- (八) 舍利弗を讚嘆し給ふ
- (九) 目連の入寂
- (一〇) 佛陀、目連の前生譚をなし給ふ。

佛陀はその一生、席の温まる暇のない程、國々を巡歴して解脱を受くるに堪へる衆生に法を説き給うた。かくて、七十九歳に達し給うた。その當時には王舍城の附近に十八の精舍あつて、それ／＼多勢の比丘が住んでゐた。ある日佛陀は阿難に對して、「ニームーラの講堂に比丘等を集めよ」と命じ給うた。比丘等が集まつてから佛陀は其處に赴いて次のやうに語り給うた。「愛する比丘等よ、汝等が互に相和し、定規の會合を守つて居る間は、汝等は益々繁へるであらう。又汝等が一緒に相談して、制定なき戒律を振りまわして、他人に犯戒の責務を負はするやうのこのことのないため、汝等比丘たるもの、一分にそなはつて居るすべ

ての命令を、嚴重に守るために、一緒に會合して、主な出來事を決定し判斷する内は、汝等は益々繁へるであらう。汝等は又長上を敬し、その教に服事せねばならぬ。欲情に注意せねばならぬ。殊に淫情を慎まねばならぬ。少しく心を絞めるとその強壓の力をもつた枷の下に縛られねばならぬ。静寂と閉居を愛せよ。勤めて自らの節制を守り、又教令と儀式を守れよ。遠くより汝等の精舎に訪れて來る善き比丘を親切に待遇して談話を交へることを自分の樂とせよ。注意して自分の言行をもてあそび樂しみとすることを避け、自分に隨從する信徒の數を誇るなよ。惡しき友達を避けよ。智覺を得るために勉め勵めよ。大いなる眞理と無常と苦と空の理を觀せよ。汝等が、これらの大切なる諸點を守つて離れないならば、汝等は益々繁へるであらう。しかのみならず、汝等はこれに依つて汝等の神聖なる職業に不相當なその上野卑なすべてのものを避けることが出来るであらう。」

これらの教を説き畢つて、佛陀は阿難に命じ、諸比丘をして菴婆羅致村に行くやうに準備をなさしめ給うた。

ある平屋に滞在してゐ給うた時であつた。舍利弗は世尊の御前に出で、禮拜して申し上げるやう。「最尊最勝に在す佛陀よ、世に法の智識に於て世尊に超えるものもなければ等し

いものもありません。世尊に比べられるやうな人は今までありませんが、將來も必ずないことと思ひます。この故に私は世尊を稱讚し敬愛いたします。」世尊は答へ給うた。「舍利弗よ、汝は誤つて居らない。汝の様に佛陀の價值と智識を知る人は幸である」。世尊は更にこの大弟子の智慧を試みんと欲して語り給うた。「愛子よ、汝は如何して私に比べられるものがないといふこと、私の智慧に敵ふものがないといふことを知つたのか」。舍利弗は答へていふやう。「私は現在、過去、未來の智識は持つて居りません。然し私は法を了解つて居ります。最尊最勝に在す佛陀よ、私は世尊に依つてこの了解に達しました。世尊は自ら無限の智慧を持つてゐると仰せられました。それで私は世尊が現在も過去も未來も知り通じて御在るといふことを定めました。世尊は永へに讃えられ給ふ方であります。世尊は最勝に在し永久の光明であり、すべての欲情を離れ給うて在します。それで私は佛陀と曰はれ給ふ方にそなはつて居る性質をすべて世尊に御被せ申すのであります」。世尊は菴婆羅致村から那蘭陀の大村に入り給うた。村人は歡んで御迎ひ申し、世尊は法を説いて暫らく滞在し給うた。

〔1〕Dhamma 平屋といふは所謂佛教徒の信仰心の一種の發露で、信者、旅人、異郷の人の庇護所として、休息所として

作られたものである。これらの建物は町や村の入口や、又屢々塔の近くに立てられてある。緬甸にある平屋は非常に簡単なもので、前に建物の長さ一杯の外縁があつて、その外縁に引つづいて廣々とした室が後全部をなしてゐるのである。その外縁と、室との間には區切りはない。時には室の一方の角に葎か乾いた木葉が布いてあつて、一般人と交ることを欲せない人の庇護所となつてゐる。人民を樂しませるためには政府では全然無頓着であるが、その代りに信心深い俗人の熱心で補はれてゐる。その人々はさういふ一般の利益になる仕事をして未來の生、及びこの生にその功德の報酬を得んと計るのである。

緬甸本國に於けるこの平屋の中には、國中でも稀な美しい建物のももある。屋根の端や、前面が最美の精舎を飾るそれにも劣らない深彫、薄彫を以て覆はれてゐるものもある。多くの中、この事實はその教徒に及ぼす佛教の教條の眞實なる仁慈博愛の力を示すものである。勿論この慈善的建築の建立にも驕誇の念や虚榮の心が無いといふのではないが、建立者が宗教的感情の強い力に第一に又主に動かされてゐることは確である。

世尊は又阿難を呼んで比丘等に旅の仕度を命じ、巴連邑パッタリガマに向ひ給うた。其處にも世尊の一行は歓迎を受けた。處の人々は先づ阿闍世王が條約停結のために來れる吠舍離リフタヌハの離車の貴族を待ち受けて作つた平屋を修理し、すべて何事も用意が出来て世尊を迎へ奉つた。世尊は好く彼等の招請を受け給うた。飲む水、口を漱ぐ水、手足を洗ふ水が用意せられた。世尊は堂の中央の柱を背にし東に向つて坐し給うた。弟子達は謙敬の態度を示して世尊の後ろに坐り、人民は世尊に向ひあつて、西に面して坐つた。世尊はこれら限りなき聽衆のために

法を説き、戒律を敗るものの罪と罰と、これを守るもの、利益を説き給うた。世尊は宜ふやう、**ダラカ**よ、戒律を破り、もしくはこれを守るに怠るものは、その幸福の漸次に衰へ、善き性情の亡び行くを悟るであらう。生きて疑惑の悲しい状態サマにさすらひ、死がこの世の幕を閉ぢる時には墮獄の苦を受くるであらう。これに反して、戒律を忠實に守る人の運命は富と樂とを開き譽ある名を得せしむるであらう。彼は貴族、婆羅門、比丘いづれの仲間にも歓迎せられ、疑はその心中に起らず死は却つてその人の天界の門を開くであらう。人民はこの説法に心酔して歸るを忘れ、彼等が世尊に敬禮して右に繞つて退去したのは餘程遅かつた。**(ダラカ**については索引をみよ。)

今佛陀が群衆に説法し給ふ中に、私共は、佛陀の御弟子の仲間と、また單に聽衆と呼べるべきものとの明かな區別を見るのである。後者は**ダラカ**(*Darakka*)即ち説法を聴く俗人の意味の**ダラカ**の名で呼ばれてゐる。**ダラカ**は完全に道に入つたのでなく、従つて教團の一員ではない。**ダラカ**は優婆塞とも違ふ。優婆塞は教法の單なる聽衆ではなく堅き信者、熱心に戒法を守る人である。**ダラカ**はこれまでは進まず、教法を聞き初め信じ初めたのである。それで既に佛陀に對して或る信仰を有し、その教の下にあるのであるが未だ公然たる弟子とはならないのである。

佛教を奉ずる信仰の報酬は自然的のものと超自然的のものとある。富、幸福、名譽は教法を忠實に遵守する人に約束せられ、又、その人は信仰に依つて佛教のすべての教訓にしっかりと従ふから疑惑を離れ、死後天上界に生れるのである。教法を犯すものは貧と耻と禍とに附き纏はれ、動搖の心に疑惑起り、遂に地獄に墮するのである。この地

獄といふ報の苦痛を受ける場所は佛教書籍に委しく記されてあるが、そんな説明は、佛教の表面を知らうとせずその根基をなす構成の部分を知らうとする人には必要のないことである。

娼婦菴婆波利と會話を交へ給うたこと、女の布施心と佛陀及び佛弟子に對する布施と、それから世間的に見れば、佛陀が何れの點からも彼の女よりも深く心を掛ければならぬ公子達を簡んで特に彼の女に供養を許し給うたことなどを讀む人は、誰れしも福音書の罪の女の入信を思ひ起すであらう。

阿闍世王が同じい場所に**バータリボット**即ち**バーダリプトラ**を建設したのはその翌年であつた。このことを預告して佛陀はこの村が大きな市となつて、澤山の市の中でも殊に名高くなつて、閻浮提の諸國から多くの商人が群り集まるであらうと宣うた。同時に又佛陀は大きな災難がこの市の上を下るであらう。内亂、火災、恆河の汎濫が引き續いて起つて市を全滅せしめるであらうと豫言し給うた。

早朝佛陀は恆河の南岸に行いて二三人の婆羅門に法を宣説し給うた。婆羅門等はこれに酬いて供養し歸敬し奉つた。世尊はこの大河を横ぎらんがために船を待ち受けて居給ふやうに見うけられた。人々は船を探すものもあれば、筏を用意するものもある。人々がかくして必要な準備をしてゐる中に、世尊は兩手を擴げて、すべての比丘を連れて早や對岸に達し給うた。船や筏を探して居るものゝ方に向つて、「欲情の海を越え互るものは阿羅漢で

ある。大きな義務を行ふはこれに依つて欲情の海を渡るべき船筏である。河を渡らんとするものは種々の木を結び合せた船や筏の助けを得ねばならぬ。然し聖道の智慧に依つて阿羅漢となつた人はすべての欲情を弱め、姪情の旋水ウヅマヅより身を脱する。彼は又船や筏の助けを借らずに河を渡ることが出来る。世尊は阿難に告げて拘利の村に向ひ給うた。その村にて阿羅漢の榮光ある壯嚴の特權を比丘等に語り給うた。世尊は更に進んで那地迦ナヂカの村に入り給うた。阿難が、遮樓比丘サハ、難陀比丘尼ナンダの死して何處に行いたであらうかと世尊に問ひ奉つたのはこの村である。世尊は遮樓比丘は欲情を征服して涅槃に入り難陀比丘尼は梵天界に生れて、涅槃に入り、この世界に歸らないと宣うた。

佛陀は弟子達を卒めて吠舍離國に赴き、美しき椶樹林に住し給うた。かくてこの林の中で佛陀は熱心に弟子達に教へて、常に注意深く、嚴肅なる反省と冥想とに従はんことをすゝめ給うた。時に吠舍離國に菴婆波利アムババと稱する名高き娼婦があつた。菴婆波利は、椶樹の繁れる大きな快しい森に近い美しい場處に住うてゐた。菴婆波利は他の人々と共に世尊の御教をきかうと椶樹林に出掛け、教をきいて大に感動して、世尊と御弟子達とを翌日自第に招待申し上げたいと願うた。世尊はこの招待を快く受け給うた。その同じ日、世尊は吠舍

離の王子達にも教を垂れ給うたが、王子達も亦、翌日世尊の來つて食を受け給はんことを願うた。世尊は菴婆波利の請を許し給うた後であるので、その招待を斥け給うた。公子等は非常に華麗な富裕な装束で來た。端麗なる容姿は宛然天人の様であつた。然し世尊は彼等の上に落ちかゝらんとして居る衰亡おとろひと禍惡わざはひとを豫想して、弟子達に對して見る目眩しい程の事物でも、その性質に滅亡を宿せる虚化のものを心底より厭ふ様にとすゝめ給うた。公子達は、世尊が娼婦の請を許して自分達の願を斥け給うたことを大に不満足に感じた。翌日世尊は弟子達を卒へ、椽樹林に赴き給うた。食事の後に、菴婆波利はこの林を世尊に献上し、世尊は心よくこの森を受け給うた。

この場所に暫らく留まり給うた後、世尊は竹芳エウガクの村にいたり、第四十五の最後の雨期を過し給うた。世尊はこのところに弟子達を集めて、語り給うた。「私はこの場所で雨期を過さうと思ふが、御前達は近所の好き／＼の所へ行つてよろしい」。かく世尊が暫らく弟子達とわかれ給うたのは、この村の小さいのと食を得るに困難であるからである。近間の地方には精舎が澤山あつて、生命をつなぐに必要な物が豊かにあるのであつた。然し世尊は弟子達に餘り遠くへ離れることを許し給はなんだ。それは一には、世尊自ら十月内に涅槃の

雲に入り給ふを知り、且つ毎月弟子達を集めてその顔を見、最後の教を垂れ給はんがためであつた。

この場所に滞在し給ふ間に、世尊は劇しい病に犯されて長い苦みを嘗め給うた。然し弟子達も居らず、且つこの場所が、世尊の最後の入滅の地でないことも知り給ふものであるから、世尊はその威神力に依つて、病氣に打ち勝つて、暫らく三昧の境に憩ひ給うた。その三昧より覺めて、平素の力と元氣とを回復し給ふやうに見えた。世尊がいつもの通り慣れた旅に上り給はうとして精舎を立ち出て給うた時に、阿難は世尊の御前に出で、世尊の病み給ふときいて皆のものゝ感じた深奥な悲哀を申し上げた。「世尊、私はあなたが病み給ふをみて、頭をもたげることの出来ない程、息することの出来ない程に感動しました。私は常に世尊が今一度私共皆のものに法を説き給ふまで涅槃に入り給はぬといふ希望を抱いて居りました」。世尊は答へ給うた。「阿難よ、比丘等は何故さう私にばかりかゝはつて居るのであらうか。私が説いて來たものは内外共に秘密がない。今迄の法の外に猶秘して説かない法があるといふやうに私を見て居るのならば、私が彼等に法を説くは凡て無効である。私は今や非常に老いた。八十になつた。私は丁度殆終修膳して漸やく原形を持つて居るこはれ

かけた古い車のやうなもので、この身體を作つて居る組立は三昧の力で漸やくに持續してゐるのである。阿難よ、私は沙門果のことを思ふ毎に心に喜悅を感じる。沙門果はこの世界の禍惡を離れ、有情をして、この世界の目に見える物質的な事物から自由ならしめ解脱せしむるものである、我が弟子は、我が教法のつく限り自らに頼り、法に歸依せねばならぬ。他に歸依すべきものがないからである。比丘等は熱心な注意と深き反省と、眞の智慧とを以て、自ら欲情と瞋恚の煩惱に打ち勝ち、自身を組み立て、居る身分しんぶんのことを默考せんとする時には、眞に自身に凭らねばならぬのである。

これが世尊の阿難に與へ給うた教であつた。

竹芳の村に雨期を過した後、前に用ひた道に依つて舍衛國に歸らんと望み給ひ、やがて舍衛城に到つて、祇園精舎に入り給うた。大弟子舍利弗は乞行の後、佛陀に平素の御給仕を申し上げんと座を掃き蓆を擴げ御足を洗ひ奉つた。

(一)この場合、舍利弗の行つた行爲は、佛陀に對する深き尊敬を口でいふよりもつと充分に顯はしたのである。舍利弗は目連と共に教團中の主要な人物で、第一階級に屬し、智慧精神の所得に於て又その超え勝れた性格に於て、佛陀に次ぐ人である。こゝにいふ高い地位にも拘らず、師に對して最も卑しいつとめを踏踏なく行つたのである。佛陀の群を抜いて殊勝に在すといふ考が自分の功德などと思はせず、比類なき智慧を遺憾なく讚美せしむる様にした

のである。それで卑しい弟子の如く、佛陀に事へることの内心の満足が、自分の響高い所得を顧みないやうにしたのである。この弟子の偽りなき謙虛かその人の内心の純粹の價値の最大の證明となり、師に對する尊敬の最高の度を示すのである。

佛教々團に於ては、長者、長老は若し人達に細かい給事を受けるといふ規則があるのである。この律法の制定者即ち佛陀は、一方には教團に尊敬を與ふると共に他方には食欲その他の世情を防がんがために、教團の人々は隨從者(俗人或は僧)の其前に差し上げたものでなければ食物でも衣服でも手に觸れたり用ひたりしてはならぬといふ嚴重なる規則を設け給うたのである。それで頭や手や足を洗ふために、又は供養のあつた場合に食事が終つて口を漱ぐために水を要する時には、若し弟子は食皿の載せらるゝ臺に水の器を載せて比丘の前に捧げるのである。物を供養する時もその通りで、臺の上に載せて長者の前に近づき、膝をつき、膝行して、その供養物を長者の前に置き、手を額の所で合せて禮拜して兩手にその供養物を取り上げ、尊敬の意を表して、上半身を屈めて、捧げるのである。長者はそれを受けると前に、「如法であるか」と問ひ、如法であるといふ答を得て、それを受けるとか、身の近くに置くやうに命するのである。これに乖けば罪であると定めてある。比丘は人民の前で、この稍々むづがしい作法を上手にとり行ふ。その場合には尊嚴莊重な表情を示すので、私はアカトと呼ばれてゐる儀式を見る毎に、その莊重な表情に愉快を感じたのである。この習慣は非常に古いものに相違なく、或る點までは東方亞細亞の國民の振がふり入つたことであらう。この規則は律書に委しく載せてあつて、佛教の僧侶は注意深く遵守したのである。これは、律制を創始し宣傳し布告された精神と著しく善く一致するのである。この場合制定者が、この規則を設けた目的を顧みず、たゞその規則の骨のみ見る人は淺薄な觀察者となるであらう。不幸にして、こゝにいふことはよくあり勝ちで、我々がある習慣を輕侮し嘲笑する場合は我々がその習俗に親しくないといふことから多く起るのである。この場合常識は我々に、そ

の規則の顯はれた制度と、それを設けた人の目的とに照して判断せねばならぬことを教へるのである。

かくて自分は趺坐して暫らく禪定に入り、續いて禪定より立つて、自ら謂ふやうに「過去世に於ては、佛陀自ら最初に涅槃に入り給うたであらうか。又その大弟子達が師に先つて涅槃に入つたであらうか」。舍利弗は思惟の結果、大弟子が必ず師に先ちて涅槃に入る慣習であることを知り、自分の身の上のことを觀察して、この後七日までの壽命であることをも知つた。茲に於て舍利弗は先づ、何れの場處に於て塵世を離れて涅槃に入るべきかを思惟し、母のことを思ひ出して、自らいふやう。我が母は七人の沙門果の聖者を此の世に生み出されたが、自らは未だ佛法僧の三寶に歸依してゐられぬ。我が母は涅槃への四道を了解することの出来る人であらうか。それは出来る、そんなら誰が我が母に法を説くべき人であらうか。それはいふまでもなく、この聖務は私がなさねばならぬのである。行かう、行いて法を説いて、我が母をして誤つた信仰を捨て、正しき信仰を抱かしめやう。私が生れたその室が私の涅槃の道に赴くべき場所であらう。今日私は生地に行かんがために世尊に御暇乞を申さう」。かくの如く決心して舍利弗は忠實なる弟子の均頭チヤンドウを呼び、五百の比丘をして私に伴つて來るやうにせよ」と命じた。均頭はかしこまつて出で、比丘等にいふやう。「大舍利弗は

那蘭陀の村に行かうとして御出でなされる。御伴をする用意をなさい。銘々のものを準備して鉢と衣を御持ちなさい」。五百の比丘等は直にその命令に應じて師に従へ行かんと準備をした。舍利弗は自分の室のものをよろづ整頓して、立ち上り、その日頃常に坐り通すを常とした場所を熱心に注意して眺めまわしてさていふやう。「これが、私のこの場所を見る最後である。私は再びこの室に入ることはない。」かくて舍利弗は五百の比丘を伴へて世尊の許に至り、恭しく大師に先ちて行いて涅槃に入り、生死の渦を離れたいといふ願を申し上げられた。世尊はいかなる場所で涅槃に入らんと欲するかを問はせられた。舍利弗は、「摩揭陀の國、那蘭陀の村私の生れました室で」と答へ奉つた。「舍利弗よ、汝ひとり、汝の涅槃に入るべき時を知つて居る。私の弟子達の中で汝のやうなものはないばかりでなく、容易に得難いのであるから、私は今、汝が今一度比丘等のために法を説いて呉れることを願ふのである」。舍利弗は佛陀が自分に神通を示すやうにと望んでゐ給ふを知つて、世尊を禮し、バルム樹の高さまで空中に上り、下つて世尊を敬禮し、かくて七返次第に倍の高さに上つて、最後に暫らく空中に留まつて、比丘や人民の群衆に向つて法を宣説し、下つて世尊に精舎の中に入り給はんことを請うた。佛陀はその願に依つて、金剛石の間柱のある室に退

き給うた。舍利弗は四方を拜して、扱ていふやう。「最尊最勝に在す世尊よ、私は過去百千世の昔、アノーマダツシー佛の許に於て、相續いて出世し給ふ幾千の佛陀に見え奉りたいといふ願を立てました。私の願は許されました。世尊よ、私は今あなたを思ひ奉つて居ります。而してこれは私があなたの御前にあることを喜ぶ最後の時であります。凡ての有情に敬はれ給ふべき佛陀よ、私はやがて生の渦の中から逃れることが出来ます。これは私の最後の生であります。この私の世尊に對する敬禮も最後のものであります。私の生の終りは眞近に來て居ります。七日の後に、重い荷を背からおろした人のやうに、私は私の重い身體といふ荷をおろします」。舍利弗は組み合せた兩手を額のの上まで上げた。その手の十の指から光明が流れ出でた。舍利弗はその場所で佛陀を敬禮し、面を世尊に向けて、靜かに退き世尊の御顔の拜める間敬禮した。いふでもなくこれが最後の時であるからである。いよいよ世尊の御すがたの見えなくなるに及んで御別れをした。その時大地は烈しく震うた。佛陀は舍利弗をとり巻いて居つた比丘達に語り給うた。「愛すべき比丘等よ、汝等の法兄は今や立ち去らうとして居る。暫らく彼に伴つて行け」。人民も亦舍利弗の去らうとするをきいて、後を慕うて、むらがり集つて、互に語るやう。「大舍利弗は佛陀の御許を離れて、涅槃に

入らんとして居る。大舍利弗の我等と共にあり給ふも暫らくの間であれば我等も大舍利弗の御後を慕うて行きましよう。彼等は手に／＼花と香とを取り、髪を振り亂し、涙とためいきの叫びをなしつつ走つた。人民は舍利弗に逐ひ付いた時にいうた。「舍利弗尊者は何處に居給ふや。大沙門よ、あなたは佛陀を離れて誰に會はんとし給ふのでありますか」。舍利弗は人民をこの上ない憐れみの心を以て眺め、長く續いて來ないやうにと靜かにさとされた。いつまでも佛陀及びその比丘等を心に守るやうに教へられた。七日の旅の終るまで舍利弗は人民のもたらした愛情と親切とを賞揚讚美しつゝけたのであつた。

この大沙門が那蘭陀の村の入口に到着したのは日の將に暮れやうとする時であつた。彼はその場所から近い榕樹の下に暫しの憩ひに行いた。その時優波離婆多と名づくる彼の甥なる若者が舍利弗を認めて、進み出で、敬禮した。大沙門は優波離婆多にいふやう。「お前の祖母は家にゐられるか」。家にゐられる旨の答をきいて更にいふやう。「行いて祖母に語つて、私のために私の生れた室を整へ、私の伴うた五百の比丘のためにある場所を用意して下さい。願うて呉れ。私はこの村に暫らく留まつて直に祖母の家へ行くであらう。若者は急いで祖母の家に行いて語つた。「祖母さん、叔父さんが見えました。村の入口に居られ

ます。祖母は問うた。「獨りで来たのか、澤山の連れを連れて来たのか。何のために来たのであらう」。若者は大沙門との問答を一具始終物語つた。舍利弗の母又一バ舍利は自ら謂ふやう。「我が子は年若の時に沙門となつたのであるが今は老いてその事を止めやうと思ふのであらう」と。然し舍利は我が子のためにその望みの室を清め、隨從者のために廣き場所を用意して置いた。

夕ぐれ大弟子は隨從者と一緒に、母の家に行いた。大沙門は母の用意して呉れた室に上り、その中に息んだ。彼はすべての比丘を去らしめ、獨りに残つた。比丘等が引きとるや否や、非常に烈しい苦痛が上つて来た。非常に澤山の血を吐いて、皿を以て受けたが、收め切れずに外へ溢れ出した程であつた。老いたる母はこの恐ろしい光景に打たれて、敢て近づくことが出来ず、退いて自分の室に入り、うなだれて戸に凭りかゝつた。その時帝釋を頭とせる四天、四梵天が下つて来て、その病を見た。大沙門は諸天を退かしめた。彼の母は諸天の來往して我子の沙門に敬禮を拂ふを見て打ち驚き、室の戸の側まで行いて忠實に使ふる均頭を呼び出し、來往者のいかなるものなるかを尋ねた。均頭は帝釋並びに諸天が來つて師の病を看護り、大沙門と共にあることを喜んでゐる旨を物語つた。

暫くして均頭は舍利弗に向つて、母上が病床を訪ねたいと望んで居る旨を告げた。舍利弗は適當の時でないかと答へたが、母に向つて、何故に時ならざるに遇ひたいと覺召すかと尋ねた。母はいふやう。「愛する我が子よ、私はお前のいつも變らぬなつかしい顔がみたいと思つて來たのであります。先程お前の處へ見舞に來た御客様方は誰方でありませうか。舍利弗は梵天、帝釋及び諸天である旨を答へた。母から「お前はそれらの諸天よりも尊いのであるか」と問はれて、舍利弗は遠慮なく、それらの誰よりも勝れて居る由を答へた。母は自ら思ふやう。「もし我が子にして斯くの如く勝れて居るとしてみると、佛陀はいか程勝れ給ふ方であらうか」と。母の心は喜びに漲つたのである。

(一)現今のバラガオンに當る那蘭陀の村は大弟子舍利弗の生地である。舍利弗の同侶目連の生地は那蘭陀の南西約一哩半の拘利多^{コリタ}の村である。支那の巡拜者法顯師に依れば那蘭陀は王舍城の北一由旬にあり、菩提樹から七由旬を隔て居る。カンニングハム氏の實測に依れば一由旬は七哩に當るから、菩提樹からは四十九哩を隔て居るのである。この那蘭陀は全印度に有名なる佛教教學の地であつた。現今、その地は全體、古代の貯水池や美しい彫刻を有する大規模の廢墟の岡で覆はれてゐる。昔は一大寺院とそれよりも少し小さい五個の寺院とか一圍ひの中に圍まれてあつたので、今は幅四百呎で長さ千六百呎も南北に走つてゐる高い圓錐形の一系列の岡が古代の寺院の廢墟を物語つてゐるのである。その圍ひの外にも數多の寺院がある。カンニングハム將軍はこれらの建築は紀元四百二十五年から六百二十五年までのものと定められた。いろ／＼の證據の擧げられた中、最も決定的なものが一つある

それは、佛教の歴史に有名な場所はすべて訪問して、それを悉く細かい注意を以て記述した法顯師が那蘭陀を舍利弗の生地と曰つた丈で、一言も寺院のことに及んでゐないのに、七世紀の始めに同處を巡拜した支婁師は、壯麗な寺院に就いて記してゐるからである。支婁師の記述に依れば、その中の主な建物は大きさも高さも佛陀伽耶のそれらに劣らず、百七十呎から二百呎の高さに達してゐるものもあれば、最も大なるものは三百呎に達してゐるものもある。貯水池の數と大きさと眞に驚くべきもので、北東にある二個の貯水池は長さ一哩に及び、南の貯水池は半哩に及んでゐる。

以上のことからして、こゝにいふ推論が出来る。紀元五六世紀の間、佛教は摩揭陀國即ち今の南部ベハルに隆盛であつた。このことはその世紀に那蘭陀と佛陀伽耶とに最美にして最大の寺院僧院が作られたといふことで知れる。基督紀元の初三世紀の間は、佛教は、その國の統治者の佛教徒に示す好惡の情に従つて運命を異にし、著しい盛衰の變化があつた様に見える。この盛衰の繼續は佛教が中部印度の住民の胸の中に深い根を下さなかつたことを示してゐる。何故ならその運命は國王の意見に頼り、その出來心の具合に依つてゐたからである、且つ又恒河の北岸の諸國、吠舍離、舍衛城、迦維羅城等、佛陀の不斷の傳道を受けた國々でも、法顯師の巡拜した當時即ち五世紀の初めには佛教は衰へ、僧舎は荒廢して人なく、制多もひどく荒れ果てゐたのである。或る場合の如きは異教者即ち婆羅門が、佛の僧舎に住してゐたりした。この豫期しない光景は痛く支那の巡拜者の心を悲しませしめた。支婁師以後の那蘭陀や佛陀伽耶の壯麗な寺院がいか様になつて行つたか、そのことを示して呉れる八九世紀の支那巡拜僧の記述を有さないことは遺憾である。

舍利弗は今や道を語るべき時の來たのを知つて母に語つた。「母よ、我が大師の生れ給うた時と、無上覺を得たまうた時と、最勝の法を宣説し給うた時とに一萬の世界が震ひまし

た。徳と智と聖果とに於て我が師に超え勝れた人は一人もありません」。舍利弗は猶進んで法を説き、佛陀に關するいろ／＼の逸話を話し出した。母は心中の喜悅に堪へず、「愛する子よ、何故にお前は斯ういふ勝れた御法を早く私に説きまかせて呉れなにか」と申された。この教の終つた時に、母は豫流果を證つた。舍利弗のいふやう。「母よ、私は今始めてあなたが私を負ひ、育て、教へ給うた御恩に報いることが出來ました。母よ、願くばこの室を去つて私一人を残して下さい」。

舍利弗は忠實な均頭を呼んで、時を問ひ、夜明に近いといふことをきいて、身を起し、命に依つて集れる比丘達に向うていふやう。「四十四年の間、お前達は善く私と一緒にゐて呉れた。その間に私がお前達の一人にも罪を犯したことがあつたならば、茲に恕しを乞はねばならぬ」。比丘等はみなこれに答へた。「大師よ、私共は影の形に添ふが如く常に大師に従ひました。私共は一度も大師について快からぬ思ひをしたことがありません。私共こそ大師の寛き恕を請はねばならませぬ」。

舍利弗が母の住家へ歸つて、その生れた室に入つたのは夕チヤオンダ月(十一月)の満月の日の夕暮であつた。その夜、烈しい苦みに襲はれたが、曉に近づいて座具を敷き、右脇に

臥し、禪定に入り、初禪二禪三禪四禪を経て涅槃に入つた。涅槃は欲情と物質とから完全に脱する状態である。

涙に洗はれた舍利は悲哀と憂寂の情に堪へず、舍利弗の骸を眺めて叫ぶやう。「あゝこれが私の可愛い息子であらうか。この口はもう一言も喋ることが出来ぬ」。立ち上つて、又死骸の足の下に轉び、嘆息とすゝりなきとに想を絶ちて、「あゝ、可愛い子よ、私は御前もつて居つた完全殊勝の徳の寶を知ることが餘りに遅かつた。もし知つてゐるなら、私は一萬以上の比丘等を我が家に招待して食を施し三領の衣をさへげたであらうのに。私は比丘等の宿り給ふ精舎を百も作つたであらうに」。夜が明けた。舍利は熟練な鍛冶に命じて自分の匣を開かせ、數多の黄金を出して、命じて、五百の家根ある小屋と多くの制底を用意させ、外部はすべて金葉を以て覆はせた。帝釋は多數の天を送り來り、諸天も亦宗教上の裝飾をあまた作つた。町の中央に、高い四角の塔が立てられた。その中央に、高い尖閣塔が非常な高さに天を摩し、その周圍に無數の小塔が圍繞して居る。人天共に、この尊き骸に尊敬を表さんと競ふて居る。少しの隙もない程つめかけた群衆は、各々この非常な出來事に對して格段の尊敬と歡喜と悅樂とを示さんと競ひつとめたのであつた。

舍利弗の乳母の離婆多是三つの黄金の花をもつて、聖者の骸にさへげた。その時丁度帝釋天は無數の天に圍繞せられて、すがたを顯はしたので、群衆はこれを見て天人のために餘地を作らうとして混雜して、離婆多はその混亂の中に倒れて死んだのである。然し彼の女はその徳に依つて三十三天の天女と生れ、この上ない熟練より成つた最上の物質を以て飾り立られて居る壁龕に住み、三ガラーの背高のある身は黄金の如く輝き、衣服は豊かに美しく華かにこれまで見られないものであつた。

翌日離婆多是、その光榮の座を離れて、多數の人々が骸を圍繞つてゐる場所へ來た。彼の女は天后の嚴な尊い顔貌で群衆に近いた。人々はこの天人達の誰よりも勝れた彼の女を、さながら釘づけられた様に見入つたけれども、誰であるかを知ることが出来なんだ。彼の女の美しさと嚴かさにと打たれて、人民はたゞ押し黙つて讚美してゐた。離婆多は人々にいふやう。「誰も私を知らぬといふはどうしたのだらう。私は大舍利弗の乳母の離婆多である。私は三葉の黄金の花を作つて、大沙門の骸に供養し奉つた功德で今日の榮光をうけたのである」。彼の女は進んで長々と徳業を行ふことの大利益を説いた。彼の女は大沙門の骸の置かれた石碑の上に立ち止まつてゐたが、地上に下つて、三度敬禮しつゝ、骸をめぐる、

次で三十三天に還つた。

七日の間引き續いて、いろいろの歡喜と舞踊と快樂とが引つきりなしにこの尊むべき聖者の死骸の尊敬のために行はれた。葬の薪は香木から作られた。その香木の上に、更に高貴な芳香のある香水が振りまかれた。この香木が九十九キユピットの高さに積み重ねられた。その上に骸が乗せられて、花と燃焼物もゆるものを組み合せて出來た線を以て火を放つたのである。この葬の式は終夜行はれた。その間尊い法が説かれた。阿那律は香水を以て火を消した。均頭は注意深く且つ敬虔に、遺骨を集め、扱扱いふやう。「私はこれから、この遺骨を以て世尊の御許に參り、世尊の御前にさげ奉らうと思ふ」。友の阿那律と共に、遺骨、乞鉢、座具を取り、世尊の御許に歸り、この大弟子の臨終の一具始終を物語つた。

(一) 緬甸に於ては、死者のあつた場合に、樂師を呼び寄せる慣はしになつてゐる。樂師は幾人が銘々の樂器を手にして、直に遣つて來て、その屍を火葬場に移すまでの廿四時間内、引き切りなしに樂を奏する。親族友人知己の人々は皆集まつて來る。表面は不幸の家族を慰めるといふにあるが、事實は、こゝにいふ場合に行はれる愉樂を分ち味はうといふにある。奇妙なことであるが、何の來訪者の胸の中にも死といふ觀念は起つて居らない。たゞに死者の運命を氣の毒がらぬといふ許りでなく、死者のことは思ひ出しもしないのである。もしこの場合、其の場處に屍がなかつたら、又折々時を隔て、年寄の女達のするしきたりの叫び聲や泣き聲がなかつたら、誰しもこの人々のこゝろして集ま

つた所以を想像し思ひつくことが出來ないであらう。

多少位置も高く富な家族の不幸であると、葬式は次の様に行はれる。先づ僧侶に布施として送る贈物を調べて僧侶を招待する。僧侶は施物の多寡に應じて多ければ多人數、少なければ小人數で來る。してその家から列をつくつて、火葬場或は埋葬場に練り込んで行く。先頭には黄衣の僧が廣い棕櫚の葉の團扇をかついで、弟子達を引きつれて行く。其の後に二列になつて布施物を運んで行く。一方は男、一方は女で互に離れて距離を取つて進んで行く。其の次が棺で、太い棒の上へ乗せて六人か八人で肩れて行くのである。棺の前か或は時としてその兩側に樂師が列んで、道中引つきりなしに樂を奏する。棺の後に親族友人の男子、その後には女達が一番の美衣を纏うて進む。棺は美々しく飾られ竹か棒で六人乃至八人の若い壯健な男の肩に運ばれて行くのである。道中は不自然な歡笑が許されて、普通火葬場までがやゝ騒々しく、棺をかつかう人々やその友達は、おかしな身振をしたり踊りまわつたりして、棺が落ちやしまいかと思はれる位である。火葬場は大低町の外、大きな塔の近傍にある。柴堆は至極簡單な構造で、初め二本の丸太を八呎隔て、平行に置いて、その次にそれに直角に、六吋乃至八吋の距離に丸太を並べ、その兩端が初の丸太に乗る様にし、それから順次に積み重ねて、三四呎乃至五呎の高さにする。さうして棺をその上に置く、可燃焼物に火を付けて、柴堆の下からさし入れ、直ぐ柴堆に火を移す。柴堆は一團の炎火となつて、盛んに燃え立てる傍觀者は談笑してせわしさうに火を煽り立てる。僧侶は近くの小屋に退いて、佛陀の教法の幾節かを反覆して誦する。それに飽くと、弟子達に命じ、施物を受け取らせ、自分の平和な住屋へ歸つて仕舞ふのである。多くの場合には僧侶はこのぶつ／＼いふ祈禱の面倒をも避けて、施物をもつてさつさと歸つて仕舞ふのである。

火は消えてから、灰の中を丁寧丁寧に探して、極近親のものだけ、その遺骨を拾ひ、塔の近くで、その目的で掘つて置いた穴の中へ埋めるのである。

真まことい生活向くらしむきの人々はこの葬の式を上げる迄に、七日間も家に止めて置くのである。毎日、殊に宵に樂師を招いて、一夜中樂を奏させる。家は始終、歡笑の目的でやつて来る人々で一杯になる。種々の堵事をすることもあれば、茶を飲み、檳榔子の葉を嚼んでどさぐさしてゐる。その中でも年老いた人達は時々、釋尊の前生に関する物語を讀んだり聞いたりする。

こゝにいふ具合で、死者に敬を致し、その家族を吊慰する、この仕方は非常に失費を要し、大低の家では限りある財産として過大の支出を要するのであるが、相互に助け合ふ精神で、この場合の困難を濟ふのである。この場合、訪問者はすべて、分に應じて、その家の主人に幾らか金圓を贈る。その金額は比較的少額ではあるが、何にせよ數多い訪問者であるから、よせて見ると莫大の額に達して優にその場合の失費を辨することが出来るのである。この任意に幾らかつゝ香資を贈る習俗は別に誰れもの懐中を痛めないで、一家族をしてその助力がなければ往々破産に傾する程の寛容を見せしむることが出来るのである。

この死屍を火葬するといふ習慣は、印度、錫蘭、尼波羅、緬甸、暹羅、カムボヂヤ等に行はれてゐる。支那は佛教を奉ずるに拘らずこの習慣を採用しなかつた。印度及び東方亞細亞に住む回教徒は、埋葬の習慣である。佛教徒は印度教からこの火葬法を採用したことは疑ひない。

均頭は大舍利弗の幼弟である。この尊い遺骨を佛陀に捧げ奉る名譽はこの人のものであつた。然し彼は精舍に到達した時に獨りで世尊の御前に出ることを好まなんだ。彼は先づ親しい友の阿難の許に行いて、いふやう。「私の兄の舍利弗は涅槃に入りました。茲にその乞鉢と座具と遺骨があります」。一つ一つこれらの尊い物を阿難の前に出した。阿難は

均頭を伴いて世尊の御前に出て、御足の許に、これらの大弟子の遺骨と乞鉢と座具とをさへげた。世尊は右手の掌を以てその遺骨を受け、すべての比丘を呼んで、語り給うた。「愛する比丘等よ、これは數月以前私の前に神變を示したあの人の残りの全部である。彼は清白の貝殻の如き涅槃に入つた。彼は一阿僧祇劫と十萬世界の成壞劫の間、功德を修して來た。愛する弟子達よ、彼は他の諸佛の如く法を説くことが出来る。彼は同朋を得るに巧にしてすべての人民は皆彼に教を請はんとしてついて歩いた。私を除いては十萬世界に彼に及ぶものはない。彼の智慧は大にして愛すべく、心は敏くして洞察力に富んでゐた。彼は欲望を止むる術を知り、乏しきを以て満足してゐた。彼は隱遁を愛し、烈しく惡行を斥けた。愛する子等よ、舍利弗は比丘とならんがために、凡ての浮世の快樂と満足とを抛り出したのである。彼は我が道を弘むるに熱心にして、大地の如き厚き心を持つてゐた。彼は又角を折られた牡牛のやうであつた。我が愛する比丘等よ、今一度我が賢き兒、舍利弗の遺身をみよ、佛陀はかくして五百句を以てこの名高き死者の徳を讚美し給うた。

(一)勝れた人が亡くなった場合に、その人を讚嘆する目的で葬の演説をするといふ習慣は非常に古いものである。聖書に依れば猶太人の間にもこの習俗があつたことを證明せられる。この佛傳には、この死者を追憶して讚嘆する例

は屢々見受けられる。この場合、佛陀は名高い舍利弗の異常な功勞と非常に勝れた智徳を讃美する名譽を誰にも許さず自ら擔ひ給ふたのである。然し佛陀は、何十年の間一緒に住んで、こなひだ別れて行つた許りの勝れた弟子の殘して行つた全體である遺骨を、集つた比丘達に示した時には、單に讚嘆するといふよりはもつと高い目的あてを持つてゐ給うたのである。誰も想像しうる通り、「この世に永劫なものは何もなく、すべて遷流無常のものである」といふ平素説き明された眞理を示すに、この遺骨を人々の眼に見せるといふこと程有効な手段はなかつたのである。嚴かな佛陀はこの場合心優しい阿難陀が理に反つた悲に沈んでゐるのを見て、和に叱り給うた。無常の法則は私共の環象にすべて行き亘つてゐるのだから、私共は親愛なものからいつても離れる準備をして置かれねばならぬ。この場合悲哀に沈むは無用のことである。賢き人の所置としては最も不似合なことであるといふのが釋尊の御語であつた。

舍利弗の追憶のためにその徳を永遠に傳へんがために、佛陀は、彼の入寂を聞いたその地點に塔を立てるであらうと仰せられた。塔といふのは緬甸に於ては一番ありふれた宗教的の紀念物である。町の近くの少しく小高い處には何處にも發見せられるものである。精舎の境内には必ず塔が建てられる。緬甸に於ける唯一の清淨な宗教的建築である。此國の旅行者は誰でも、とある町や村に近いて、丈の高い椰子の樹や、奇麗な檳榔子の森や、壯重なタマリンド、マンゴ樹、緑の深い鬱葱とした若葉をつけたチャツクなどの樹々の美しい森の胸からして、ざら／＼した渡金の冠を頂いた白い圓錐形の塔が幾つも高く低く見え出す時には、非常に愉快を覚えて、何ともいへぬ樂しさを感ずるのである、この紀念の塔が大きな場合には四方の各面に壁龕があつて、其處に跏趺の佛像が飾られてゐる。これらの塔の大きさは容積に依つて大變に違ふので、敬畏のものから、あの偉大なラングーのダコンの塔の程度まで種類があるのである。

その徳の高く異常な上達を得た聖者の遺骨の上に塔を建立するといふことは、佛教の創立と同時に非常に古い

のである。これらの塔は圓錐形にある種の裝飾をめぐらした純粹の墳かぶである。この種の裝飾は緬甸の宗教的紀念物には凡て發見せられるものである。國王はその冠に、又その宮殿にこの塔を用ひてゐられるが、これはその起原を印度からとつたものであることは直ぐに解る。この閩浮洲を全領するといふ轉輪王といふ大王はその死後建塔の名譽を擔ふものであるといふのが、佛陀の意見であるが、それに依つたものであることは明かである。

佛陀のかくの如く舍利弗を讚嘆し給ふをきくや阿難はやさしい悲みに胸が一杯になつて思はずはら／＼と涙を注いだのである。佛陀は早くもこの忠實な愛すべき侍者の心の中を推察して申された。「阿難よ、私は以前にくたびもお前のこゝろいふ女々しい感情こころを止め得るやうに教を垂れた筈である。父母兄弟姉妹等私共の一番愛しいものから我々を隔てるものが二つある。即ち死と距離である。私の如きたとひ、佛陀のさとりを開いたものでも、閑靜處に大きな徳業を行つて居りながら、神變を現じて、三十三天に上つて一夏を送つた時には、距離といふものに依つて起される變化を受けねばならなんだではないか。即ち距離は、私をして私の一番親愛なものから離れさせたのである。然し互に離れたからといふて自他のために涙を流すといふことは、無用のことではあるまいか。相應なことであるかも知れぬが、つまらぬことではないか。又どんな悲しいことでも、悲泣と慟哭にふさはしい出來

事の起ることがあるものではない」。佛陀はいろいろの教化を垂れて阿難の悲みを慰め、慰籍を以て阿難の胸を満し給うた。

佛陀はこの大弟子のために讚美の記念として、祇園精舎の門邊に近く、一の塔を建て給うた。かくて大弟子の偉大を表明する記念を成就して、祇園精舎を離れ王舎城に歸らんと決し給うた。阿難はいつもの如く直に出かけうるやうに諸の比丘に指圖さしずをした。

世尊は最後に王舎城を訪うて竹林精舎に入り給うた。この精舎につき給うてから間もなく、他の大弟子目犍連も亦涅槃に入られた。一片の布をもつけず赤裸で日を暮して居る外道の比丘等は佛陀が人々の尊信を受け、佛陀及びその御弟子方がいつも豊かな供養を受けてゐる給ふをみて常に嫉妬の情に堪へないのである。イシギリ山の暗い洞穴の中に居られた目犍連はその偉大なる才能と深奥なる智慧とに依つて、人民をして佛陀に尊信を拂はせる原因ゆゑをなして居ると思はれて居たのである。裸形外道等は目犍連を殺さんと決心したそのために、彼等は五百名の盜賊共に武装せしめて目連を殺さへすれば一千斤の銀の報酬を與へやうと約定した。この恐ろしい教唆をうけた暗殺者共は二度その洞穴を襲ふたが、目連尊者は二度共、その兇手をのがれられた。然し、最後に、その前生の惡業のために、

盜賊共の手に落ちて敢なく殺されられた。兇暴なる盜賊共は無殘にも尊者を打つて打つて打ちまくり、さながら爛れ肉の塊のやうに打ち碎いて死骸を藪の中に捨てた。この恐ろしい殺戮のうはさはすぐさま全國に傳つた。國王阿闍世は殺害者を捕縛して、その自白に依つて裸形外道の使囑に出でたといふことを知り、直に外道を捕縛して、宮殿の前に一千の穴を掘り、穴毎に一人の外道を埋め臍の邊りまで土を被せて、一面に藁を布いて火を放ち、惡者共を火炙りにして殺して仕舞うた。

佛陀の弟子達はこの目連の非業の死を聞いて、大に悲しんだ。教團の長老にしてなほこのやうな非業の死を遂げねばならぬ理由は何であらうかと怪しみつゝ語り合つた。佛陀は比丘等の胸中を察知して宣うやう。「愛する比丘等よ、御前達は何を語り合つて居るのであるか」。彼等は尊者目連の非業の死について語つて居りますと答へ奉つた。佛陀の告げ給うやう。「私は御前達に告げる。目連は前生の業の報を受けて死んだのである。我が愛する子は、その前生、妻に唆かされて、年老いた盲目の両親を森の中に捨て、暫らく立ち去り、強盜の装をして、両親を殺して、死骸を叢の中に捨てたのである。この罪に依つて、彼は千年の間地獄の苦惱を承け、この最後生に於てこの殘忍な死様をしたのである」。かくの如く

語り給うて、世尊は竹林精舎の門邊に、目連のために一の塔を建て給うた。

第十四章

- (一) 吠舍離城へ。
- (二) 惡魔の最後の誘惑。
- (三) 地震の原因。
- (四) 諸比丘に對する法教。
- (五) 佛陀最後の供養。
- (六) 佛陀の御病。
- (七) 末羅の公子弗迦耆との邂逅。
- (八) 佛陀入涅槃の先表。

- (九) 俱尸那羅の沙羅樹林。
- (一〇) 佛陀の横臥。
- (一一) 沙羅樹林の不思議。
- (一二) 阿難陀へ法教。
- (一三) 阿難陀を讚嘆し給ふ。
- (一四) 須跋陀の入道。
- (一五) 佛陀最後の語。
- (一六) 入涅槃。

佛陀は王舍城を離れて吠舍離に歸らんと欲する旨を阿難に語り給うた。その途中恆河の右岸に於て**オーカトセラ**といふ土地に於て又舍利弗目連について語り給うた。そこから世尊は恆河を亘つて吠舍離に道を取り給うた。その日世尊は市に入つて食を乞ひ阿難に命じて、座具をとり、**遮和羅の祠**に行いて一日を過さんとしたまふた。命に従つて阿難は佛陀に従つて、**遮和羅の祠**の美しい場所に座席を設けて佛陀を待ち、佛陀に近づいて申すやう、「こゝは非常に結構な處であります。」と。世尊はこの場所に於て、阿難に向ひて吠舍離の

隣國の特色を擧げて賞讃し、その國々の塔を讚美し給ふた。世尊はこれに附け加へて宣ふやう。「阿難よ、賢き人々は四神足を成就し、四神足を得たる人は、その欲するに従つて一劫若くは一劫以上、壽を此に留むることが出来る。私はこの四神足を成就した。私は無限の年月の間茲に止まつて居ることが出来る。」世尊は三度同じい語を繰り返し給うたが、阿難は惡魔の係蹄にかゝつて、只佛陀の前に頭を垂れて、人類のために世尊の猶永へにこの世に留まり給はんことを願ふことを知らないのである。

その時、阿難は惡魔に迷はされて世尊の御前をすさり、程近き樹の下に行いた。阿難が世尊の下を去るや、惡魔は世尊の獨りにて在すをみて近づき程よき處に立ちて申し上げるやう。「最勝の法を宣傳し給ふ世尊よ、今は世尊の涅槃に入り給ふ時であります。世尊は嘗て弟子達の智慧の進まない間は、身口意の三業を支配することの出来ない間は、法をきゝ法をさとり且つ又法を説く力の缺けて居る間は涅槃に入らないと宣ひました。然るに今や教團の比丘も比丘尼も悉く總ての法を學びました。彼等は皆自分の欲情を制するに充分の力を持つて居ります。彼等は又人類に法を傳へることが出来ます。無色天も色天も世尊の教をきいて限りなき有情が解脱を得ました。されば、今や世尊の涅槃に入り給ふべき時でありま

す。」佛陀は惡魔の惡性を知り給うて宣うた。「惡魔よ、私のことで心勞するな、私は間もなく涅槃に入るであらう。」

世尊はかくして遮和羅の祠近くにお給うて、たとしへなき平和な思惟三昧の境に入り給うて、生存を超えて、宛も生を離れられたやうに見え給うた。然しこれは人々が手の中の石を投げ捨てるやうに、生を捨て給うたのではない。欲界の生を遠離し、放棄し、色界無色界の報果を生ずる力以上に出て、功罪に依つて輪廻のわだちをめぐらしめる力を超え給うたのである。宛も勇士が戰場に於て觸るゝものを悉く斬り捨てるが如く、佛陀は今までの生存の撃縛を立ち切り給うた。その時大地は非常に烈しく震動して、人の頭の毛を、豎立たしめたのである。世尊は宣ふやう。「私は物質の世界、欲情の世界の勢力を超え、生から生に移らしめる輪廻を起す勢力をも超え出た。私は今、上なき心の平靜を得て居る。宛ら勇士の戰場から歸るが如く、すべての欲情を征服した。私は生存の原因を破壊し盡して生存を支配することが出来るやうになつた。」佛陀は人々が「涅槃に御入りなされ」と曰つた惡魔の語におびえて、こゝにいふ状態に入り給うたのだと推論せんことを恐れて、ことさらにこのやうに宣うたのである。

(一)この場合佛陀の占め給うた特殊の状態を了解するは頗る困難である。我々の住んである地球を動かすやうな劇しい動亂を起したといふのであるから著しい出来事には相違ない。佛陀のこの特殊の行爲を記すに用ひらるゝ語の唯一の説明はこゝにいふことである。佛陀は生存を捨て給うた。即ち佛陀の受け給うた現實の生存のみならず、あらゆる他の生存をも捨て給うたのである。佛陀はこの世界及び他の他界の關係を斷ち給うた。これまで生存に結び付けて置いた繫縛を破り給うた。今や輪廻の最後に來給うたのである。佛陀は意志の力に依つて、存在するすべてのものから、自我からも離れた絶對の孤獨、即ち涅槃、死が直ぐ實現して諸弟子の眼に見えるやうにする涅槃に達し給うたのである。涅槃の状態に達せしむるものは死ではないが、涅槃はあらゆる考へ得べき生存から離脱すること、そのことが涅槃の主質を構成してゐるのである。

この佛傳の著者が、佛陀のこの状態、恐ろしいこの大地震を起した佛陀の特殊の状態を、説明するに用ひた語はこゝである。佛陀は轉變無常の生を離れ給うた。即ち生存、佛陀に従へば生存といふは轉變の理から作られたものであるが、その生存と何等關係のないものとなり給うた。佛陀は完全に欲情を征服し給うた時に自ら善那即ち勝者と名乗り給うたが、今完全に生存を征服し給うた時も、我等は同じ善那の稱號を奉ることが出来るのである。この最後の勝利は最大のものである。第一のもの(成道)は第二のもの(涅槃)を得る準備に過ぎぬ。私はこれらのことが讀者とは余り親しみが無いことは能く知つてゐる。然しこれらのことを完全に正しく了解するには佛敎の敎理に余程親しくなつて居らねばならぬのである。

初轉法輪の説法は前に記した通り、佛陀の公生活の初め菩提樹を離れて直ぐベナレスに近い鹿野苑になされたのであるが、その時も、同様の地震を起したのである。初轉法輪の説法は四眞諦の理の闡顯に外ならぬ、その四眞諦といふは前にもいふ通り佛敎敎理の主質を構成するものである。

阿難は地の震ふをみて、恭しく世尊に近づき、世尊を禮し終つて一面に退き、非常に恐ろしい地震のあつた原因を御尋ね申した。これに對して佛陀は教へ給うた。「我が子よ、地の震ふには八の原因がある。一には、地は水に依り、水は風に依り、風は空に依つて存在して居るので、風が動いて來ると水を動すから従つて大地が震ふのである。第二には地水空の孰れか、非常な力を與へられた時に地震が起る。第三には菩薩がその最後生に於て入胎し給うた時、第四にはその降誕の時、第五には佛果を得給へる時、第六には法輪を轉じ給ふ時、第七には生を思ふまゝに支配し放棄しうる境地に入り給ふ時、第八には涅槃に入り給ふ時、この時に地が震ふのである。阿難よ、私が佛陀となつて間もなく、尼連禪河の岸の優留毘羅の幽居にあつた時、惡魔が私の前に顯はれて、涅槃に入れとすゝめた事がある。その時私はその請を斥けて左の如くいつた。『惡魔よ、敎團の比丘比丘尼並に男女の俗弟子はいまだ充分の智慧と深慮と洞察力と勇氣と決意とを有して居らない。彼等はいまだ最勝の法の眞隨を得て居らない。彼等は猶人に法を説くことが出來ぬ。私の敎はいまだ充分の根柢に立たない、それであるから私の涅槃に入るべき時はいまだ來ないのである』と。處が今遮和羅の祠近く惡魔は再び顯はれて、私に向ひ同じいことを願うた。『惡魔よ、心配するな、今より三

月後には涅槃に入るであらう』と私は彼に曰つた。かくて私は四神足に依つて生存を支配する境地に入つたのである。』

(一)釋尊自ら忠實なる侍者阿難陀に語り給うた惡魔來現といふことは、惡魔が絶間なく佛陀の御仕事の邪魔をしたこと、佛陀が無数の有情に解脱を得しめ、解脱の聖道に入り、嚴に聖道を遵守するやうなさしめ給うた仁慈の御仕事を幾分なりとも無功にしやうとしたことを物語つてゐるのである。惡魔は佛陀の出家と成佛とを邪魔しやうとして失敗した。又佛陀の説法の効果を弱めやうといふ惡計にも敗れた。あらゆる外道は佛陀及びその教團に對して最も積極的な戰鬥をなさんがために惡魔の麾下に召集せられた。しかも惡魔は悉くその惡計を敗られた。佛陀は今や殆んど佛陀の企て給うた偉大なる仁業を成就し給うた。佛陀の教は至る所に廣まり熱誠なる弟子達に依つて四方に盛んに宣傳され今や確立したやうに見えた。實際に、殿堂は既に立てられたのである。たゞ仕上げを要するのである。丸天井を完全にし丈夫にするために要石が^{かまめいし}入用なのである。惡魔はこのことを皆知つてゐた、それで今まで邪魔をしやうとしては失敗した佛陀の御仕事の完成を礙げやうために奸惡な努力をしてゐるのである。

教團の人々と、佛陀の教を信する丈けで家を捨てないでゐる人々との區別は明かに佛陀に依つてなされてゐる。それで佛教の初めから俗人の一團と比丘の一團とはつきり分れてゐたことは疑ない。又所謂教團と曰はるゝものの中には男も女もあつて、勿論別居し、制欲の生活を送り、今日毘尼の中に含まれてゐる律條を遵守してゐたのである。緬甸に於ては、世を捨て、宗教的生活を送るこの比丘尼に至る所にあることはあるが、前の註にも示した通り大變に衰頹してゐる。比丘尼の數も少なく、律法を外面的に遵奉することすら衰へてゐる。

佛教國に於ては、佛教の何物をも收むる度量と、すべての人を同じい平面に並べ、徳の殊勝といふ外に、人と人との間に區別を設けぬ主義と、及び佛教の澎漲する性質と、これらのいろ／＼の著しい特性が大に働いて、婦人の性格を高め婦人の位置を男子と平行の位置に擧げてゐるのである。精神的な所得に依つて、佛陀の完き第一位の弟子達の間に婦人の列せしめられてゐるのを見て、どうして婦人を根本的に男子よりも劣つたものと考へることが出来やう。それで佛教が深い根を下して、その國狀に大勢力を有してゐる國々では、婦人の狀態は大に改良せられて位置も高められ、佛教の廣まつてゐなくて、その住民の習俗に著しく影響を及ぼしてゐない國々の婦人よりはずつと善い地歩を占めてゐるのである。

阿難は世尊に申し上げるやう。「世尊、欲色無色三界の有情のために一劫の間世に住して下されたいものであります。』佛陀は答へ給うた。「阿難よ、汝の願は餘りに遅い。最早その願はきかれない。』阿難は三度この願を申し上げた。而して三度その願は斥けられた。「阿難よ、汝は私が菩提に入るべき四つの道を知り、四神足を具ふることを信するか。』「私は左様に信じます。』「阿難よ、汝は、今より少し前に四神足を具ふるものは、その意樂に依つて一劫の間この世に壽を留むることが出来ると語つたことを覚えて居るか。私は又私がこれらの四神足を具ふることも附け加へて置いた。然るに汝は默然として壽を留めて貰いたいと願はなんだ。今やその願を申し出す時は過ぎ去つた。阿難よ、これより娑羅樹の森、大林の重閣講堂に行かうと思ふ。』世尊はその地に數日を過し給うて、阿難に命じて吠舍離に行

くやうに用意をさせ、諸の比丘達を講堂に集めしめ給うた。やがて阿難、比丘等の講堂に集まつたことを申し上げるや、坐を立ちて講堂に入り設けの坐席について、左の如く語り給うた。「我が愛する兒等よ、私の無上の智慧に依つて見出した法は既に悉く汝等のために説き終つた。汝等は注意深く且つ耐え忍びてこの法を聞き堅く法を守り、熱心にこの法を説き廣めた。今や我が教は長く世に傳はつて、諸天の福祉を得べき源となるであらう。然し我が教をして長く傳はり、光輝を放たしめ、限りなき利益を生せしむるには、常に三十七道品に大なる注意を注がねばならぬ。この三十七道品はすべてこの善行の源であるからである。これらの法をば、汝等は私の教に依つて能く知り了つた。すべての有情にこの法を説くは、汝等のつとめである。常に生あるもの、死に歸し、盛なるもの、衰ふる理を默想せよ、私は間もなく三月の末には涅槃に入るであらう。我が事はこれで終るであらう。」

(一)この緬甸あたりの佛教徒は、彼等の祖先の風を學んで、いろ／＼の哲學的な問題について、任意に數目を設け分類をすることを好んでゐるが、今この場合も、佛陀は哲學的及び道德的智識の基本といふべきものを三十七品に分ちて説き給うたのである。道品の原語は Bodhipakkhiya 智慧の分或は品といふのである。この三十七道品は七類に分たれる。

第一には、一番注意すべきものを四つ數へてある。即ち四念處といふもので、身、受、心、法がこれである。

第二には我々の最も努力せねばならぬことを四つ擧げてある。即ち四正勤である。未だ顯はれない惡法を防ぎ、既に起つた惡法の増長を止め、未だ顯はれない善法を生ぜしむるに勤め、既に起つた善法の増上を計ることである。第三には、精神を込めて自ら支配すべきものを四つ示してある。即ち 如意足である。意欲、念、精進、思惟の如意足である。

第四には、五つの特殊な又道に必要な性情を示してある。即ち、信、勤、念、定、慧の五根である。

第五には、前の殊勝の性情から生ずる善き結果たる五力を出してある。信、勤、念、定、慧の五力である。

第六には、人をして聖道の奥深く進ましむる七つの徳を擧げてある。擇法覺支、精進覺支、喜覺支、除覺支、捨覺支、定覺支、念覺支である。

第七には、善と完全とに導く道で、正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定である。

これら三十七道品のことを註解し説明するには、一卷の書を要するが、このことは讀者自身想を凝して研盡し、印度の聖者の開かれた形似上句の廣大な廣野を自由に馳けめぐられた方がよからうと思ふから説明は止めて置く。

翌朝佛陀は衣をつけ、左手に鉢を取つて乞行し給うた。食事を終つて、佛陀は象が後ろを振り返る時のやうに、嚴かに身をめぐらして國中を通して眺め給うた。かくの如く世尊が象の如く身をめぐらして吠舍離城を眺め給うたのは、自ら阿難に語り給うた如く左の理由に依るのである。すべての佛陀の頸骨は普通の人の様に鎖の輪の様につながつて居るのではない。堅い一本の棒の様な骨があるのである。それで後ろの物を見やうとなされる時に

は、頭だけふり向くといふことは出来ないで、象の様に全身をふり向けねばならぬのである。今まで斯ういふ場合には、佛陀は少しも御力を勞し給ふことなく、大地か陶器の車のやうに、獨り手に自然とめぐつて、世尊の覺召のものが自然世尊の御前に顯はれたのである。吠舍離の市は三年間の中に、阿闍世王のために滅ぼされる運命にあつた。佛陀は常にこの市の人々より種々の尊敬と供養を受けてゐ給うたから、この市の人々に對して非常に同情を感じ給うたので、この運命の定まつた市に對して其後の悲しい名残をなし給うたのである。これが最後に振り返つて吠舍離城を眺め給うた理由である。

佛陀は**ブハンダ・ガーマ**に着き給うた。ついで、**ハツトヒ**、**チャムフウ**、**アンバ**の村々を過りて、**負伽**の市に入り給うた。この市に於て、四大教法を説き給うた、佛陀は更に阿難に命じて、比丘等をして旅の用意をなさしめ、卒ゐて**波波城**に赴き、富裕なる鍛工の子**淳陀**の建立した椽樹林の精舎に入り給うた。淳陀は嘗て世尊に見えて道を得、歡喜の餘り精舎を建立して、四圍の森と共に佛陀に奉つたのである。世尊が波波城に入り給うたのは**カチャ**の月の上弦の十四日であつた。

世尊の精舎に入り給ふとき、淳陀は急いで、精舎に到つて、世尊の御前に出で、拜禮した

つて一面に坐し、世尊及び弟子衆の明朝、供養の食を受け給はんことを請うた。世尊は默然としてこの請を許し給うた。淳陀は立ち上つて禮し右に繞つて精舎を去つた、夜を通して種々の珍味が調へられた。淳陀は肥えても居らず瘠せても居らぬ程よい一頭の小豚を持つてゐたが、これを殺して、微妙な方法を以て米と一緒にして料理した。天人は密に天より下つて最高の香料をこの中に混じ入れた。夜明に、すべての用意が出来て、淳陀は自ら精舎に行いて世尊及び比丘衆を請じた。佛陀は立ち上つて鉢を取り、淳陀の家に入り、設けの坐席に即き給うた。世尊は自ら小豚の肉と米とを取りて食し給ひ、弟子達は他の食をとつた。食事が終つてから世尊はこの豚肉と米の残りはすべて大地の中に埋めるがよい、私を除ては、色界無色界のものも消化すことの出来ない食物であるからと宣うた。暫らくして世尊は猛烈な痢病をわづらうて非常に苦しみ給うた。然しこれはその肉食をなされたためではない。さうでなくとも同じい病氣に犯され給ふ約束にあつたので、寧ろその肉と米との料理の中に天人が最良の香料を入れて置いたから、その肉食に依つて、却つてその苦痛を軽減せられたのである。

佛陀は阿難と共に、俱尸那羅への旅に上り給うた。その旅の道にて、疲勞を覺え給ふこ